丙子雜俎

三

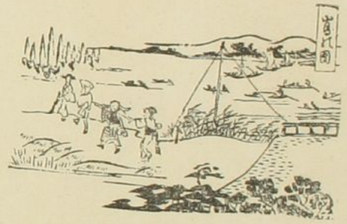
昭和十一年二月下浣

特別
イ4
1919
474

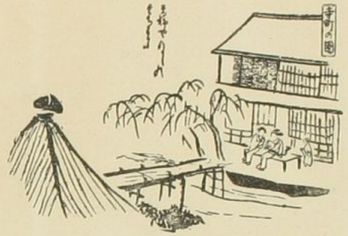
新潟後の月見柳傳

（説明本文にあり）

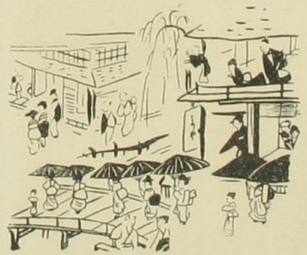
（一）熊谷小路の圖



（二）島の圖



（三）寺町の圖



（四）白山祭の祖頃城宮參りの圖

38 9260

176739

雨子雜録（三）

昭和十一年二月廿四日起草

のいつもや鏡考に興味を感じて超然に考いた時、西洋の興味ある鏡の話いろいろと考ひえるうつの比。北陸モーのハウサンの紹介高山城を二三日後でのるが、戦争と関する北陸がある。先い伊藤西がオーストリヤ軍に包囲を受けて悩まされてある時の事で、墺軍駐屯の其伊地の寺い古鏡後鏡を吟ることが無かつたので、時間がないので敵軍が不使と嘲を試し、鏡を吟ることをやめて拾んで受けつけるこうした。えんが敵軍を刺しての敵情

心の発露であるが、ある時駐屯の模様と一樽すが起つ
た。一夕宴会を張つた席すがい、伊の婦人も仲間に席を
立つたが、田五将校が酔後の乱痴気騒ぎを、婦人な
ぶる祖国を侮辱する将校の言動に敵愾心を起した
一人の婦人が、懐剣を閃して一人の将校を刺して死
しめた。此椿事が大騒きとなつたが、手を下した婦人を救
しかいどこへ逃げけんが、どうしても見出すことが出来なかつた。
殺された将校の葬儀は、銃を持つて行くことを拒んでゐる者
で執り行ふことになつたが、其時は表に銃を持つて
ある。それも其寺を取つたの表に銃をあつたのを
こんが表を飾り、愛国心の強い婦人の墓の意味
味がある。敵の将校を殺した婦人も此寺の墓

榛原製

校とかくされて、敵軍の去る後、もとの婦人に戻り帰さん
た。此の婦人の墓は行者が後の祠制とされたが、
墓の傍に墓が建てられ、民家とされたと云ふ。
だから、此の話は殺された将校マドモワゼル、フイフイ
の若さをうつしたのである。

葬式の場合、棺を銃を持つてことを拒んだ日
本婦人と懐軍が時にとくさんおれのも感
情し、交渉すること一七二七日
勿論式が終つた時、銃が持つて来た場合出
さして村人が銃と感がさしたんかさいうと疑へ
めたが、それは敵を去の敵を
もあつたのだ

○昨廿六日ハ テリブルの日であつた、自分は前夜の胃痛び絡
日病床にあつたが、朝の九時頃娘の友達から電話がかゝ
つて大変なことが起きた、お米を澤山お買ひなさい。銀行
へ預けてある金は急にお取りなさいとのこと、驚愕した
所まつたくと思へたが、段々方々からくる電話の二ユース
で昨晩陸軍が枢密院を次つて開戦の前相官邸を
相鈴木侍従長、海軍陸軍大臣を襲撃
して即死せしめたとのこと、株式の立
会と手形交換が中止され一二大銀行のみの昨休業
であると傳へ、其々迅速の電車不通と傳へ、京阪と
宇都宮の聯隊、高射砲隊の為め進出すること傳
へ、戒厳令が布かれたとのこと、病床にありながら、

得ないが、要路の市中が騒擾であるから内亂が起つた譯でもあるまいと、記載の大意の次第をしたためて矢吹く電話をかけたものとて、主人は今朝六時頃報を得て徒歩で登廳したとの巷を得て、容易ならぬ事件であるが、多分前の片山少將を殺したと同じ趣意であらうかと思はれる或る人の電話には奈良の第一師團が滿洲に渡ることのようであるが、彼等は滿洲に起ければ勢積の憤懣を洩すことが出来ずして、往日きがけの駄賃に北墓等を殺人したのだと云ふ說もあつた。當時進々平入つた二十六日は日曜日で伊豆の湯河原に在る牧野内府をも襲撃したが、内府は先ず身を避したとの報もあつた。斯る大切の場合に新聞の號外も出ずに奈良朝の夕刊も

標原製

（第三種郵便物認可）

内閣總理大臣臨時代理

後藤内相兼任に決定

廿六日午後宮中閣議の結果内閣總理大臣臨時代理は後藤内相兼任に決定した

東京日日新聞

（明治二十五年二月八日第三種郵便物認可）

昭和十一年二月二十六日（水曜日）

編輯兼印刷發行人 相馬基
大阪毎日新聞社東京支店
麹町區有楽町一丁目十一番地三號
東京日日新聞發行所

號外

國體擁護を目的に
青年將校等・重臣を襲撃
岡田首相、齋藤内府
渡邊教育總監を射殺
高橋藏相、鈴木侍從長負傷

【二月廿六日午後八時十五分陸軍省發表】本日午前五時ごろ一部青年將校等は左記個所を襲撃せり

首相官邸、岡田首相即死(一)齋藤内大臣私邸、内大臣即死(一)渡邊教育總監私邸、教育總監即死(一)牧野前内大臣宿舍(湯河原伊東屋旅館)、牧野伯爵不明(一)鈴木侍從長官邸、侍從長重傷(一)高橋大藏大臣私邸、大藏大臣負傷(一)東京朝日新聞社

これ等青年將校等の蹶起せる目的はその趣意書によれば、内外重大危急の際、元老、重臣、財閥、軍閥、官僚、政黨等の國體破壞の元兇を芟除し以て大義を正し國體を擁護、開顯せんとするにあり

右に關し在京部隊に非常警備の處置を講ぜしめられたり

戰時警備令で治安維持

東京警備司令部發表(廿六日午後七時)　一般に對する官廳公示事項(一)本日午後三時第一師管戰時警備を下令せらる(二)戰時警備の目的は兵力を以て重要物件を警備し併せて一般の治安を維持するにあり(三)目下治安は維持せられたるをもつて一般市民は安堵して各々その業に從事せらるべし

内閣總理大臣臨時代理
後藤内相兼任に決定

廿六日午後宮中閣議の結果内閣總理大臣臨時代理は後藤内相兼任に決定した

芳行氏、うじ夫は停止しようとうたが、此事件を聞しんへ
何事も報ぜず、極めて粗略的体態と思はれんれが、流石に新
戦争の放送のやうなつもり
扨て翌朝廿七日の号外の東京日々の新聞
が達して吉態が初めて明かとなりて、朝日・日々の
両方とも定刻に達し独りて事件の大要が記されて
あつた。日扨て郵外やう新聞を見て始め全く耳を聞んな
ふうに事件の齎府の殺されたことで、高橋是清
は即死したと呼ばれんれが負傷とあるのも意外の思
ひ、負内石塚と印が訪い来つての話しに、負分い此
こは夜寝しに、数度前内府が湯ヶ原と花歌撃ちされ
ことを旧京の金中屋主人で夕へに帰宅に湯ヶ原仲東

屋の旅館を借り切つてゐたのだ、ここを襲撃した此
銃で応戦したが一士官を撃ち殺した此を殺さえ、多の負傷
もあつたが、数度は何んなう適入したので其の家屋を焼いたと
あるの北の暴挙は先の数度襲撃
が、なるも其所であるらしい。高橋是清
はらしい財界の影響者を厳密して特に負傷とあつて兵
るらしい新聞社の両方を高橋朝日が輪転機を破
壊さえた、高橋内閣総辞職の御聴許ありて、一木喜
徳郎を首相として各大臣は留任することとなつたと云ふの
が石塚の伝ふる所である、此件の関係者は国報告を
行さんとのことから、此の事件の顛末を一応書
(二月廿七日記)

廿七日より廿八日の頃より二日間都下戒嚴令下りあんとも極め平穏なり此に於て紙の表に自由の義を許さるる廿八日朝日新聞に高橋義雄の死を傷むるのみ、香椎中將戒嚴司令官の告諭に流言蜚語を惑いやる莫れとあり之れは伝て流言蜚語の所在行はんとするを反面に於ては知るの又或は傳へ警視廳を占領する亂徒の未だ武器を解除せざるを以て警視廳は陸軍省に移り警視廳の隊員は全く解散せり、陸軍は戒嚴令下に於ては市街戦も辞さず全本部の元に集合の軍人會館の家屋を堡壘を築き、夫れ(廿八日)九日(二日)附にて自動車交通を差留めらる、或は曰く西園寺侯入京の為

榛原製

めの警戒なりと、亂徒は武器を解かず、内閣総辞職の行為はギヤングと異なる所なし、役者は武職者なり、或人曰く卑怯武を潰す者なり、或人曰く此の未曾有の不祥事を生ずるに至りしは畏れ多き事なり、或人曰く今次の事変の一因は一千五百人、道の警戒に当れる者、内部の保安警戒の為に欠如せり、或人曰く此の騒擾は公判の交之に因りて起りたるなり、又一部の逆賊も撃つべしとの訳勅出ず、今夜或は市街戦起るべし、永田町を中心とせ

行ひつゝあるを報ず（午後二時半記）夕刻五時（三時）より雷汽を以て報する所の新政府の報を占領しこれを撥つて出来ず、遂に勅使を以て（武装解除）を退去命ずることゝなる

前と変きし訳勅旨命令か、行幸の日の乱徒と占領せんとするもの初めてなる所也、まゝ〻ゆるすもうじきも此時は十時過ぎ

うじは勅旨の乱徒番所門前に来る他の都下一団体穏健陛下の軍は大命を奉じて行動しつゝ元気旺盛なる

北の司令部なるに依ると、小田原を深更行きたれと知らるる命令なるべし

廿九日の朝うじは戒厳司令部の報を聞きしに曰く乱徒勅命に服せざるゝ金子討伐せんを八時より

永田町を出で、北に二の外四大使使等

く接遇せんとす底知るべし彼等が特に撥りなるを

外交的分更に拒絶を笑しなる数（廿九日朝八時二十分

録）

九時に一方司令部より銃砲の響が聞こえ文人の手紙

もん心意とするとあり、尚流弾の危険なん

ばの成るべしと出でさる撥すると注意あり尚国交通の乱

れは戦争の為也雷車汽車軍の軍輸中止の命出づ、又

秀樹長官の乱徒の報する生論出づ、賊と云し既

に勅命なる田心と復せるを命せらるゝの所は行きかゝり

を棄てゝ、抵抗を続ける心なきを（聞）勅令（降る）まで
今日於て海へ（る）勉きうあるまで、改むるに於ては罪も許さる
べし、卿等の復帰は父兄の望む所なり、国民の求むる所也
と（十時四十分）
右の記事著し暑り朝日の新聞社づ左之通を掲ぐ

涙を呑み武力に訴ふ

＝戒嚴司令部發表＝

《戒嚴司令部二十九日午前六時二十五分發表》二月廿六日朝蹶起せる部隊に對しては各々その固有の所屬に復歸する事を各上官よりあらゆる手段を盡し誠意をもつて再三再四説諭したるも彼等は遂にこれを聽き容るゝに至らず、そもそも蹶起部隊に對する措置のため時日の遷延を敢て辭せざりし所以のものは若しこれが鎮壓のため强硬手段をとるに於ては流血の慘事或は免るゝ能はず不幸かゝる情勢を招來

六、その外廓は交通停止區域（以上地域は戒嚴司令部より地圖による發表）

東京朝日新聞 號外
昭和十一年二月廿九日
東京市麹町區有樂町二丁目三番地
發行所 東京朝日新聞社

戒嚴司令官の告諭

香椎戒嚴司令官は廿九日午前六時二十分左の如き重大告諭並に市民の心得を發すると同時にこれを市内各署管内の交番にも夫々掲示して市民に注意した

告諭第二號

本職は更に戒嚴令第十四條全部を適用し斷乎南部麹町區附近に於て騒擾を起したる叛徒の鎮壓を期す、然れども其地域は狹小にして波及大ならざるべきを豫想するを以て官民一般は前告諭に示す兵力出動の目的を克く理解し特に平靜なるを要す

昭和十一年二月二十九日　戒嚴司令官　香椎浩平

右につき市民の心得

本二十九日麹町區南部附近において多少の危險が起るかも知れぬがその他の地域内は危險の虞なしと判斷される、市民は戒嚴令下の軍隊に信頼し沈着冷靜よく司令部の指導に服し特に左の注意を嚴守せよ

一、別に示す時機まで外出を見合せ自宅に在つて特に火災豫防に注意せよ

二、特別に命令のあつた地域の外避難してはならぬ

三、適時正確な情況や指示を『ラヂオ』その他により傳達するを以て流言蜚語に迷はず常に之等に注意せよ

昭和十一年二月二十九日　戒嚴司令官　香椎浩平

涙を呑み武力に訴ふ

―戒嚴司令部發表―

《戒嚴司令部二十九日午前六時二十五分發表》二月廿六日朝蹶起せる部隊に對しては各々その固有の所屬に復歸する事を各上官よりあらゆる手段を盡し誠意をもつて再三再四説諭したるも彼等は遂にこれを聽き容るゝに至らず、そもそも蹶起部隊に對する措置のため時日の遷延を敢て辭せざりし所以のものは若しこれが鎮壓のため强硬手段をとるに於ては流血の慘事或は免るゝ能はず不幸かゝる情勢を招來

するにおいてはその被彈地域は誠に畏くも宮城を始め皇王族邸に及び奉る虞もあり且その地域内には外國公館の存在するあり、かゝる情勢に導く事は極力これを回避せざるべからざるのみならず皇軍互に相擊つが如きは皇國精神上眞に忍び得ざるものありしに因るなり然れども徒らに時日のみを遷延せしめてしかも治安維持の確保を見ざるは寔に恐懼に堪へざる所なるをもつて上奏の上勅を奉じ現姿勢を撤し各々所屬に復歸すべき命令を昨日傳達したる所彼等は尙もこれに聽かず遂に勅命に抗するに至れり事既に玆に到る遂に已むなく武力をもつて事態の强行解決を圖るに決せり、右に關し不幸兵火を交ふる場合に於てもその範圍は麴町區永田町附近の一小地域に限定せらるべきをもつて一般民衆は徒らに流言蜚語にまどはさるゝ事なく勉めてその居所に安定せん事を希望す

避難の要領と區域

【廿九日午前七時十分戒嚴司令部發表】 萬一流彈あるやも知れず戰鬪區域附近の市民は次の樣に御注意下さい

一、銃聲のする方向に對して掩護物を利用し難を避ける事

二、なるべく低い處を利用する事

三、屋內では銃聲のする反對側にゐる事

四、立退區域＝市電三宅坂から赤坂見付、溜池、虎ノ門、櫻田門、警視廳前、三宅坂の結び線は戰鬪區域になるから立退きの事、この區域內には國會議事堂、霞關離宮、閑院宮邸、外務省、警視廳、府立一中等がある

五、立退き隨意區域＝半藏門前警視總監官舍から辨慶橋を繫ぐ外廓を行き黑田侯邸から大倉商業、靈南坂上、虎ノ門を繞る區域

六、その外廓は交通停止區域（以上地域は戒嚴司令部より地圖による發表）

十一時次のラジオは司令部●蒙古の情報を伝ふ、今次の変に際し陸軍南方軍特派員と報じ、陸軍南方軍特派員滅に帰還を説き熱烈至る所、一時の帰順者の如きも後に言を翻して新聞報道の如き無しと雖も新聞の言も無駄とならず唯此報道の中に士官以下の兵卒に理解せしめ向後の動向を動揺せしめざる所あり、元行政を利用し勧説書を印刷配布せしめたる結果所在帰順者を続出せしめたるものと思はる、帰順すべき旨の呼掛を行ひ

（明治廿五年三月十一日第三種郵便物認可）

東京朝日新聞

第三號外

昭和十一年二月廿九日

東京市麹町區有樂町二丁目三番地
發行所　東京朝日新聞社
輯兼印刷發行人　藤本尙[illegible]

岡田首相は生存す

射殺されたは義弟

今回の事件に關し岡田首相は官邸において遭難せられてゐたものと傳へられ誠に痛惜に堪へぬ次第であつたが圖らずも今日まで首相と信ぜられてゐた遭難者は義弟の松尾大佐であつて首相は安全に生存してゐたことが判明した

昨朝首相はまづ後藤臨時代理を經て闕下に辭表を捧呈し同夕刻參内して天機を奉伺すると共に今回の事件に對し宸襟を惱まし奉り恐懼に堪へざる旨深く御詫を申上げた所優渥なる御沙汰を拜し恐懼感激して御前を退下したのである次で後藤内務大臣に對し内閣總理大臣臨時代理被免の辭令が發せられた【内閣發表】

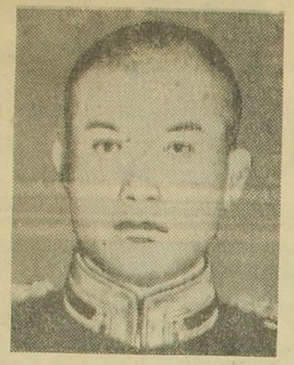
今回の事件に關係ある將校十九名は免官の内閣告示あり出の陸軍大中尉の姓名士官也

叛亂部隊の元將校等

大部分刑務所に收容

野中元大尉は自決

歸順兵は兵營に隔離



【一日午後四時戒嚴司令部發表第五號】一、叛亂軍の將校は廿九日その本官を免ぜられたり、右元將校中、野中四郎は自決し、爾余の大部並に叛亂に參加しありたる村中孝次、磯部淺一及び澁川善助は衛戍刑務所に收容ぜられたり

二、歸順せる下士官以下はそれぞれ兵營に隔離收容ぜられあり（寫眞は野中元大尉）

聲明

政府は今回の不祥事件に關し一日午前十一時から宮内省において緊急閣議を開き善後處置その他に關し協議を遂げ特に人心の安定を目的とする政府聲明の案文の内容並に形式等を決定し引續き重要勅令案等を審議して正午休憩、午後も續行したが政府の聲明は左の如くである

去る二月二十六日早曉圖らずも帝都に大不祥事件を勃發し　上は深く宸襟を惱まし奉り下は人心に衝動を與へたことは寔に恐懼に堪へず遺憾の極であると共に事是に至らしめたる責任の重且大なるを痛感する次第である。

事件は延いて内外に不安を惹起するの虞があつたので、政府は直に戒嚴令の一部を施行して秩序の回復に努め、次で皇軍の力に依り暴擧は鎮壓せらるるに至つた。

是れ偏に　御稜威の然らしむる所であるが而かも國民が異常の變に處して一般に平靜を持し、經濟界も亦其常態を失はなかつたことは國家の爲不幸中の幸であつた。

今や事件は鎮靜に歸した。宜しく朝野を擧げて、相共に矯激を誡め、制節を尚び、正を履み中を執り國民の本分を盡さんことを切望して止まざる次第である。

畏し齋藤高橋兩氏

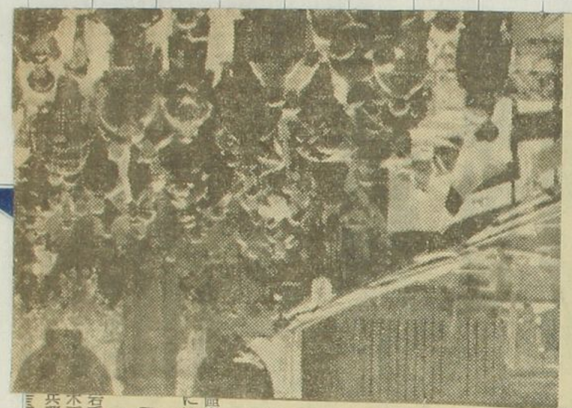
大勳位に敍せらる

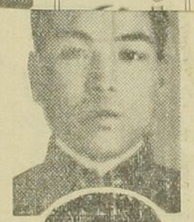
畏き邊りでは今次の事件に遭難した齋藤内府、高橋藏相に對し生前の勳功を嘉みせられ大勳位に敍せられたが同時に渡邊教育總監並に退役陸軍大佐松尾傳藏氏に對し二十六日付を以て左の如く御沙汰あらる

＝高橋邸を出る靈柩＝

頗山氏三年の刑確定、刑の執行は病氣による執行延期願が容られて今日まで延び〳〵となり三月一日延期願滿了により下獄の筈であつたが兩三日前大川氏等から再び醫師の診斷書を添へ大審院檢事局に執行延期願を提出したこの結果係りの柳町檢事は二日登廳と共に果して病氣が刑の執行に堪へ得ない程のものか否かの調査を開始する事となり從つて少くとも右調査の終了までは三氏の下獄を見ぬ譯であるがもし右調査の結果延期願が安當と認定されゝば檢事局は再び相當期間執行の延期を決定するので三氏の下獄は更に數ケ月後となる筈である

疾走トラックの横腹へ市電





明朝遺骸の維持

①暮靈柩付近 ②銀座尾張町角

弔問

麻布南千住町七ノ六二番地、家庭には妻女と二男二女あり

◇

警衛課勤務（首相官邸配置）

巡査　小館喜代松（三七）

岩手縣二戸郡御返地村大字上斗米下手六番地に生れ、海軍三等兵曹、昭和三年十月警視廳巡査拜命同七年警衛課勤務となり首相官邸詰となつたものである、住所、豐島區西巢鴨町一ノ三〇七五家庭には實母、妻、長女あり

◇

警衛課勤務（首相官邸配置）

巡査　土井　清松（三七）

福井縣坂井郡鷹原村牛山十二號ノ六に生れ大正十五年九月警視廳巡査拜命、昭和七年警衛課勤務となつた、住所世田谷區赤堤町一ノ一六家庭は實父實母養母妻あり

◇

警衛課勤務（牧野麗邊隨衛）

巡査　皆川　義孝（三七）

茨城縣東茨城郡上野谷村大字小幡千二百八十三番地に生れ、昭和二年四月警視廳巡査拜命、同九年警衛課勤務、牧野麗邊隨衛となり、住所王子區豐島町四百九七番地、家庭には兩親妻あり

◇

杉並署兼麴町署勤務

巡査　清水與四郎（三七）

蒲師區新宿町一ノ三三八二番地に生れ、砲兵上等兵、昭和八年七月警視廳巡査拜命、住所杉並區成宗町一ノ二七〇、家庭には兩親あり

◇

鳥居坂署兼麻町署勤務（總相官邸配置）

巡査　玉置　英男（三七）

奈良縣吉野郡十津川村大字折立八百五十三番地に生れ、海軍三等機關兵曹、大正十四年警視廳巡査拜命、住所淺谷區永住町五番地、家庭には妻と一男一女あり【富廣は上から清水、玉置、小館、皆川、村上、土井の諸氏】

畏し齋藤高橋兩氏

大勳位に敍せらる

畏き邊りでは今次の事件に遭難した齋藤内府、高橋藏相に對し生前の勳功を嘉みせられ大勳位に敍せられたが同時に渡邊教育總監並に退役陸軍大佐松尾傳藏氏に對し二十六日付を以て左の如く御沙汰あらせられた

敍大勳位授菊花大綬章　從二位勳一等　高橋是清

敍大勳位授菊花大綬章　正二位勳一等功二級子爵　齋藤實

授旭日桐花大綬章　正三位勳一等功五級　渡邊錠太郎

故大藏大臣從二位大勳位

敍正二位（特旨ヲ以テ位一級追陞セラル）　高橋是清

故内大臣海軍大將正二位大勳位功二級子爵

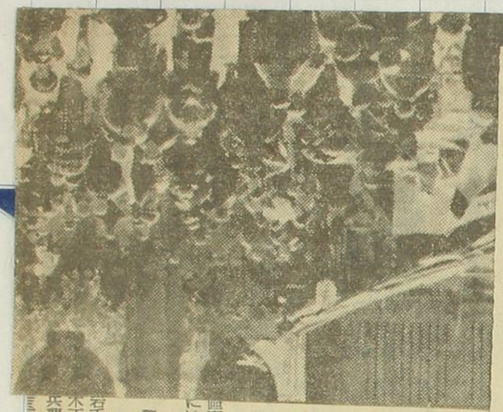
敍從一位（特旨ヲ以テ位一級追陞セラル）　齋藤實

故陸軍大將正三位勳一等功五級

敍從二位（特旨ヲ以テ位一級追陞セラル）　渡邊錠太郎

故陸軍歩兵大佐正五位勳三等功四級

敍從四位（特旨ヲ以テ位一級追陞セラル）　松尾傳藏



弔問

住所、豐島區西巢鴨町一ノ三〇七五家庭には實母、妻、長女あり

◇

警衛課勤務（首相官邸配置）

巡査　土井　清松（三七）

福井縣坂井郡鶴原村牛山十二號ノ六に生れ大正十五年九月警視廳巡査拜命、昭和七年警衛課勤務となつた、住所世田谷區赤堤町一ノ一六家庭は實父實母養母妻あり

◇

警衛課勤務（牧野侍從隨衛）

巡査　皆川　義孝（三二）

茨城縣東茨城郡上野合村大字小幡千二百八十三番地に生れ、昭和二年四月警視廳巡査拜命、同九年警衛課勤務、牧野侍從隨衛となる、住所王子區豐島町四百妻あり

杉並署兼麹町署勤務

巡査　清水與四郎（二九）

葛飾區新宿町一ノ三三八二番地に生れ、砲兵上等兵、昭和八年七月警視廳巡査拜命、住所杉並區成宗町一ノ二七〇、家庭には兩親あり

◇

鳥居坂署兼麻布町署勤務（藏相官邸配置）

巡査　玉置　英男（三七）

奈良縣吉野郡十津川村大字折立八百五十三番地に生れ、海軍三等機關兵曹、大正十四年警視廳巡査拜命、住所渋谷區永住町五番地、家庭には妻と一男一女あり【寫眞は上から清水、玉置、小館、皆川、村上、土井の諸氏】

警衛課勤務（首相官邸配置）

巡査　小館喜代松（三四）

宮手縣二戸郡御返地村大字上斗木下手六番地に生れ、海軍三等兵曹、昭和三年十月警視廳巡査

畏し齋藤高橋兩氏

大勳位に敍せらる

畏き邊りでは今次の事件に遭難した齋藤內府、高橋藏相に對し生前の勳功を嘉みせられ大勳位に敍せられたが同時に渡邊教育總監並に退役陸軍大佐松尾傳藏氏に對し二十六日付を以て左の如く御沙汰

＝高橋邸を出る靈柩＝

疾走トラックの横腹へ市電

頗山氏三年の刑確定、刑の執行は病氣による執行延期願が容れられて今日まで延びゝとなり三月一日延期期限滿了により下獄の筈であつたが南三日前大川氏等から再び醫師の診斷書を添へ大審院檢事局に執行延期願を提出したこの結果係りの棚町檢事は二日登廳と共に果して病氣が刑の執行に堪へ得ない程のものか否かの調査を開始する事となり從つて少くとも右調査の終了までは三氏の下獄を見ぬ譯であるがもし右調査の結果延期願が妥當と認定されゝば檢事局は再び相當期間執行の延期を決定するので三氏の下獄は更に數ケ月後となる筈である

首相官邸等警備の警官五氏殉職す

小栗總監がけふ弔問

小栗警視總監は尊い犧牲となつた別項の五殉職警官及び重傷を負うた玉置巡査等の見舞のため一日午前九時警務課の白石警部を伴ひ各家庭を弔問病院に玉置巡査を見舞ひ正午警視廳に引揚げた

【一日午後一時半警視廳發表】 今回の事件に際し首相官邸その他の警備に當りたる警官中殉職者五名負傷者一名があつた、その氏名經歷及び遺族は左の如くである

警衛課勤務（首相官邸配置）
巡査部長　村上嘉茂左衛門（三九）
福島縣安達郡木幡村大字外木幡字館八番地に生れ、歩兵上等兵大正十三年十二月警視廳巡査拜命、後警衛課勤務となり首相官邸詰となつた、住所東京市荒川區南千住町七ノ六二番地、家庭には妻女と二男二女あり

◇

警衛課勤務（首相官邸配置）
巡査　小館喜代松（三四）
岩手縣二戸郡御返地村大字上斗米下手六番地に生れ、海軍三等兵曹、昭和三年十月警視廳巡査拜命同七年警衛課勤務となり首相官邸詰となつたものである、住所、豐島區西巢鴨町一ノ三〇七五家庭には實母、妻、長女あり

◇

警衛課勤務（首相官邸配置）
巡査　土井　清松（三三）
福井縣坂井郡國原村牛山十二號ノ六に生れ大正十五年九月警視廳巡査拜命、昭和七年警衛課勤務となつた、住所世田谷區赤堤町一ノ一六家庭は實父實母養母妻あり

◇

警衛課勤務（牧野農遇隨衛）
巡査　皆川　義孝（三二）
茨城縣東茨城郡上野合村大字小幡千二百八十三番地に生れ、昭和二年四月警視廳巡査拜命、同九年警衛課勤務、牧野農遇隨衛となる、住所王子區豐島町四百九七番地、家庭には兩親妻あり

◇

杉並署兼麴町署勤務
巡査　清水與四郎（三二）
葛飾區新宿町一ノ三三八二番地に生れ、砲兵上等兵、昭和八年七月警視廳巡査拜命、住所杉並區成宗町一ノ二七〇、家庭には兩親あり

◇

鳥居坂署兼表町署勤務（藏相官邸配置）
巡査　玉置　英男（三七）
奈良縣吉野郡十津川村大字折立八百五十三番地に生れ、海軍三等機關兵曹、大正十四年警視廳巡査拜命、住所澁谷區永住町五番地、家庭には妻と一男一女あり【寫眞は上から清水、玉置、小館、皆川、村上、土井の諸氏】

麻布歩兵第三聯隊の天野少佐が拳銃自殺

飜意を促し聽かれず 死をもつて叛亂部隊に勸告

事件後、大東京市は全く靜穩に歸つてあらゆる機能は潑剌として活動、市民また嬉々として業にいそしみつゝ軍紀嚴肅なる皇軍に無量の感謝を捧げてゐるのである、この時に當り二日午後歩兵第三聯隊陸軍歩兵少佐天野武輔氏の自決と、陸軍省軍事課員陸軍歩兵少佐片倉衷氏の遭難とが初めて發表され皇軍に對する國民の信頼は彌が上にも重きを加へた

麻布歩兵第三聯隊付陸軍歩兵少佐天野武輔氏（こは廿九日未明第三聯隊兵舎の南側廣場においてピストルをもつて自殺した、同少佐は

○…自殺した天野武輔少佐

士官

士官學校第廿九期生で候補生の時から同聯隊に勤務してゐた、今度の事件については非常に憂慮し廿六日事件勃發以來幾度か聯隊長の命を受けて單身危險を冒して叛亂部隊の將校を訪れ極力かれ等の飜意を促したが遂に目的の貫徹を見るに至らなかつた、報國盡忠の心に燃える少佐はこの上は任務遂行のため且聯隊唯一の生え抜きの將校としてその責任と聯隊の名譽のため死をもつて最後の勸告をなさうとの悲壯な決意をなし廿八日の

夜半

かれ等を訪れんとしたが恰かもその時は非常に緊迫した空氣で叛亂軍の警戒が極めて嚴重であつたため八方手段を盡したが遂に叛亂軍將校と面接することが出來なかつたのでやむなく少佐は涙を呑んで歸隊し壯烈なる最期を遂げるに至つたものである

少佐は明治廿八年十一月廿二日豐橋市更町八の二五二に生れ大正六年十二月廿五日歩兵少尉に任官、大尉時代三聯隊から派遣せられて澁谷區代々木初台東京青英實業學校及び麻布區新堀町一一麻布獣醫畜産學校の配屬將校として學生の教育に專念し昭和十年八月一日歩兵三聯隊付となり今日にいたつたのである、少佐は性果斷にして淡白、部下を愛すること慈父の如くよく少壯士官の意見を容れて信望を一身に集めてゐた典型的武人であつた、澁谷區大和田九二の自宅には久子夫人（こと）との間に長女豐子さん（こと）と長男秀俊君（こと）この三兒と少佐の養母よし刀自（こと）がある

遺骸は一日善福寺火葬場で荼毘に付されて同夜は近親者たちが通夜を行ひ自刃の發表された二日夜はひつそりと鎭まり返つてゐた、少佐の玄關左手十疊の間には遺骨が三聯隊の同僚その他の關係者からの弔花に飾られて安置され「義節院殿忠誠武輔大居士」の戒名も少佐の人格とその義烈を物語つて余すところがないやうだつた

◇天野氏自殺の報をもたらして麻布獣醫畜産學校教授齋藤專作氏を訪へば驚いて語る

天野さんは責任感の強いしかも豪膽な方でありました、武人としては典型的な方といふべきでせう、當校へ來られてゐた間は極めて眞面目に教育に當られました、武人としての反面に非常に多趣味な方でありました

○…片倉衷少佐

陸軍省軍務局軍事課員陸軍歩兵少佐片倉衷氏（こと）は廿六日午前九時半ごろ陸軍省に登廳し意見具陳のため叛亂部隊の中を押分けて陸軍大臣官邸に赴き玄關を上らんとした際、一將校が少佐を阻止せんとした、豪膽な少佐はこれにも屈せず、「天皇陸下の命によらずして皇軍を動かすとは何事か」と大喝一聲したところ、歩兵大尉の軍服を著した一名の將校はピストルで少佐の側面から頭部を射撃した、

片倉少佐負傷す

事件勃發の日 陸相官邸で

少佐はこれにもひるまずなほも官邸に入らんとしたが、出血多量のため遂に卒倒せんとし同僚の山崎正男大尉に助けられ付近の病院に收容手當中である、經過は非常に良好で生命には別條がない

少佐は福島縣の出身、熊本幼年學校を經て士官學校第卅一期生、シベリア出征後陸軍大學を卒業、滿洲事變勃發當時は關東軍參謀として大いにその手腕を謳はれた、その後第十二師團參謀、參謀本部々員を經て陸軍省軍事課に轉じ現在に至つた

首相・奇蹟の生存経過

密かに官邸を脱出

一旦知人宅に潜む

『奇蹟の首相』岡田總理が今回の事件に際して叛亂軍の手を逃れた經路につき當局では五日午後九時半福田秘書官の談話の形式で左の通り發表した――【寫眞は岡田首相】

福田秘書官談話

二月二十六日早曉首相官邸が叛亂軍の襲撃を受くるや折柄日本間に就寢中の岡田首相は松尾大佐及び村上、土井南部警部と共に日本間の奥の方に難を避けられた處警官は松尾大佐を殺しこれを首相と誤信してそれ以上深く捜査しなかつたため首相は全く無事なるを得られたのである、首相の無事なる事は間もなく外に伝つたので速かに官邸より出さんことを勧めたが叛亂軍の警戒厳しく全く遺憾ながら同夜は其の目的を達することが出來なかつた、而して翌二十七日午後に至り弔問客の出入が許されたので男許り十二名の弔問客に紛れて無事官邸を出て貰ふことが出來たこの時の服装はモーニングの上から外套を着しマスクをかけてゐた、此間首相は警戒の爲派遣せられた憲兵の犠牲的の掩護の下に日本間の一室に安全にして居られたのであつて時に二、三の兵士の目に留つたこともある樣であるが別に咎められることもなく無事に看過したのである、二十七日午後官邸を出て一旦先づ知人淀橋區下落合三丁目の佐々木久二氏（福井縣人）宅に落ち着かれ髭を剃め服装を整へ直に參内して天機を奉伺せんと欲望せられたが當時宮中において警戒中の警官と行合せた結果當時の情勢上事態の悪化を慮へ暫く參内を見合せた、翌二十八日午前取敢ず辭表を後藤總理大臣臨時代理の手を經て闕下に捧呈し同日夕刻に至り參内直に拜謁仰付けられ首相は今回の事件につき深く深く御詫を申上げたところ有難き御言葉を賜はつた趣であつて恐懼感激して御前を退下せられたのである、次いで後藤總理大臣臨時代理、戒厳司令官より戒厳の解令が發せられ首相は感慨の中に事態を收拾する責任を負ふこととなつたが當時の情勢と國家之が公表を見合せ二十九日午後に至りこれを發表した次第である、尚松尾大佐及び村上、土井、小倉、清水等の勝れた警官が最も勇敢に奮戰し見事な犠牲を遂げられたことは誠にいたみても余りある次第である

秘密を死守する二女性

その日、二月廿六日午前五時、岡田首相は官邸日本間寢室でたゞならぬ銃聲に眼をさました、その瞬間、五・一五事件以來、官邸正門に備へられた非常ベルが無氣味な警告を官邸内全部に鳴り響かせた首相は「スハつ」と起き上るや、良き友であり義弟である松尾大佐が、疾風の如く駆けつけて來た

總理は

「軍人の襲撃だ、逃げて下さい」と叫ぶ

「いや、逃げぬ、

覚きかゝへ各所の方へつゞく暴徒の下に押し出し、折柄駆けつけた村上巡査部長、土井巡査に「總理をたのむぞ」と一言したまゝ自分は反對側の東廊に通ずる廊下に逃れ出た、その時、早くもドアを破り護衛警官を射殺して侵入して來た叛亂軍の一隊は、松尾大佐目覚けて猛射を浴びせかけ、よろめきつゝ、廊にころげ落ちた大佐は、

「天皇陛下萬歳」を叫びつゝ、悲壮な死を遂げたのであつた、叛亂軍は大佐の遺骸を首相のそれと誤認したものと見え首相の寢室の床に大佐の遺骸を横し拳銃の破壊をなし、やがて寢室を出て行つた、福田秘書官が「首相ご健在か」と知つたのはその日の午前九時過ぎる頃で、やつと自分の眼で首相の「死」を確めたく、かつ線香の一本も挙げたいと

嘆願し

た結果「それは尤もなことだ」とやつと寢室に入ることが許された、時に午前九時半、大佐の遺骸の上にかけられた白布が警備の兵士によつて取られた瞬間、福田氏の眼に映じたのは意外！　岡田首相でなく松尾大佐の安らかな顔であつた、その傍らには組閣當時の背廣服姿の首相の寫眞が額縁から投げ出されてゐたので「飜改めをやつたな」と福田氏は直感したが、その時耳もとに聲が飛んだ「總理に間違ひはないか」「ありません」確乎たる感答のうちに福田氏の脳裡には「より以上の危機」が迫つてゐることがひらめいた、「この中（官邸）にまだ一人ゐる！」その言葉を如何に解すべきかを知つた福田氏は、官舎に

一歩も

出ないと緊張つてゐる、貴官から然るべく話してくれるやうに」との傳言があつた「それでは私から話して見よう」と再度官邸に赴いた福田氏はその趣きを傳へたが、この二人の女性は「旦那様の御遺骸があるうちは一歩もこゝから立ち去ることは出來ません」と答へるのは驚の兵がある前である、この二人の女性とは秋本さくさん（三）と府川きぬさん（三）の二人であつた、この問答を聞いてゐた叛亂軍の兵士達もこの女性の心に動かされたか「それも尤もだ」と女中への遊説命令と首相の遺骸持出しの提議を引つ込めた、内には首相を守る二人の女性、外には脱出計画を練る福田秘書官があつたことを叛亂軍は知らなかつた、忘れぬその日は暮れて深い夜がやつて來た、まんじりともせぬ女中二人の身近には死んだ筈の岡田さんの大いびきが聞えてゐた、明くれば廿七日

非常時

の空氣はいやが上に高まるその日の午下り、官邸日本間にぞろぞろ弔問に來たモーニング姿、羽織袴の老人連十二名

踏つて懶惰の幾時かを醒けてゐた福田氏のもとには、某將校の言を受けた兵士が「女中二人が官邸にゐるが引上げるやうに命じたが、福田秘書官の命令がないうちは動かない」と報告した、福田氏は「それでは私から話して見よう」と再度官邸に赴いた福田氏はその趣きを傳へたが、この二人の女性は「旦那様の御遺骸があるうちは一歩もこゝから立ち去ることは出來ません」と答へるのは驚の兵がある前である、この二人の女性とは秋本さくさん（三）と府川きぬさん（三）の二人であつた、この問答を聞いてゐた叛亂軍の兵士達もこの女性の心に動かされたか「それも尤もだ」と女中への遊説命令と首相の遺骸持出しの提議を引つ込めた、内には首相を守る二人の女性、外には脱出計画を練る福田秘書官があつたことを叛亂軍は知らなかつた、忘れぬその日は暮れて深い夜がやつて來た、まんじりともせぬ女中二人の身近には死んだ筈の岡田さんの大いびきが聞えてゐた、明くれば廿七日

非常時

の空氣はいやが上に高まるその日の午下り、官邸日本間にぞろぞろ弔問に來たモーニング姿、羽織袴の老人連十二名

の姿が見られたが、その時「この馬鹿野郎！　興奮してはいけないとあれほど申し渡したのに闘賞血を起して、仕方のない奴だ」といふ

警備と共に日本間玄關には叛兵三名（麹町分隊所屬）に抱きかゝへられたマスクをかけた老紳士が出て來た、福田秘書官の機敏に驚嘆した顔が續く、待たせてあつた自動車に老紳士が乗りこむと自動車はするゝと走り出した、……それから間もなく、淀橋區下落合三の一四六福佐興業社長佐々木久二氏の去關先に横付けされた、自動車から降り立つた老紳士が岡田首相その人であつたのは福田秘書官たゞ一人が知つてゐたとたつた

警備の重責を全うした將兵への感謝は各方面から戒厳司令部へ寄せられてゐるが目を追うて感謝文や慰問の金品が届けられるので香椎戒厳司令官以下非常に感激してゐるが、同司令部では軍として當然なすべきことをなしたに過ぎないので弔慰金、慰問金品等は一切辞退することになり、安井戒厳參謀長から各方面へこの意をこめた感謝文を發送した

警視廳發表

鎮壓は軍隊にまかせ
專ら治安維持に努む
叛亂部隊に包圍され
已なく本據を錦町署へ移す

【三月四日午後四時半警視廳發表】二月廿六日拂曉午前五時警視廳は一部軍隊に包圍せられたりとの報に接し直ちに非常召集を行ひ警視總監以下各部課長即時參集し重部關係者と聯繫をとりたる結果、事態の重大性に鑑み、この際叛亂軍の鎮壓については軍自體においてこれにあたり、警察は專ら一般治安の確保に任ずるの方針を以つて非常警備司令部を神田錦町警察署に設け、各部課の配置を定めたり、よつて管下八十二萬餘九千の警察官及び警視廳員は直ちに部署につき、大局に鑑み帝都沈靜の態度をもつて克く帝都の治安を維持することを得たり

【警視廳當局談】二月廿六日午前五時ごろ、首相官邸、鈴木侍從長邸、高橋蔵相邸、渡邊教育總監邸が陸軍將校に指揮せられた武裝軍隊に襲撃せられ、襲撃もまた有力なる軍隊に包圍せられ陸軍省、參謀本部、警備司令部、陸相官邸、首相官邸を中心とせる永田町一帶の交通遮斷せられたりとの急報に接して警視廳當局は直ちに集合し協議の結果、事件は單なる一部將校のみの暴擧ではなく一命令系統に屬する部隊としての行動なるに鑑み、直ちに東京衛戍兵隊と東京警備司令部に對し叛亂軍隊の鎮壓は軍の手において なさるべきを要求した、事態かくの如きなるをもつて叛亂軍隊より警察官に對し積極的行動ある場合は格別、然らざる場合の抗爭は懷柔をあくまで軍隊警察の全面的抗爭となり、却つて治安の紊亂まさに極大し、事態收拾すべからざる結果に立ち至るを慮り努めて

抗爭 をさけ沈靜沈着、克く大局に着眼し、專ら治安の維持に任ずる態度を決定せり、一方同日午前五時廿分警視廳管下全警察官に非常召集の命令を發し、同七時廿分應召員の配置を完了し各部署ともそれぞれ所定の職務に服せり、同日午後三時戒嚴司令部施行せられ、次いで廿七日午前七時五十五分戒嚴令施行せられたるをもつてその指揮下に入り、戒嚴令下の事務を執行しその間特に警戒にあたりたるは各大官の身邊、水道、電氣、銀行、郵便局など重要警戒の場所の警戒に任ず

流言 置語の取締、文書の取締、情報の蒐集、銃砲火藥の取締、犯罪、火災の豫防などに主力を注ぎたるをもつて市内は叛亂軍所在地の一部（永田町付近）を除き他は殆ど平常の狀態を保ち得たり、警察電話、電信機關は事件以來叛亂軍の包圍中にあつて交換、發受信を續け得たり

○世界のラジオ（放送）の現況を一瞥するに一長一短あり。就中英國の形態の如き獨立放送の方法を採るもの、ドイツやロシヤの如き獨裁政府の下に放送（ラジオ）の政府本位なるもの、米國の如き商業的の公益事業として設立せられたるもの、英國の如き民間の公益事業として設立せられたるもの、日本は丁度英國のそれに近し。

ラジオ放送の先進國は米國にして今より十五年前即一九二〇年十一月二日ピッツバーグから、ハーディング第二代大統領選挙の開票結果を放送したるが最初にして、他の諸國は世界大戰の後、二年後なるに、今聽取者の數を各國と比較すると、アメリカ二千萬、ロシヤ千二百萬、イギリス七百二十萬、トイツ六百八十萬、日本は二百二十五萬にして

獨裁國のラジオ程乾燥無味でおもしろくないものはない
へる。ドイツのラジオはじヒットラーしゃべるとよいよ
で、ヒットラーの例の吼吼の演説がラジオの傷いると、
工場の工業を休めて聽うさせる者が多い。唯に演和劇と
者が多くの見物人、聽うさせる者が四割する。
るこの音楽放送でもある。
ロシヤは獨裁國であるが、放送を利用する國が
多い。支那は文盲を多く、國民が多數であるので、
改革を徹底させるこの放送を使ふのである。
度さやうの國は、往往旅行を語を使一することが
出来ないので、ラジオ放送を使ふのである。
が多くの方言を使ふのである。
ある劇作家は地方語のラジオ放送

取者は千二百萬人もあるこの自由を國是とする
アメリカは之を全論出版の自由を國是とする。
検閲制度がなく、郵便物として取扱ふ時は公
表を要する。郵便局が郵便を扱ふこと
ある取締法があるこの。ラジオの取締は
今日の道徳制度の作ったものだから、
作ったものの為警利的であるから、聽取者の欲する
偏する製造である。
送局は廣告を主として廣告料で因って經營してゐ
るとこで全米の四百の獨立放送局がある、
の放送局の數が五十もある
アメリカの放送事業は営利的である者の集合

あるので宜教論がうるさくやかましい、佛し流石に自治国
北米合衆国は契約をとり結ぶことを自ら光榮る法を取る
のだ、友達にたとえるとアメリカ流にうごし
オの教えいかから生れたのか、今音楽が吹奏
されるかと思ひまもなく仕立屋の高帽子屋の吹聴
をどが出る手甲繕をくるのだ俳優は上をいかそと
スアメリカ精神があるのだ
うじオはニュースを報道するのだ最初の新聞から
敵国さんが為を研究しれば結果、ニュースを教えて
しまうのが為の新聞の為に有が減しることが
ちうれ。さて廣告をとること者しい影響を与る
を奨くさるれば廣告が新聞の敵であるアメリカ

榛原製

れい廣告を者こ弱し、うじオと新聞の優劣論が盛ん
な謝いさんもあるが、ようしまう決しまうべ。
英国の教えを受い商業新聞紙は多行不統と陽つた英国の
の人を国家霊魂の時、冬寒が多行不統と陽つた英国の
人心の極なの不安と思ふ人心が廣告流行盛ん流言飛語
を掃ふ人心を安定を異て国家の危機を救のこと
貴重の事業と認めるべ動機は新聞紙を発行
統制せれば民営に委ねるべきであるいと、えんを公益法人
り一国ことなし、郵政廳の当局者のでは英国政府が生
んだ日本の制度と似て無うが日本の教えを業い家
初から営利を目的とせず公益法人とした設立された血
節の無い無い無い無一切無

（初か）

日本と英国の居留地は英国が二百年の間を脱しるい
黙のあるを、もしも日本ひの敵取料は放免と自分び徴
収し収納するが英国ひの政府が料金を徴集する
代りに、其の上に前をハ移る、其上は前の半額程くい
其以上日もるるのに放免堀合の財政の為に困難び
堀合から出りする出納拘の収納が僅うを補足し
てみる、猶乙は矢張り放免の収入を政府びえり上
げ[illegible]ンなる、
日本ひの民人と法度をうるる加英ひも来ひも、政治と討論
が放免の往因とうるるひも、逆賊の時を候補あが各重或
る時期を限り代へるるやりまる、唯ひ堀合の討論を
まく放免まることはいます。行はんとの事い。来ひ大統領

榛原製

るひは大統領ひうる敵(免)する時ひ無料でやるが、自家
の重訳の番頭ひうるの放免るひは料金を取ること
ある、
○今次新下に就き完全まむしくるるひらしめる陸軍の
校の幕府本ハ其の原因未だ明かならず、ひうるるさん
も知らるる元帥かつく、其ハ幕府の陸軍部の古
壮将校が往を婚姻の幕を[illegible]、政治と関無するハ、
敢て今次に起きるるあるるる前と大差者和を殺した
るの恭奉るるるる乃山中將と白意宮家と殺しひる
件ひる、元帥麻中の聯隊の將校見て彼是の評判をひる
くが、今分の奉ひ起きる回聯隊と統制ひきるを敢ハ
るこるるる、首謀ひるるるる[illegible]と説と相安さんひ十九名を[illegible]

春の夜の淡雪　―昨夜弁慶橋にて―

大中小の尉官及び伍長下士官兵卒千数百名、彼等いずれも若干の兵を率ひて敵と上官の阻止を突破し、遂に大官の旅を武装解除し、引続き列車にて都下各所を占領し、遂に伊豆の沼津の都下をうかがひ、進て伊豆の沼津に於ける牧野伯の別邸を襲撃し、彼等の占拠しつゝある数箇所の視察、新議会議事堂、首相官邸、山王ホテル等、あらゆる意味の於ける要害の事務所、及び機関銃の威力を以つて各々その目的を達し、大官と殺戮し乍後尚兵を指揮して退くことをなさず、遂に詔勅を下るるに及んでしめ以の今次の暴挙は、彼等暴挙行の終了迅速なるに数ると共に、彼等暴挙の士官に対し、兵員内に幸制統率なき

榛原製

やと疑いしもいまだかつて荒し少壮士官吏ひとり殺害
中会いせ、突如兵を率いて市中を横行することかは
まるるべし、今次の不祥事は又徳川慶喜氏の
るべしなれば、今次の暴挙もまた幕府の
せざりし、亦目的は既に振めるあらざりし、亦
火災を注意しなることき形跡もあるべし、伝ふる警護も
大なる損害をもたらしこと疑なしとも、荒し革命的の
目的を為さず乱暴を企ひたるに過ぎず、恐らく酸鼻
の惨状を現出したるは相違なきなり、今日の暴挙
は最悪の傷痕を心想像に難からしむるなり、都下の
騒擾に伝ふる警察官もまた向けらるべ
き点なる人の感をなすに過ぎざるを問うのみならず

榛原製

意義なるものなることの明らかなる、幕府の人心の
離散を記録し、荒し幕府が斯く便りのなきものと
ば、暴徒の起るを先づ北の役不を記録し、公然の光景を
し、永久の禍殘なれば外国使臣の来る公然を設けられる
所なる記録の特にこれを掠りたるは事件として外交の紛更を
来さしめんとせしなり、戒厳令全部が指揮と用ひられ
ざる無秩序、北区域を特別の警備の要あるべきを
しき所なり嵐を今次深ふるべし、如何軍事市内は今次の
るべきなる嵐かなる、亦他のなる第一なる對策
かなる、唯北兵火を交へさりしは幸なるべき、宝
ハ高家市民の沈重の態度は北の暴乱と狼狽
せず、戒厳長官の公示を聴き、避難の協会

も沈着の挙動を示し（外人の感心を惹しなり）流言蜚語に惑いざるのみならず、都邑を保ち得早く鎮定するものと謂ふべき得べし、今次の変に際し、漫りに書きわる、

三月二日

横原製

○民間服飾沿革略説（宝生勢助著）昭和八年刊

七月書雅山閣刊　　北者ハ服後の男像と多く載す、服後の雪ゆきと他ゆきとも特殊の履物を使用し、自今ハ抵抗無き和ゆきとなる、中ゆき以下ハ一二ゆき、今ゆきハ履物の表に「ノート」を採り他の表に「ボロ」を使ふ

榛原製

わらぢ（草鞋）ハ　わらグツの特称と云ひんとする。古かし後世のわらぢの形式ハ皆と異なるあり、わらぢの谷部を拳げると、ちの部（乳）位と　カエシ（これハ後部の位置にあり）　乳ハ一ツあるもの二ツあるもの、伊豆の大島ハ　わらぢ、ハ島ハ　ハ板、なのハ輪入品し　話外国ハ　林氏の坂田兵法ハ外国ハ御ぢの草鞋　を多く作る。

外国ハ　わらぢ、ワラジハ自分ハ作るもの　わらぢ、ワラ

馬の鞋ハ農家の手業也　軍馬ハ武士ハ陣ちと雪をおしなどと見（なり、方今農家ハ馬の雪と雪

陸さうめんくさうめん

草鞋の首編一部を藁細工の覆をかぶせ足

袋の一編を保護す、これを紙後ろ、又は爪かけと

云ふ、或はツマゴと呼ぶ所あり

ツマゴを雪国にの名とする事陸中盛岡辺り

は味噌踏ツマゴと呼ぶ、あるいは味噌を踏むに

此の雪を用ふる事なく紙を用ふ

人数を活る河沒の美馬神祖谷山所用のハナモ

ヂ（つるのかけのこ）をたのむ記す

雪中猟師等も此ハナ漁者

を作る者あり藁を凡そ三四十束を多く殺

さるか或は酒を注きて飲む之を飲む足と草

標原製

鞋との間に挿入し、打ち達へに跡指を回むし之を

ハナモヂと云ふ、藁端度の長さ

爪かけ、或は爪かけとも云ふ、ゴンゾと云ふ権兵

衛ルツルとも云ふ、或はジンベ、ゴンベ、ゴンベ

スリッペのかき雪あり紙後ろ

仕掛ける之れを コンゴウと云ふ こんの紐ろ

約七寸、巾陸を歩くの用ある故トナリタ、キ、の

名あり（北尤隙の方言）

深雪に雪国に必需品（ひつじゅ）

ものとして 蓑（ミノ）法略を用ひ、深さ陸ま

作る フカシの飯を踏むに杜氏が藁を深ソウ

を穿つ

革靴ハ広く用ひらんとする洋靴ハ別に西洋革靴と
呼び区別あるべし、往々獣類の革為数の皮を
も用ひ、履物ハ多く革靴ハ殆り用ひざるべし、毛
皮等皮足袋も用ひらんと、貫通「貫通」とふよ
ふ古市ハ多く出ず皮製ハ多く深い貫ぬく
ハ地名多くと、アイヌの履物ハ獣皮製
ぴケリと名つく、ケリハ多くの名ひ、北の岩を
膝のもとまで穿ち、其の所隙間ハケリの名を
読めこむ、其の前のぬきこのもうと
カンヂキと社々長く、板橋とふ多い板へ編を
着けた本履のことくなるを深田と穿つのを
ハ、支那上代の履ハ泥行ハ使用しなこと書地

樋原製

ハ多く
泥行ハ雪中深靴の底に付て穿くのハ
輪カンジキ也、北海道ハ雪深く かんじきハ古
訓ハ里俗ハ「ゆき」とふ、豆一尺二三寸板
七寸ハ六分 ムシジヤガラといふ木の板を作る
鼻の反して クマイブとふ夢又カヅラとい
ふのハ多く用ふ、山漆の皮ハ皮の皮を巻かれ
ハ、
石鐵橋とふ多くハ カナカジキ 或ハ略して カジ
カンと呼ぶ 鐵物ハ三の爪ハ、又日ハ爪の
下に着く三方とかつれ爪ハ故 滑ることと
なり、 仙の住地ハ一本ハ踵に、二本ハ其前の左

右の通り、
踏俵といふこと、雪の上に踏
を此る為めのこと、雪俵とあるや事未だ
らず、福島辺養蚕地方に行はるゝこと
のみくだ。
蓑虫踏俵といふは来俵の一方の口を閉ぢ
故なるべし、只之と異つた所は、編む時の葉
の元と末とを交へる。元の方を下にして
口を閉ぢ、末の方を細く編み、後へ手を抜
らんのやうにして、任一尺計り二個を一
組とし、此合せの左右の端と端、上端を手で
握つて足の歩行を助け、後者も踏みつけて

通路を作るなり。

○

雪中特別の四下駄に付てあんとも スベラウの為
めとぬいらぬ為に低くこれを重ねるもの
なり。前者下駄の歯の鐵釘をうつこ
んの仮後者は仮をも、ぬいらぬ為
めのこと、貝合方のこと用ひ方、こんら
者の下駄の歯の大きなるもの
歯の内部がウロになつてゐる。
佐渡の赤泊に桐、底に鐵條を附し
たる。この下駄（スベリ下駄）えをウン
ケヤンとこと

[illegible]下駄[illegible]年時代
[illegible]行[illegible]、一ハ[illegible]下駄
[illegible]、[illegible]竹を[illegible]に[illegible]して結をハン、[illegible]
[illegible]の切り目を[illegible]手入をして[illegible]
[illegible]つた地面を[illegible]ことの
[illegible]コンニヤリ下駄と云ふ（こん
ハ北者に今く[illegible]して[illegible]）木で作り丸形
蒟蒻の似[illegible]、中央に鋸目入んある、[illegible]
の底伸を使[illegible]、[illegible]る用ン、
裏にスベリ止[illegible]をつけ[illegible]前後のめりの下駄を
北[illegible]でのおホうと云ふもし、[illegible]の初めを[illegible]所

[illegible]を雑[illegible]を[illegible]者を[illegible]と[illegible]験道の山
伏の一本歯の下駄を穿し、こんいちく支那の行[illegible]
後の[illegible]の文献[illegible]、山を上下する一本歯の[illegible]
とある[illegible]、[illegible]駄の歯ハ[illegible]長[illegible]
高ハ[illegible]行[illegible]ことが[illegible]、一尺[illegible]
[illegible]の泥濘が深く[illegible]高い足駄上[illegible]
つれと故[illegible]ることハ[illegible]
きが減ハ、遠の足駄ハ[illegible]減ちんとしつ[illegible]。弱下駄、
四下下駄[illegible]下駄[illegible]ハ[illegible]天用のひ駄[illegible]ある、[illegible]
きの下駄ハ[illegible]天用[illegible]ある、[illegible]
[illegible]ものが書生用と解さ[illegible]
の下駄が大いに行はれ[illegible]ことも[illegible]ある。組下駄と云ハれ

このころの日本地のようなが、その幅の長さを貴び木地を選んだかと思ふ。極目を選んで上等とされたと思ひけれども、薩摩下駄と云ふのも矢張り次上の類であつた。書生の多く穿いたのは、桐おうの木の厚歯」のことで、今も使用してある。

昔あの駄は杉材を用ひ、緒を立てる所に穴を穿ぶ。緒をかけるこまがヤキ火鉢で自から穴を穿つたこともあつた。草履も今当四会と有りてあるが足半と呼ぶこともあるこんの巻る」の巻と履の巻さへこのかから、足証の上はこのいねまきこへ巻る跡まのことである。福ぞうりと云ふこのく儀式用で江戸時代

つてある其の糸を法の異つてゐるこけでいこへ。麻裏草履、草履、草履と名のつくものがあつて色おが云と曖昧である。前者の底に麻の紐が三四行羅列してあり、草履の麻を用ひていうもあるこの東京の雪駄はあと面まかつて、今雪駄らしいこと底の八幡の代りにゴムが使つてあり、都会の者が穿くようになつた。池つて帰へ、草履を常用し草履が進化つゝ来た。

右書き漏らし、一本を補記した。城後の海濱桐の丘無名を比演下駄と云ふ。形をポックリと云ふ。婦人子の下駄と似てゐる。一名バスゲタと云ふ。井内久一の所蔵のもの。

解説に鼻緒模様桐紋うして穿緒の穴前後左右

四個ヲ、踵部ニアル穴ハ前部ノ方磨滅シタルトキ前泉
緒ヲ交換シテ再用スル時ノ用ヲナ
カ九ハノ女用ノ下駄ハ錢ヲ附屬ケル、遠州ヲ[illegible]ハ女子ノ
嫁スル時、錢ヲ(けルハ本後ヲ穿ハ)ヒ[illegible]
丈物ハ豊付ノ駒下駄ヲ[illegible]メンと云フアル。豊付ヒ
ル點ハ祝免ノ名ノ基ヅク所ナリ

ホイロリト君死ス

其ノ魂ハ死セズ

ホイロリトハ神秘ノ人ニ接シタルカ、又ハ他主ト主又
ハ主人ニ限ラズ、何人カトモ人ヲ接セザル主義ニ生ル
ル問題ハ神秘ノ人ニ接シタルカ、今ハ其ノ主義ニ用ヒラ
レタル言語ハ、ヒ[illegible]ト[illegible]ト[illegible]ト

を受ける

教育係監　邸　才三聯隊一ヶ中隊を警戒

牧野宮内府　廿六日午前五時五十分　十名の将校

伊東侯爵邸に牧野内府を訪ふるの

と大言を吐く、伊東侯の令夫人「生

勝伯爵邸に時の神引移りて居

と拘やうとせるを座敷に乱入、其後内閣書記官

のまゝ

を撃ち殺し、内府宮内省に電話

廿六日　午後三時荒木大将の集所に乱徒の代表

野中宮内大臣と交渉

陸原制

陸谷才三聯隊長は単身参謀本部

を訪ひ代表大臣以下首脳部と会見

午後三時

午後三時過ぎ大臣やうやく諒解成る　十時

夜戒厳令を施行　後藤内務大臣首相代

廿七日

午前十一時内務省祝賀を撤退し

首相官邸へ引上げ、十一時五十八分再び

を代行

午後三時陸谷聯隊長、古荘歩兵第

宜、石原大佐等乱徒に説得する所あり

従業員は政府の樹立に云々の條件を
少しも違うことなく
午後一時機関銃を奪くと華族会館を占
領す 薩西男爵邸と称し居ると伝る

書物展覧会出陳
物の検印栗也
鳥と魚
天と地と形とる

廿七日 乱徒の復帰條件として政府の内
閣の組織に関する方針を問ふことあり

町四商相の為と称し今は乱を出めるを
急ぐ未だ化と称ふべき程あらずと
午後六時より花柳界
八時乱徒は新議事堂を引上げ尊王
討奸の大旗を先頭に喇叭を吹き
約百名山王ホテルを占領、安藤大府
演説をなす

廿八日
昨夜十時より乱徒の態度硬化し再び
新議事堂を占領す
事態危険 午前八時四十分頃

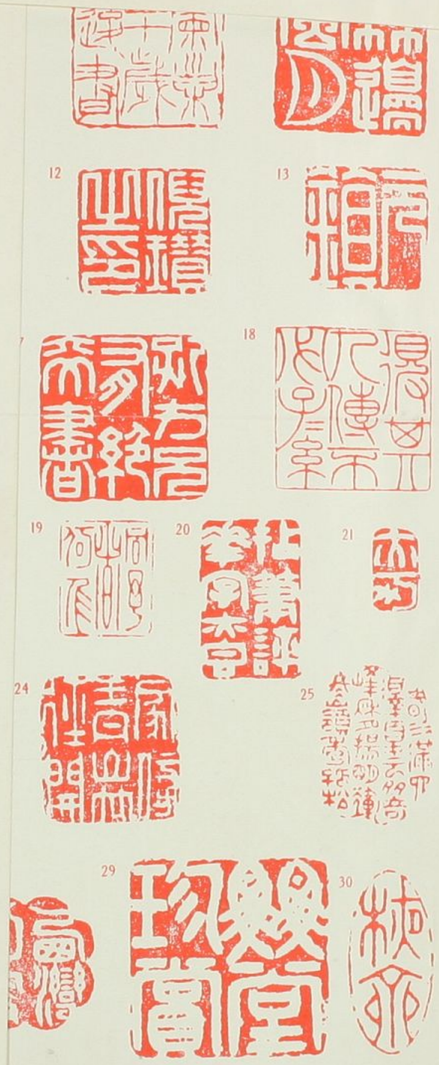
内閣ハ民ニ主義命令を出す。
午前八時より陸相官邸ニ於て双方代表者協
議
午後二時三十分川島陸相参内 宣大の御裁
可を仰き、聖勅を基キ軍部代理岡
村少将等ハ礼後ニ拝謁す
参謀総長より司令官ニ下る命令 部隊ハ兵力
二万 戦闘の準備を為す
午後三時奉勅命令に依り漸やく原隊に帰
るべきを言ひ渡す 但し一部将校ハ割腹セ
んとせし一部の一戦を交へんと主張し
多刻より面会 信念を枉げ。

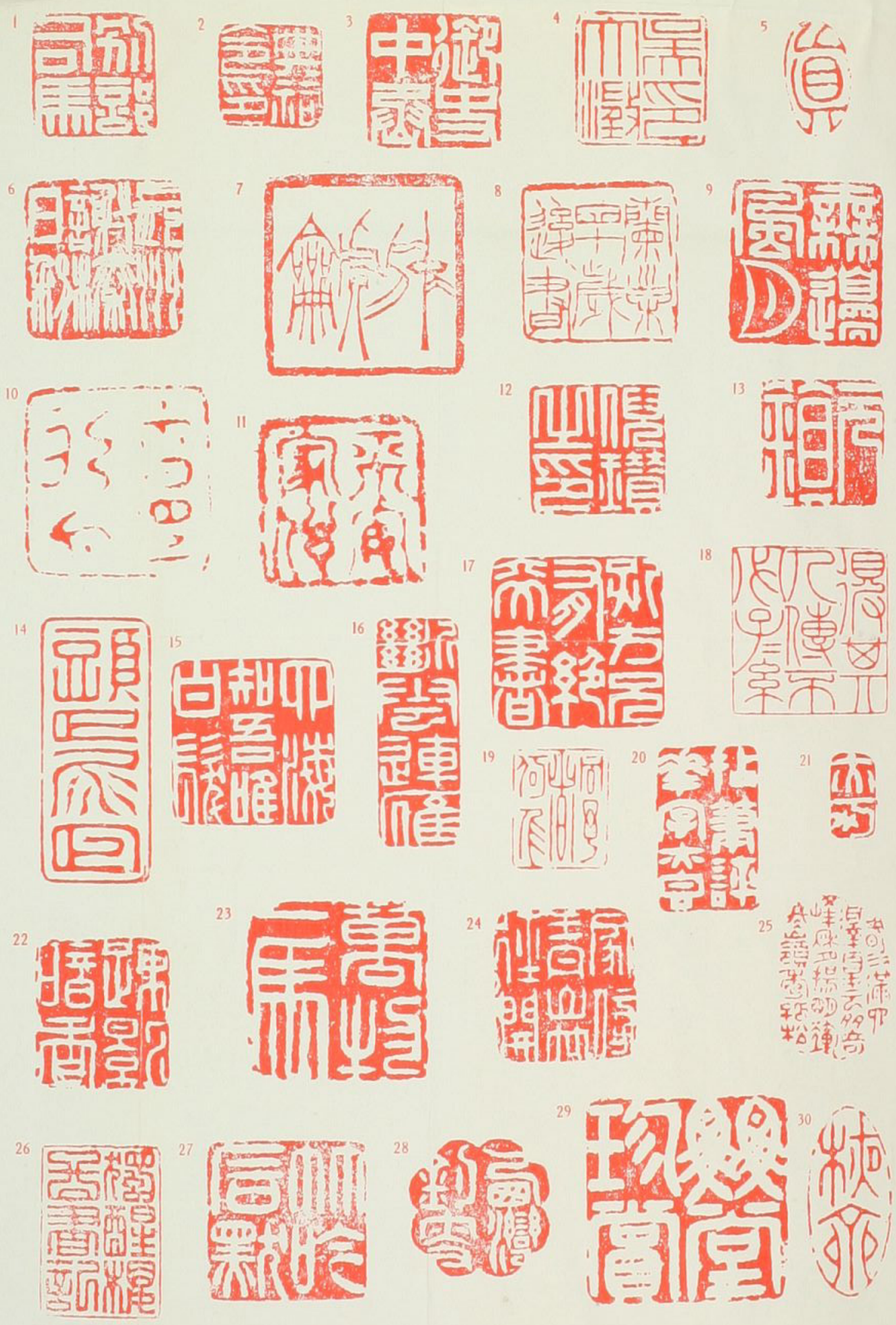
榛原製

夜十時以後 衛上兵のみ人 [illegible] 文面
絶ヘ
二十九日
九日午前ハラジオ侍ふ [illegible] 但し異ス
あ [illegible] 部隊ハ [illegible] 并ニ軍楽ニ依而ス
あ [illegible] 一隊の演奏を [illegible] 文面ハ左
等ハ [illegible] 得ることなく [illegible]
永長等の [illegible] 得さるを [illegible]
[illegible] 等ハ指一本 [illegible] 御芽を [illegible]
解散中 [illegible] 弟兄と [illegible]
[illegible] 等ハ [illegible] 命を [illegible]
と、

一隅ハ茅文社ヲ感ジ、柳ノ緑ハ社ノ法家ノケース
ヲ覆ヒ、春時物のべんとを断ち、日と新たに
民等ハ大都市役を呼び出し、仮亮のやう
のあを交付しとう

○富山県ゟ頼まれ四民百科辞典中「篆刻」の一稿
を寄すべく、校正摺来り一校す、辞書中、余の
自筆を留むるは之れが初めなる、標本ハ印譜と
合セ出す、乃ち左の如し、印のすべて家花ニ属す、
（昭和十一年三月四日）





を立てず、篆校正楷素リ一校す、辭書中、余の
自筆を留むるの之んが初めとなす、標本入印譜を
今七冊とす、乃ち左の如し、印のまへて家花に屬す、
昭和十一年三月四日

標原製

○人氣とは、ものの名。世間にて世評に出ること。
のりなん一向人氣かなく、市場と商家と人氣かちがう。
三宮義夫人が微傷を負われのち別日しれ人熱かあるも
家内の身代りとなりし人〻氣が人氣が
なる。
徳川氏教育法を設ふる將校に徒士の世話をなすこと
なりしもあれども、手を下すまじき思ひなりとなるかも
かゝる事を果しかねる精錬の武礼もしれと侍くらい
なる。
亂徒の容易を帰ちくしそうれのち、内閣の吐席の條
件を持ち出して交渉日を延らんと考めしあ
ると命ずる

亂徒に毒殺の事柄や其他かゝる多くの折りを機
会に供給することの代料をも取れめ、しかと思つて
あるが、皆待罪に仕掛けしとそうな
廿六のものゝごとく三所市和殿の田士宮が指揮
しかと言ふ説がある。
陸中大佐の宮邸が亂徒に占領されと言ふ説も
ある。
御親王人の巡査のひとり人心を刺激し密附金が敵
と説ふてあるもしも繕を集まり思ひ二番目と
行く十箇月に至ればもとの名を命じ著者は
○近来書物を愛義殿下と名を命じ著者は
置文をしてあること流りて、自分も横炉漫筆

罫紙と潤印とを持ちて二三の行商人に
相談罫紙一しょうを千通を罫すること容易なるべ
ぬ。之れの一千枚ばかりも第四号の表紙に
迷惑也

○坂内書記の表紙の表紙は黒漆塗の
用の便なる。とも言へ、陸つて人真綿を
彩色なるとも言へども紙に加
更を活かしたる。この多い二三の前まで
表の三字を押印を見る。筆跡
表紙は巧みなる。十の表紙前まで
ばかりまでの版を見る。
○日黒の雅紙図のとは仮流の意味を

りしが男もうく再び来りて十回の紙幣を
交付しなんど為さるの義、その執事い荒し受
けて貴の妻の自分の主人を欺くなりと、
今もなほ望蜀の心[illegible]とて[illegible]
○古諺に曰く
天道の推磨は美酒ここと屋の坊と呼ぶ止す、
驕る者久しからず蟻は羽を得て死すること速かなり
千疊萬疊只一疊、千石萬石一杯飯
上国不情、心異志時　以利害為慶、恰以死生為義、
書言在聽、死言望聆　各も金も命も惜らぬ者なれど
土偶詩木偶　恐るべきは
神の借金は不拂ふ　慚愧は衆善の衣服

山河易改、本性難移
情人眼裏有西施
取れさうな二つ三つも掘つた一の
移動三月い火子三匹歟
海中ふも杯中に渇死ふし
出喫山室
家を変れば釘の傷
梓の三台　舶い三月
渇し死ぬ人飲人ひ死ぬ人
急いでよいのは只三つ疫病ひと喧嘩ハつん蝿おき
牛ハ水を飲んで乳とふし、蛇ハ水を飲んで毒ふる
絶無い市人の極

路上行人口似神
一父十子を養ふも十子一父を養ふ能ふ
直如弦死道曲如鉤反封差
女房と十文ふ[illegible]者ハ十文の
無事に成ひい良夫
自家心中の憂気を知るハ
時有星[illegible]の上を走る蟻を
有理不和言形

空裏得来空裏去

江戸の地名に關する洒落言葉

山中共古翁輯
三村清三郎補

恐れ入谷の鬼子母神
湯島の偏人様
啌を築地の御門跡
智惠も淺草猿廻し
萬よし原山谷堀
間夫は深川八幡宮
醉ふて九段の坂の下
洒落の内のお祖師様
とんだめに王子の稲荷
草加越谷千住の先だ
ぴいぴいどん〳〵神樂坂
値は高輪の泉岳寺
何ンにも千駄木林町

氣がもめの吉祥寺
大達ひの鬼子母神
腹がチョッピリ數寄屋河岸
どういふもんだ廣德寺の門
さうで有馬の水天宮
夜の夜中も根津谷中
錢が内藤新宿
なんだ神田の於玉ヶ池
けふか飛鳥の花見時
遠い〳〵本所の火事だ
深い中だよ麹町の井戸だ
ねつから麻布できが知れぬ

切名紙半張
旃檀は之れを代の谷を蓋す
鬼の入る所石の角も怖ろしく
怖れ及ぶ又
自慢なる樓の馬鹿の行きどころ
羅甸語をいくらかの大馬鹿
娘は皆よいが悪い女房はいたが果てらう
錢に親しい祖家子に陳くるる
人の敵多きまるとき及の云もみたる
訴る者の搖種し賊する者の狩
金賊銀張 法師
赤面の德の色

標原制

日本汉大正時代の山柳を法如其の物は
注面一形羅宇屋の車動き出し
巻煙草八幡い所を選び行き
軽業のやうに曲芸橋を結み
氷屋さん〳〵さうちのハ口〳〵入れ
春のとまいを伊氏入れ
注くんじやうまいを納豆〳〵
手のふを振つて豆腐や剃錢を出し
軽まれやうに賊家屋の庶ぢ言れ
つぶ濡にちんぷ今一度の面ちり
八先を惜らしさうん迷俗屋嘆み
祝り先住ふの札い張〳〵別称

今年も瓦屋の方い笑つてね
本服をまとと華奢の惜しく
風邪薬一本つけて笑けうか
笑のてい不可思と咽喉を剃り
朝後のまま〳〵未も顔を上げ
いえつてはいやらと鼠曲に続つて尺の
浅人を知らず楽を金盥
迷い子れ所を失けばあつちこつち
混血兒の髮の疎世を抜く
重さうな子供を抱くと話しかけ
立法途切れとこと子を揺り
乳の脛出切りまとうれ乳れこう

榛原製

大彫で叱るの大いの乳子こう
糟糠の妻は不倶の娘こう
心中のその乳々の敵の士
教育がちつと手軽く行かぬこう
駝鳥は薄毛の中を行き
書置を又ちの孫ちのは他人こう
出戻りの時は笑いぬ人とこう
眸のふれ少しい嫁の苦を忘れ
大晦の夏の病気を栖まこう
大晦のふこう限りの喧をうき
行方の蠟に遂く下駄を脱き
塗奴法衣の糊に困くしこう

[illegible]
加賀屋の神しゝ手を合せ
賊は人々驚き[illegible]り眼前線
夫婦でハちのぶ切れ乗換場
三絃亭某がみる後電車
温泉かの舞び娘絞こまり
尼とまひるゝ[illegible]美しさ
大鯛の料らんる前寝めるん
[illegible]髪のあ七去ゝ墨をぬり
氷底雪駄の客い足を上げ
並屋のギリ[illegible]と露地折れ
金魚屋の一[illegible]ん弧く揺れ

鉢巻を締めてはかとる日本人
店番の奥の方から番をする
棟割れと[illegible]きに住脚の成の果
笑きる[illegible]す氣びあれとふと涙を
動れ眼の[illegible]れ寒蕭し
働いて居人ハ亡澤氣が強い
仕方ゝ[illegible]ハ社く[illegible]
面白いと思ハ保証金
お顔は三度やとて[illegible]
身を[illegible]こを次郎の夜[illegible]寝る
鶏があいて自轉車[illegible]あ
吹つもあらやうに[illegible]

ツンのめりをこし雄雄く高り
牡丹の一ツ合わせを実を見せ
花魁は陰乳を抜けるやうに起き
宮今日下三の雛姫を仲かう
光秀は生れ比腐く穴をのけ
内裏の重入居へ絞をめし
淀君のもふるの去が四りうき
媒人は陰りの蔵も法しこの
心中の女はかくが情がらん
友達は嫁いんるお金が出来
吉春の目れもくの唐義楊

樣原製

○二千年の昔アリストトルは誘を解して云く「千載
うしを受用しもさりるん、滅亡の脚運と免んし
古今独の新片さう」と、いかんも誘の出生のたるく、誰
ん生ひたもうきう、その奉ふが生き極もうんも生き知の
もあるる義井侍士の文を義りも云ひと「生誕の時は
七歩自の父母も漢ようもること、恰うも車
馬喧闘の千言術路ん、雲さるるさんもう驚死の
めし幸にこの現義婚もうも人ようこもく枝報
利きうこうも、歳人の愛厳を受けは餓えず凍えず
無き、生長しても、世ようと童愛からるもう人もうんも
その素質ものを知る能のうるは伝めもうんめしもの
苦しの異、うこうせうこう」と、斯く云ふことのアテ箱

のハひとり日本のみにあらず世界一般にあるなり何故に俗諺が長いは命が短くなることを嘆ずる意味の語が簡短であることを簡短であるから喝くやすく覚えやすく又傳くやすい俗諺であることを俗諺であるから大衆に通ずる（但し俗諺が教訓の意味有性質あり）第三、實のあることを簡潔であるべきも内容空疎のものあることを簡潔であるべきも内容空疎のものあることを簡潔であるべきも内容空疎のもの

終上げ[illegible]つれ。前之通(俗の歌)を要するとも
れが或る地方に限る俗謡もあり、即ち海岸の謡、山の
せず、山の謡は海岸の謡[illegible]ことき除外[illegible]ある。
極めて長い歌の謡と分考[illegible]と云意義すること、[illegible]
[illegible]と謂つる地[illegible]同一意義の謡あり、人情同しきが故の
唯同一意義の謡でも一種[illegible]難いのを或するのと、節を
端折[illegible]無味のものが多い。文の巧拙[illegible]。音調
[illegible]。何人の
道[illegible]の特徴を寓する所に此の特徴が
あるなり、古来多くの美文家の文
を助く、俗句[illegible]文を稍[illegible]或い謡をつるき
合いせて文をなすこと[illegible]ある。但[illegible]時代の謡を

[illegible]
[illegible]
[illegible]

諺がうまく意匠界の諺かるたとなり、こんなものもあるし、右の他、他国の侵されぬ国を敵を恐れる事の諺が多い。亦支那のごとく文字を弄ぶことが隆盛なる国柄の内容の精神が強くあることが特色である。新聞の如き主流な諺を含んで居る。諺の数の多い国は、三十万の人口に対して、諺の数三万を及び、実質も変化の多いと云はる。伊太利の国民が個人の利害を顧慮することの多しい反映として利己的格言が多いとされてある。伊太利人は美術国で、諺は比喩のごとく鋭利で冷酷の気味に富んでいる。

諺は各国それぞれ

諺のかきの利害他国の面

諺の解し難いものは世界共通の意味も解し難い。諺は実に解しがたい。諺を為した諺を解し難い。迷信の失は人を迷信の利害解し難いものである。迷信かるたの動機から共の原因を考へ、共人を考へてある。諺の共国時に自国の歴史を知り、利害を考へ、解釈すべきである。諺世相教育を通じて社会を代表し、時代を知ることが、諺の原意を共の本の出拠を読んで見ること。

此不純のものがある。日ちくちくのと同じく諺を拾ひ、諺の解し難い点、且つ解し難い

三朝史話
第九號

文壇昔語

小說の變遷

玩弄物から藝術品へ

市島春城氏談

小說が立派な文學として認められて來た今日に比較すると、明治十五六年頃の新しい文學といふものはまことに幼稚なものであつた。

今日でこそ、何の新聞も小說を必要缺くべからざるものとして取扱つてゐるが、其の頃の新聞としては小說などは、どうでもよいとしてをつた。其の頃から時折り西洋の飜譯小說が現はれて來たのだが、實を云ふと、小說といふものに對しての日本の識者の考へが當を得てをらなかつたのだ。

日本で小說と云へば、德川の末期まで一の玩弄物視されてゐて、今日尊敬されてゐる如くに、藝術品など云はれることは思ひもよらなかつた。昨年逝去した坪內逍遙氏が東大の文學科を出て文學士といふ肩書でいろいろの小說を書いたが、それに對して、當時文明の隊長福澤先生の率ゐてゐた時事新報は、如何に之を批評したかといふに、作品の出來榮を評するよりも、一體文學士とも云はれる者が、小說に指を染めるとは何事か、斯くの如きは學者の品位を毀けるものだと云つて盛んに攻擊を加へたものであつた。これを以てしても、文學と云ふものが理解されてゐなかつたことがよくわかる。

一方、東京日日新聞と云へば、當時日本第一の新聞と云はれる程の發達した新聞で、世界の文明に通じてゐる福地櫻痴、岸田吟香兩氏の主宰の下に發行してゐたのであるが、この新聞すらも小說を載せなかつた。と云ふのは、福地氏は、一體新聞は生きた事實を報告するもので、そんな小說如き娛樂に屬する架空の閑文字を載せるべきものでないといふ見解を有つてゐたからであつたが、何ぞはからん、その福地先生は晩年に至つて自ら小說家となり、脚本家となつて名聲を馳せた人であつた。

それがために、時事の福澤先生からは坪內氏同樣一本突込まれるし、一方には三宅雪嶺氏にお賞めにあづかると云つた妙なエピソードも現はれた。この事は本誌第五號にも書いてあつたやうだ。その福地氏が、始めは小說を藝術品と見なかつたところなぞ、今日時代の變遷を見る上に

為めいつしか人々に同情さるゝに至りたれども失はんとするがごとのわざとなく
あるか如くなり。

○新古集成以後年史の編者の間に見えし所以の
年の記ものを設つたる事は
九月の大雪八月の三絹史紙にあるを見るが、
終りの方の十日入れてあるあるを別基にがある。
そんはたのめる者を設ちべきもある
南時試みられし小説は生硬のものなれ、クダケル義軟か
いまのわかるつれ、軟らい文を書くものの一概を武
此あと仮さん、武此者は都尚のやうなものと年
ものとみれば。志のしかも時代も年紫の進人
はしまうの武此を現解するものあつた。四人ばか

樣原製

非常な興味がある。
▷
とんで迎へられたかつたのにはこの歌作者品
なた理由もある。その頃は、歌作者の利
といふものが、まだいくらか幅を利
かしてをり、傳統的な習慣を維持し
てゐたのである。例へば、歌名具置
歌作者として世に立つためには、一度
は此の人の門にさゝげられねばならな
つた。そして師弟の關係を結ぶ
習のなかなかの宝を頂戴して名をつけ
れば文壇に立てるといふ風な習慣は
根强く存在してゐた。この風習である
つたから、小說といふものも無理のない
られたのもの無理のない
と思ふ。
▷
がうしと風向の中に、藤原の素養
のある人達によつて、藤原、藤樹の
小說が世上に現はれた。即ち鏡花氏
原重郎の「雪中梅」とか、東海散史
柴四朗の「佳人の奇遇」とか、或は
藤溪矢野文雄の「經國美談」といふ

記臨するあるが、誰のであるか文部省
所傳の紅梅材、その内容をきくに、
日本の四大美人は、馬琴の八犬伝、一九の膝栗毛、
種彦の田舎源氏、春水の梅暦と唱破したる
があつた。その現解なる基礎は、「高時」この
校を書を時の唱破としたる望公の理
言であつたが保しし四書を基人九のひ
三馬を基しれのは遺憾であつたが、美人
九の西鶴と巴水を基しれのうち更に基
あつたが、保し三馬は挿者の頭とあつたと想像
もさるが巴水と西鶴は全く挿者の頭の無
つたこうも知れる。北の二人は関西の人だから江戸

人の注意のおよぶ所つねに高のみ多く、実の比二人は[illegible]まで
当時盛り上がる前であつたのだ云々　断く訂正せば
が実に面白味をもさそうのである。
○自分の早稲田と関係ある教師を追懐すれば十
八人まで有いて気を追懐早稲田を始めれば、更ら
に関を得れば、早稲田を関係のある者と偏らずして
友を有いて見ると、其氏名を挙ぐると多数あり
左の如き教師を思い出す、内に校友もあるが、随分
早稲田の教師なのは学校に教授せられ
限つたから、校友でない教師も
人も取つてもらう
福井彦次郎

校友出展

奏
小野懋
荻川陽治
石井亨
熊谷美雄
前島[illegible]
津本典一
谷村一太郎

作瀬精一
村上孝彦
[illegible]
小坂駿三郎
熊谷[illegible]
星野恒
大槻[illegible]

生存者
下村正太郎
[illegible]

みさご

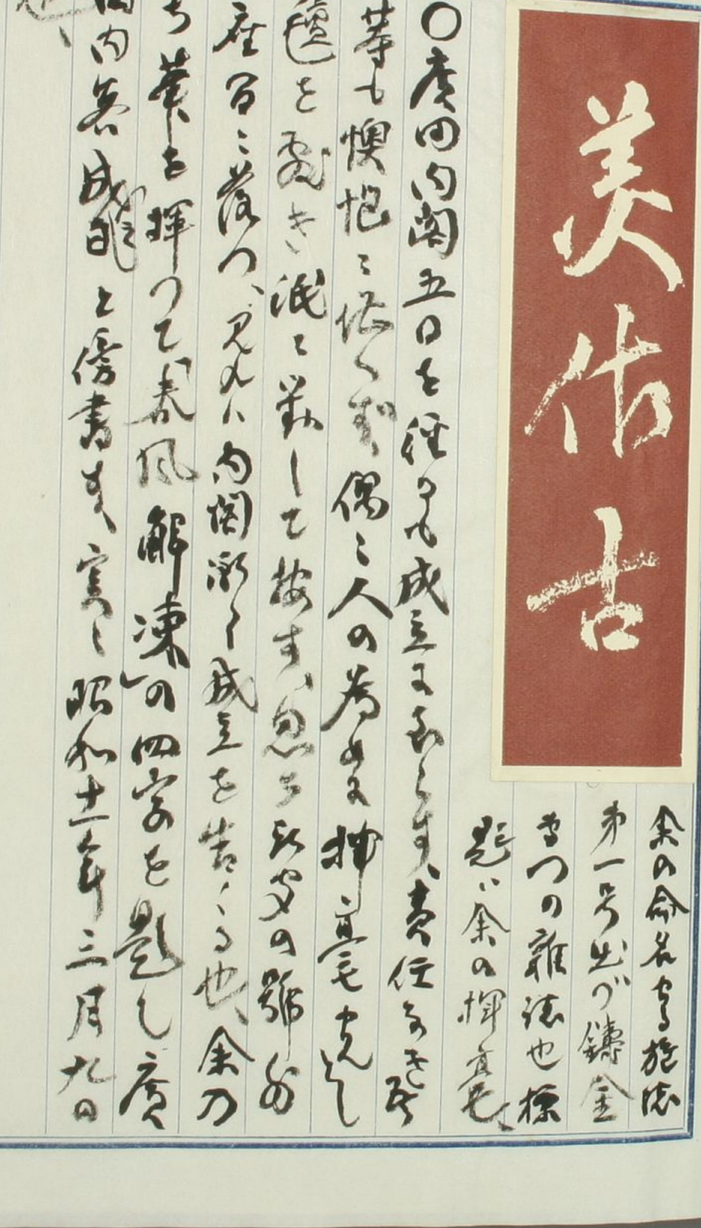
第一號

題號の由來

春城

鑄金家會田富康君、雜誌を發刊せんとして其の標題を私に請はれた。私は佳名を案し得ないで呻吟したが、會田君が前年坪内博士の熱海の塔式書屋の屋上に、金屬で「かはせみ」（翡翠）を作り「風見」としたことをフト思ひ出し、標題を「みさご」（鶚）としてはどうかと言ふた。「鶚」は「翡翠」と同じく水鳥で、常に海上を飛んで時に水面に下り魚を捕へて喰ふ。そして、一種の唾液を魚肉に和し、岩穴に藏して不時の用に供するが、此の鳥の唾液は酸味を帶び、肉の腐敗を防ぐの作用があり、海邊の狡童は往々貯藏所を探つて、其肉を失敬することがある。彼等に聞けば其味は鮨に似て甚だ美であると。自分は曾つて徳川期の俳書に「みさご」の標題を見たことがあるが、未だ雜誌にこれを名としたものを聽かない、所がこれが雜誌にふさはしい名だと思ふ譯は、雜誌は元來幾多の人が蓄てゐる滋味を寄せ集めたやうのもので、雜誌を經營する人は、宛ども鳥の貯藏を失敬する狡童の如しと云へば、失禮に當るけれども、其趣は甚だよく似てゐる。但だ雜誌の經營家は悽腕を以つてゐるから、敢て狡猾の事を爲さず、ドシ〳〵人の貯藏を誘致するから雜誌は大なる繁昌する。卽ち雜誌の生きる道は、多くの「鶚」の後援を得るに在つて、其盛衰は一に繫つて「鶚」の向背に在りと云ふてもよからうと、說いたら、會田君笑つて結構だと云ふから、乃ち「みさご」を題號とした。

樣原製



大命降下より成立迄

現狀維持派の支柱

軍部と妥協・漸く誕生

廣田内閣は陣痛五日間で漸く呱々の聲をあげた、最近の組閣難産の新レコードといふべく同時に現下時局の複雜と緊張とを物語つてゐる、軍部を指導者とする現狀打破の推進力は元老重臣、財閥、政黨を一團とする現狀維持の陣營に全面的攻勢をとり、これを危ないところで辛うじて支へ得たのが、廣田内閣成立の本質的意義である

九日の午後組閣完了の重荷を果してヒットラー張りの恰好で寫眞班の前に立つた廣田氏の心勞のやつれと安心の微笑を交ぜた複雜なる表情はその儘に現狀維持派の現在の惱みと安心を象徴してゐる

三月 四日、近衛公が大命拜辭するや西園寺公は再び沈黙考中庸清新な人物を探し求めて結局廣田氏に白羽の矢を立て松平駐英大使をして同夜廣田氏に瀬踏みをやらせ大丈夫と見て翌五日廣田氏を奏薦しこゝに廣田氏に對する大命降下となつた

元老が廣田氏を奏薦した理由は國際關係を重視し廣田氏の手腕による對外關係の調整を期待したことゝ渦巻く現狀打破の機運に對する安全弁的作用を雷ましめんとの意圖に出たものに外ならない

かくして廣田氏は吉田茂氏（元駐伊大使）を參謀長、醍醐忠重氏を顧問長として組閣に著手し同夜中にも完了する意氣込でスピードをかけ外務＝吉田茂、内務＝川崎卓吉、陸軍＝寺内壽一、海軍＝永野修身、大藏＝馬場鍈一、司法＝小原直、農相＝廣田氏、逓信＝内田信也、文部＝川崎卓吉の留任と決定し、政友會の前田米藏、中島知久平、民政黨の頼母木桂吉、貴族院の永田秀次郎、民間の下村宏諸氏の入閣が確定的となり、文相候補者たる田澤義鋪氏が入閣を辭退したくらゐでトン〳〵拍子に運んだ、ところが六日朝これらの顧觸れが、新聞に傳へられるや陸軍の中堅層から猛烈なる反對の

複原制

黒雲 現れ都ち全陸軍の總意となつて組閣本部に對し、既報の如き寺内大將談の形式で爆彈的聲明が投ぜられ、廣田内閣の自由主義的色彩、現狀維持的觀念に對する斷乎排擊の烽火をあげ、廣田氏の組閣方針には全然時局に關する根本認識が缺如してゐるから出直して來いと強調し、寺内大將は廣田氏を訪問して要求が容れられなければ入閣を辭退する旨を通達した

陸軍の要求は（一）國體明徴の徹底（二）國防充實（三）外交刷新（四）國民生活安定を主眼とし廣義國防國策の強力的遂行を擔當し得べき内閣を作るにあり、これがためには（一）國體明徴問題の解決に當つて遷延逡巡を重ねた小原法相の留任（二）自由主義的色彩の濃厚な下村氏の入閣（三）同様の意味で非常時外交を背負ふに不適任なる吉田氏の入閣（四）内相の椅子を政黨に渡す等に絶對反對し（五）軍需工業會社の首腦者たる中島氏の入閣は不穩當だと指摘し强硬分子はこれがために廣田内閣が流産してもかまはぬと極言した

流産は陸軍ほど强硬でないがほゞ同様の見地に立つ六日ロンドン軍縮會議から歸京した永野修身大將は廣田氏と會見して條件付で入閣を承知したくらゐでのつたか、否か、政界、財界、國民大衆の視聽は、殊に現狀維持派陣營は默々たる裡に必死になつて流産阻止に働きかけた、藏相は廣田内閣流産せんか現狀維持派の蒙る打擊は更に大なるものあり、事態の極惡化を招くからだ、北鮮交渉にねばりを見せた廣田氏は一面軍部の要求を聽從しつゝ飽くまで組閣の完成をはかる決意の下に不合格の烙印を押された人物と椅子について再檢討を開始し七日の廣田、寺内第二次會見で折衝

廣田氏を觀る俎上の人々も時局收拾のために犧牲となつて自己の進退を廣田氏に一任する悪度をとり廣田氏の立場を自由ならしめた、即ち小原法相、下村宏吉田茂の諸氏は何れも入閣辭退を申出で、川崎氏も他の椅子に廻つて内相は官僚畑からとることとして逐次軍部の要求を容れるに至つた

一方軍部は八日に至つて更に政黨出身閣僚の半減案と外は强力なる大陸政策の遂行、内は積極的國内改造の斷行を基幹とする廣義國防國策の樹立强化に關する

覺書 を提示してこれに對する廣田氏の言質を求めた、こゝにおいて廣田氏は八日夜に至つて前記の陸軍の要望を裏書する意味で組閣の概本方針に關する覺書を發表し、かつ吉田調査局長官を招いて調査局の機能の擴大强化につき意見を徴する等軍部の要求を全面的に容認して一意組閣完成へ漕ぎつけたのであるたゞ政黨出身閣僚の半減案については廣田氏から政民兩黨總裁に二名づつとの豫約をしてある關係上廣田氏は政黨と軍部の間に板挟みになつて窮境に陷るので極力軍部側の讓歩を求めまた軍部の意中の人物を法相に据ゑることは司法部内に强硬な反對が起つたのでこの點について軍部を説得した結果、九日の廣田、寺内第四次會見で軍部も政黨出身閣僚半減案を讓つて手を打ち漸く廣田内閣の誕生をみたわけである

○今次の内閣組織いおいまらと行はす者間を長くしたのが

歴代内閣組織一覧表

内閣	存續期間	前内閣辭職より新内閣成立までの期間
第一次伊藤内閣	明治一八・一二・二三 辭職 明治二一・四・三〇 成立	【即日】
黑田内閣	明治二一・四・三〇 辭職 明治二二・一〇・二五 成立	【即日】
第一次山縣内閣	明治二二・一二・二四 辭職 明治二五・五・六 成立	【二ヶ月】
第一次松方内閣	明治二五・五・六 辭職 明治二五・八・八 成立	【即日】
第二次伊藤内閣	明治二五・八・八 辭職 明治二六・八・三 成立	【十日】
第一次松方内閣	明治二六・八・三 辭職 明治二九・九・二九 成立	【廿日】
第三次伊藤内閣	明治三〇・九・二九 辭職 明治三一・一・一二 成立	【十六日】
第一次大隈内閣	明治三一・六・二〇 辭職 明治三一・一〇・一〇 成立	【六日】
第二次山縣内閣	明治三一・一〇・一〇 辭職 明治三三・一〇・二七 成立	【十日】
第四次伊藤内閣	明治三三・一〇・二七 辭職 明治三六・六・二 成立	【廿四日】
桂内閣	明治三六・六・二 辭職 明治三六・一〇・二 成立	【一ヶ月】
第一次西園寺内閣	明治三六・一〇・二 辭職 明治四一・七・一四 成立	【十八日】
第二次桂内閣	明治四一・七・一四 辭職 明治四四・八・三五 成立	【十一日】
第二次西園寺内閣	明治四四・八・三五 辭職 大正元・二・五 成立	【六日】
第三次桂内閣	大正元・二・五 辭職 大正二・二・二〇 成立	【十七日】
第一次山本内閣	大正二・二・二〇 辭職 大正三・四・一六 成立	【十一日】
第二次大隈内閣	大正三・四・一六 辭職 大正五・一〇・九 成立	【廿四日】
寺内内閣	大正五・一〇・九 辭職 大正七・九・二九 成立	【七日】
原内閣	大正七・九・二九 辭職 大正一〇・一一・一三 成立	【九日】
高橋内閣	大正一〇・一一・一三 辭職 大正一一・六・一六 成立	【七日】
加藤(友三郎)内閣	大正一一・六・一六 辭職 大正一二・九・二 成立	【八日】
第二次山本内閣	大正一二・九・二 辭職 大正一三・一・七 成立	【十二日】
清浦内閣	大正一三・一・七 辭職 大正一三・六・一一 成立	【五日】
第一次加藤(高明)内閣	大正一三・六・一一 辭職 大正一四・一・一八 成立	【一一日】
第二次加藤(高明)内閣	大正一四・一・一八 辭職 大正一五・一・一七 成立	【三日】
第一次若槻内閣	大正一五・一・一七 辭職 昭和二・四・一〇 成立	【四日】
田中内閣	昭和二・四・一〇 辭職 昭和四・七・二 成立	【二日】
濱口内閣	昭和四・七・二 辭職 昭和六・四・一四 成立	【二日】
第二次若槻内閣	昭和六・四・一四 辭職 昭和六・一二・一三 成立	【一日】
犬養内閣	昭和六・一二・一三 辭職 昭和七・五・二六 成立	【三日】
齋藤内閣	昭和七・五・二六 辭職 昭和九・七・八 成立	【十一日】
岡田内閣	昭和九・七・八 辭職 昭和一一・二・二七 成立	【六日】
廣田内閣	昭和一一・二・二七 辭職 昭和一二・一・二九 成立	【五日】

複原制

都の模様がいろ〳〵変改をかへり、なほ甲都から往その結果が如何と思つて一時流産でもするかと思いたれども、なほ前と変つて、ハツキリ知れるのでなく、どうく気味を探さんとのび出いやうな気がしたが、先例で見ると、陸軍の大臣と多く長くて長くも、成立後の注意を惹いたが、軍部は政党を変へるの止めよとまむ注文に対の代表と出したんなるが、解る信用が狭い地子であるの大勢は甲都を土の内閣でなく、首相は出ようく貴族が出やう義相の前金)も思い出るる。(三月十日)

○北陸の地は御土と云くと菓子屋さん、田舎の御土の雪ちゃんと云ひ合四の干菓子

の関係と位すると菓子屋（大）の月旦は、加賀の国「長生殿」と云ふ義で上品の干菓子であるよりは寧ろ今の大福餅が、京山の如き形の紅白の干菓子がある、古風生麩と日京の餅

武士達の今度は「蒲鉾」と云ふ名菓のあるを知つた、二寸見ると羊羹の如き「蒲いぶくろ」が、両側の三角の砂糖が塗つてあつて、中を餅米で出来てあれ、口中で入れると軟かい、自然とほどけるやうな味がする、これも色紙で鄭寧で品位の清らかな菓子と思ふ此、彼岸まへどんな菓子があるか知らぬが、雪白の紙然（松竹）さんが、どんな菓子と上品の點に於て辺地のよりはうまい、雪国でも流石の如き国産があるも偽でない

薄氷沼菓の大要

禁裏御用

往時前田家が京都国射水郡国米寺を経て毎年当店製の菓子を禁裏御所へ献上せり

藩主御用

以藩主前田齋泰公江戸参勤の時土産として浮世を慰安せんとなすの大要

ご注文御用達
薄氷　本舗

富山県射水郡
西砺波郡石動町　西橋本　第十四区　海老屋八左衛門　達白

電話　三拾九番
振替口座金沢三五〇七番

宮中御歌所寄人手繁乱明様出寄詠

春永あちはひなるの屋こうゑよう
とゝ寄ぬ人なしもみやこうゑ
たゝ寄ぬ

○五寸の短冊に春の七草を選んで御題三月十一日の紙上に書きしに、其の切りあきは北の冊子の終りに貼りつけて置いれが、七草の品目は

スミレ　ゲンゲ　タンポヽ　ツクシ
菜の花　野アザミ　シエンラン

右のごとく書き、北の方七草の根本の絵もかいつけ

○此の題の出典は根本絵味がある。福寿草やさくらの花のごとく及第すれば、シエンラン、や野アザミの反対である。

○古い詩に詩を書き播種し栽培するとあり、収穫するかの字の如く深い意味がある。銭舎家いらい無び人の栽培に任して維持する様し○高の集大りの播るかい、実は自分の経験をさらけ出すのである。否らざるも能者の情し集めるく種を蒔くことのである。利巧のまねの栽培をとしてその結を受け入れ其の収穫を自分のものとする。いつまでも三毛金と墨堤を散策し此時、彼れの例の訓戒が、実験に相手に問をかけ、美を点して彼是考えてみると、自分の何も得る

所がある、後の人奴隷を買て食ると義がつくと、後
世家に奴を性命心と感じたるを得ん
○物多く附帯のものがつき纏ひ、其附帯物の
不用なるを保せて求めがたしめ、注人を納る
る連れ子のあるこの大也も厄介な附帯物である、露の
諺に「土地を買くば石も買ふ肉を買くば骨も買ふ」
を買くば諺も買ふ、よい酒ばかりはお買がうない」と
云んは酒の欲、[illegible]と云事を云へり。
○銃浮は困難の業び兎角すると原低の高る変るこ
とがある。利産をもつて原低のセイドを
富すことの出来ない。原低者から見ると[illegible]
不満なのようなるので、西洋から銃浮者は反

逆者だ」とする諺があるが、羅甸語に反浮と云ふ
字と反逆と云ふ字とが酷似してゐるのもめづらし
い。此諺が起る所以である。

Traduttore, traditore.

○酒を減じて言ふに茶四いろ〳〵あるが、茶実酌り
感服するものが無い。西洋では流石に新らし
い唐茶諺がある「海中にも杯中にも溺死多し」と云
ふことは此国の酒蔵がある。
○手寄りに分て国々に別れ上つて茶を得ること
がある。邦俗動もすると之を延新して雪隠の中の立文
に在茶がある、保し厠に人として変る

らしむる所、如何なる力が起らうとも限らうまい。支那人などでも国の状態として、「国に上つて帰る心去る時と異なり」（上国而帰心異去時）と云つてゐるが、上国の時と、[illegible]出る時とは、兎に角心持の相違がある。

○西洋の諺で深刻を感じた一例に「西班牙あるの諺ひあるが、「百年の恨尚氣遠を有す」とあるが、百年経つても一向衰へない怨恨のことを幼稚とは、まことに、如何に義理が深いか、親戚関係の厚さを物語つて、国民を動かす感情があるべき筈である。

○昨日の夕の雲は傷ましい。

「とい清[illegible]ら〳〵実際を穿つてゐる。大概寺い絶景の寺の僧達は、風景の心得がなく、絶景の中にゐながら一向仕合せとも感じない。朝夕目慣れる風光は何等の感情もない。エマーソンの語に、風景を所有し得る者が真に富める者である」と云つたが、寺の風景は富める土地の所有者である。「真に富豪は実に寺の鈴土と云つてもいい。[illegible]節を曳て徒訪する風流客の鈴土とは、[illegible]真の鈴土は、愛のない所に[illegible]。誰でも心ある人の[illegible]が実際鈴するやうである。即ち多くの風景区の人の取る任しである所が多く、風景自分さんが本性であるのだ。

あり得るのみである。それはN・D・Cが、モット主類排列の順序位でも整頓し、モット類綱の名稱を妥當ならしめ、モット助記號の使用を第三位以下として我國圖書館の實情に適合せしめ、モット本當の意味に於て

二月の二日節分の前奏曲として福内鬼外を放送し、歸路自動車内でつく〴〵感じた。節分の豆蒔などの興味は全く青春時代にある。あの老若男女が無心にキヤツ〳〵と騒ぐ賑はひは、老境に入つては唯だ夢裡の想像に過なくなつた。全體節分の行事は家族の少ない狹い家庭にやつては興味がない。行事が賑はないからだ。自分が田舍に居た小兒時代の事を想ふと、家も廣かつた。家族と仕用人をも併せると通例三十人位家に居つた。家庭の規模が此位であると、節分の豆蒔もやり甲斐があつた。母屋から隱宅婢僕の部屋〳〵まで隈なく蒔と相當に時間もかゝつた。此夕べはどんな秘密の處へも年男は立入る權利があつたので、下婢などをいやがらせた。此夜は自然無禮講の態であつたので、男女は入り亂れて豆拾ひに喧噪を極め、終りの果てに年男を擁して胴あげをやつた。これがまた莫迦に陽氣なもので一家沸が如き騒ぎとなるが、平生憎まれてゐる番頭などが年男となると、胴上に家例として此夕べは一同に酒を饗したが、此氣節はまだ雪の深い時であるのに、家の中では時ならぬ春氣分が張つて、小兒ながら自分は愉快を感じたが、今はどうかと云ふと、相變らず豆を蒔くけれども、一家寂莫たるもので、眞に今昔の感に堪へない。偶々也有翁の節分賦を讀んで見ると、翁も年老てからの追儺には興味がないと歎じ、此老ぼれを鬼と共に外へ掃き出さないのは、せめての幸だと云ふてゐるが、私も翁と同感同歎を禁じ得ない。

江戸兒の任俠

私が青年時代或る江戸兒から聽いて今尙ほ記憶にあるのは左の一話である。江戸には諸藩の屋敷があつて、召抱へられてゐる面々は外出しても門限には必ず歸らねばならぬ規則もあつた。邸内のある奉公人が外出中、久方振りで懇意の仲間に出會つた。珍らしがつて互ひに立話をしてゐる内に、門限の時が迫つたので、屋敷ものが云ふには、どこかへ行つて一杯やりたいが、門限困つたと云ふて一杯飲んだ積りでセメテも と言ひながら、今しがた買つて手に下げてゐた陶器を惜し氣もなく地上に抛つて粉微塵にし、それを心よげに見てこれで氣がヤツト濟んだと云ふて別れた。と、この話は卒然考へると、江戸兒が人前に見えを張つたに過ぎないやうに見へるが實はなか〳〵複雜な原因からコンナ妙な氣前が生ずるのである。江戸兒は封建時代の環境で任俠的の氣前も自然養成せられ犧牲的精神もどうかすると閃くが、以上の挿話なども其の一端であらう。しかし江戸兒の氣前の淵源を尋ねると、隨分古ゐ時代にまで溯らねばならぬと我は此頃平泉澄氏の「中世紀の精神生活」を讀んで感じた。その中に「源平盛衰記」を引き奇拔な送別會の記事のあるのに注意を惹くと共に、江戸兒氣性の淵源も古るいものだと感じた。盛衰記の記事は日吉神社の祭に關係武士成田兵衞爲成が不都合があつた廉で伊賀へ流罪に處せられることになり、其別れを悲んで同僚共がある人の家に集つて送別會を開いた。席上段々醉が廻ると、

甲が「兵衞殿田舍へ御下向に御肴に進すべき物なし、便宜よく、之こそ候へ」

とてモトヽリを切つて抛り出した。つゞいて

乙「穴面白やあれに劣くべきか」

とて耳を切つて投げ出す者が出、はては

「大事の財惜しからず、大事の財には命に過ぎたる者あるまじ、之を肴に」

とて腹かき切つて臥した男さへあらはれた。そこで成田兵衞も

「穴ゆゝしの肴ともや、歸り上つて又酒飲む事も有り難し、爲成も肴出さん」

とて自害した。こゝに家主の男これを見て、我一人生き殘らば、六波羅へ召出され安穩なるまじと思ひ、家に火をかけ、中二博士もゐた。食卓では坐が隣接してたので、勝手な話が出來た。田中館博士がメートルをあげて、外國の下宿で主婦の老婆に惚れられた自白もおかしかつたが、田中博士の料理談にも頤を解いた。田中博士は誰れも知る通り帝大を卒業すると洋行して十三年も伯林にゐて、音樂の大發明をやつたが、此十三年間は隨分つらかつたと語り、毎日の西洋料理にも飽き果てゝ、時には日本料理を自分で試みた。或る時某日本の大官が公使館に見へた際、日本食を饗應することになつて、自分が其料理番をつとめることになつた。其時の料理は鰻の蒲燒で、實は自分に荷が重過ぎたが、どうやらお茶を濁して田中は料理が上手だと評判された。其後外國の某紳士夫妻を吾公使館に招いた時も、客から特に蒲燒の注文が出たので、亦自分（田中）が腕を揮ふことなつ

圖書館雜誌　昭和十一年三月（第三十年第三號）

七〇

在外日本人が公使館でいろ〳〵相談したが何分其頃は餅米は愚か、米と云へば南京米の外には手に入らず、やつとのことに日本米を手に入れたが、さて之を搗くに臼も杵も無く、銘々が手で鍊りつぶして、怪しげな餅を作つたことがあると云ふ話も出た。

石川博士と猿

前項と同じ席上林權助氏の石川博士に對する追憶談は簡潔で頗る要を得た。流石に外交家はうまい。林氏曰く

私が外國に大使をしてゐた頃、石川君は訪ねて來られた、その時相携へて散策し動物園に游び、猿の居る檻外に立つと、猿は自分に對し頗る不遜の態度であつたが、石川君が現はれると急に其の樣子が改まり、宛がら故人にでも會したかのやうに、親しみのある態度になつたのには自分も感心させられた。

霊知霊能の人間が鳥や魚を學んで出藍の名を博さんとし、鳥の眞似だけは既に成功し、其の飛翔の安全と速力の迅速は遙かに鳥を凌駕するに至つたが、魚を學ぶ潛水艦しめる。一枚の盆に二十箱程のヘギを載せ其の頂點に汁の德利を三つ四つ積んで毫も危なげなく安々と運ぶさまは正に一種の藝術である。又或る喫茶店で感心したのは、な落語家や駈け出し未熟のものが此失を免かれない。演說や講演などする人でも、不慣れの人は、おかしみのあることを云ふ前に、豫じめそれを匂はせることが往々にし

丙子老録（三）

春風生

節分の歎

二月の二日節分の前奏曲として福内鬼外を放送し、歸路自動車内でつく〴〵感じた。節分の豆蒔などの興味は全く青春時代にある。あの老若男女が無心にキヤツ〳〵と騒ぐ賑はひは、老境に入つては唯だ夢裡の想像に過なくなつた。全體節分の行事は家族の少ない狹い家庭にやつては興味がない。行事が賑はないからだ。自分が田舍に居た小兒時代の事を想ふと、家も廣かつた。家族と仕用人をも併せると通例三十人位家に居つた。家庭の規模が此位であると、節分の豆蒔もやり甲斐があつた。母屋から隱宅婢僕の部屋〳〵まで隈なく蒔と相當に時間もかゝつた。此夕べはどんな秘密の處へも年男は立入る權利があつたので、下婢などをいやがらせた。此夜は自然無禮講の態であつたので、男女は入り亂れて豆拾ひに喧噪を極め、終りの果てに年男を擁して胴あげをやつた。これがまた英迦に陽氣なもので一家沸が如き騒ぎとなるが、平生憎まれてゐる番頭などが年男となると、胴上に托して落さるゝこともあつた。自分の家の家例として此夕べは一同に酒を饗したが、此氣節はまだ雪の深い時であるのに、家の中では時ならぬ春氣分が漲つて、小兒ながら自分は愉快を感じたが、今はどうかと云ふと、相變らず豆を蒔くけれども、一家寂莫たるもので、眞に今昔の感に堪へない。偶々也有翁の節分賦を讀んで見ると、翁も年老てからの追儺には興味がないと歎じ、此老ぼれを鬼と共に外へ掃き出さないのは、せめての幸だと云ふてゐるが、私も翁と同感同歎を禁じ得ない。

江戸兒の任俠

私が青年時代或る江戸兒から聽いて今尚ほ記憶にあるのは左の一話である。江戸には諸藩の屋敷があつて、召抱へられてゐる面々は外出しても門限には必ず歸らねばならぬ規則もあつた。邸内のある奉公人が外出中、久方振りで懇意の仲間に出會つた。珍らしがつて互ひに立話をしてゐる内に、門限の時が迫つたので、屋敷ものが云ふには、どこかへ行つて一杯やりたいが、門限があつて遺憾ながらそれが出來ない。ア、困つたと云ふて一杯飲んだ積りでセメテもと言ひながら、今しがた買つて手に下げてゐた陶器を惜し氣もなく地上に抛つて粉微塵にし、それを心よげに見てこれで氣がヤツト濟んだと云ふて別れた。と、この話は卒然考へると、江戸兒が人前に見えを張つたに過ぎないやうに見へるが實はなか〳〵複雜な原因からコンナ妙な氣前が生ずるのである。江戸兒は封建時代の環境で任俠的の氣前も自然養成せられ犧牲的精神もどうかすると閃くが、以上の挿話なども其の一端であらう。しかし江戸兒の氣前の淵源を尋ねると、隨分古ゐい時代にまで溯らねばならぬと我は此頃平泉澄氏の「中世紀の精神生活」を讀んで感じた。その中に「源平盛衰記」を引き奇拔な送別會の記事のあるのに注意を惹くと共に、江戸兒氣性の淵源も古るいものだと感じた。盛衰記の記事は日吉神社の祭に關係武士成田兵衞爲成が不都合があつた廉で伊賀へ流罪に處せられることになり、其別れを悲んで同僚共があるる人の家に集つて送別會を開いた。席上段々醉が廻ると、

甲が「兵衞殿田舍へ御下向に御肴に進すべき物なし、便宜よく、之こそ候へ」とてモトヽリを切つて抛り出した。つゞいて

乙「穴面白やあれに劣くべきか」

とて耳を切つて投げ出す者が出、はては

「大事の財惜しからず、大事の財には命に過ぎたる者あるまじ、之を肴に」

とて腹かき切つて臥した男さへあらはれた。そこで成田兵衞も

「穴ゆゝしの肴ともや、歸り上つて又酒飲む事も有り難し、爲成も肴出さん」

とて自害した。こゝに家主の男これを見て、我一人生き殘らば、六波羅へ召出され安穩なるまじと思ひ、家に火をかけ、炎の中に飛入つて自殺した。

以上の如き事實が果してあつたかどうか知らないが、あの頃の氣風の一端は如實に描かれてゐると見てよからう。斯る士風が德川期になつても侍は勿論町人の血にも浸潤して、俠客の如きものを出したのは決して偶然とは思へない。

田中正平博士の料理

前月石川千代松博士の追悼會のあつた時四五の同窓が落ち合つた、其中に田中館出中二博士もゐた。食卓では坐が隣接してゐたので、勝手な話が出來た。田中館博士がメートルをあげて、外國の下宿で主婦の老婆に惚れられた自白もおかしかつたが、田中博士の料理談にも頤を解いた。田中博士は誰れも知る通り帝大を卒業すると洋行して十三年も伯林にゐて、音樂の大發明をやつたが、此十三年間は隨分つらかつたと語り、毎日の西洋料理にも飽き果てゝ、時には日本料理を自分で試みた。或る時某日本の大官が公使館に見へた際、日本食を饗應することになつて、自分が其料理番をつとめることになつた。其時の料理は鰻の蒲燒で、實は自分に荷が重過ぎたが、どうやらお茶を濁して田中は料理が上手だと評判された。其後外國の某紳士夫妻を吾公使館に招いた時も、客から特に蒲燒の注文が出たので、亦自分（田中）が腕を揮ふことなつた。自分は臺所でぬらくらの鰻を俎上に載せ、眼に釘を打つて、いざ刀を以つて肉を平ざかんとする時、自分の背後に突如悲鳴が起つたので驚いて振り向くと、紳士の婦人が見物に來てゐて、眼に釘を打つたのを見て驚ろいたのであることが知れたが、此の夫人は後に「田中と云ふ人は文化的の人だと聞いてゐたのに案外野蠻だ」と人に語つたと聞き一笑したと語つた。尚ほ同博士の話しに新年に際して餅が喰ひたくなり、在外日本人が公使館でいろ〳〵相談したが何分其頃は餅米は愚か、米と云へば南京米の外には手に入らず、やつとのことに日本米を手に入れたが、さて之を搗くに臼も杵も無く、銘々が手で錬りつぶして、怪しげな餅を作つたことがあると云ふ話も出た。

石川博士と猿

前項と同じ席上林權助氏の石川博士に對する追憶談は簡潔で頗る要を得た。流石に外交家はうまい。林氏曰く

私が外國に大使をしてゐた頃、石川君は訪ねて來られた、その時相携へて散策し動物園に游び、猿の居る檻外に立つと、猿は自分に對し頗る不遜の態度であつたが、石川君が現はれると急に其の樣子が改まり、宛がら故人にでも會したかのやうに、親しみのある態度になつたのには自分も感心させられた。

選擧三要

戯れに選擧の要訣を說くものがある。一に曰く「カバン」二に曰く「地バン」（盤）三に曰く「カンバン」（看板）と。如何さまよく擧げた。逐鹿の勝敗は全く繫つて此の三訣にあるのだ。中にも勝敗の決を握るものは第一とす。なぜなれば投票の兌換券は此中にあるからだ。

未來の鳥魚戰

霊知霊能の人間が鳥や魚を學んで出藍の名を博さんとし、鳥の眞似だけは既に成功し、其の飛翔の安全と速力の迅速は遙かに鳥を凌駕するに至つたが、魚を學ぶ潜水艦は未だ魚を凌ぐ迄には成功しない。何分艦内が窮屈でもあり、陰鬱でもあるので、西洋人の如き長幹肥滿の人間は之れを厭ふてゐるに反し、日本人は身體が矮軀であるのみならず屈伸自在の手足を有し、魚を學ぶに適してゐるので、西洋では嫉んでしきりに妨言を加へんとし、いつの軍縮會議でも彼等は潜水艦の廢止を主張してゐるが、これも其内には出藍的に魚の眞似に成功し、魚の如く方向を誤らずに進退し、縱横自在に游戈して勝手に浮き沈み、機械の操縱でどんなに早くも走らせ得るやうにならないと誰れが言ひ得よう。飛行機だとて其の成功を收めたのはつい大戰後の事で、工風に工風を積めば彼が如くなるではないか。魚を學んでの成功も恐らく今後二三十年を待たないであらう。遠觀すれば今後の戰爭は鳥魚の戰爭で海洋に浮ぶ艦艦は案外力を失ふことになるであらう。日本が今後極力心血を注ぐべきは魚に倣ふことであらう。

しめる。一枚の盆に二十箱程のヘギを載せ其の頂點に汁の德利を三つ四つ積んで毫も危なげなく安々と運ぶさまは正に一種の藝術である。又或る喫茶店で感心したのは、皿洗ひの敏速で且つ巧みであることである。五六枚のコーヒー皿を湯壺から掴み出し、それを幾枚も重ねて指に挿み、順次に布巾で拭き清よめる事の早さ、看る〳〵二三十枚の皿を綺麗に拭き終つた。新宿の某菓子屋の店頭で飴を切つてゐる家がある。繩のやうに長く伸べた飴を庖丁で切る事の早さ、おのづから拍子があつて、手中に尺度があるかのやうに、切られた飴に大小の不同がない。往年北海道のビール會社に香氣を敏感する一婦人がゐた。幾百本の空ビンの集まつてゐる所に臨み、普通は一々ビンを取つて石油などの惡臭のあるのを取りのけるのだが、此の婦人は其場に臨むと、どれかれと指摘すれば百中するので頗る調法がられてゐた。又鮨を握ることにも巧拙があつて、江戸兒は鮨は氣で握つて氣で喰ふものだなど云ふてゐるが、此握りに熟するには相當の修業を要する。然るに此道の天才とも云ふべき少年が三原橋の某鮨屋に居り、食通は後生恐るべしと云ふてゐる。

可笑味

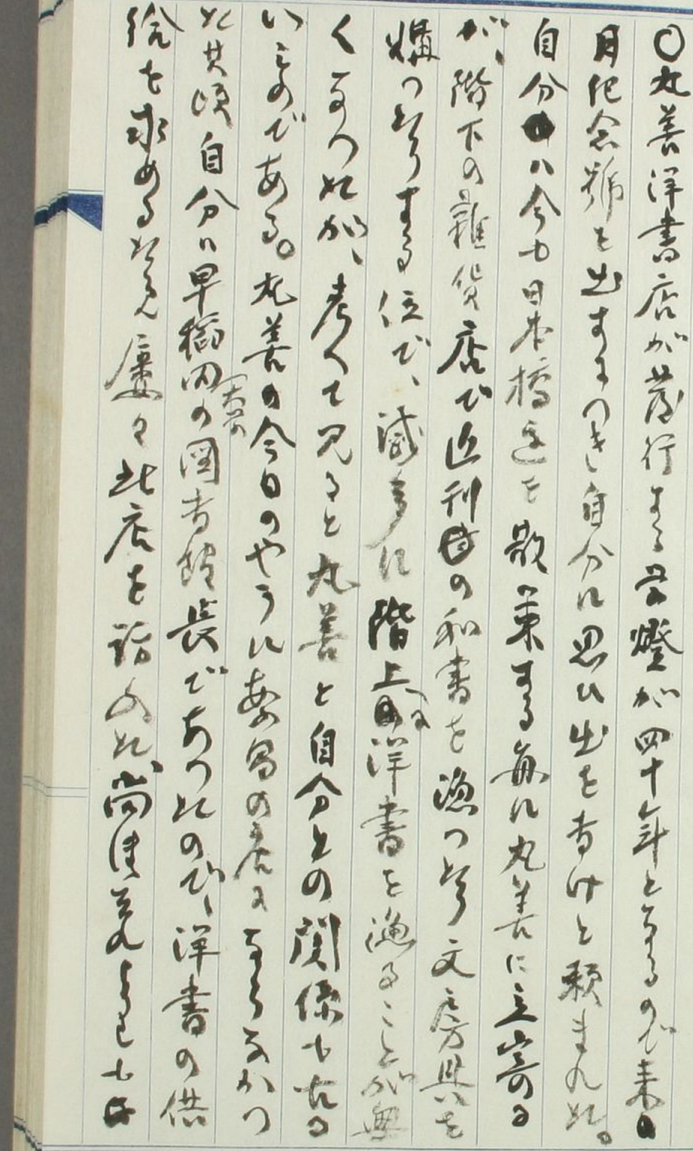
藝人などが滑稽を弄して人の笑を博せんとする時、先づ自から笑ふものがあるが、それは却つて可笑味を殺ぐことになる。拙な落語家や駈け出し未熟のものが此失を免かれない。演說や講演などする人でも、不慣れの人は、おかしみのあることを云ふ前に、豫じめそれを匂はせることが往々にしてある。此期待があるから愈々面白い話となつても其割合に興味を惹かない。狂歌や俳句などでも初句に「をかしさは」とあるのがある。これなどは全くの贅句で、おかしさはと斷はらずとも、おかしさを十七字で言ひ現はせばよいのである。内容を說明する語を前置するなどは拙の尤も甚しいものと云はねばなるまい。僅か十七字の内五字をば斯く無益に遣ふなどは、愚の骨頂で丁度おかし味ある話をする前に豫告をする初心の講演者と同一般である。

不合理の詩材

科學が進んでくると詩なども合理的になつてくるのは自然の勢であるが、詩の材料は必ずしも科學的であらねばならぬとも思へない。非科學的でも詩的であれば採つてよいものがいくらもある。例へば蚯蚓が聲あるものとされてゐることや、腐草が螢と化すると考へられたりすることや、雀が海中に入つて蛤となると考へられたりすることなどは、今日でも因襲的に俳人に慣用されてゐる。それは不合理ではあるが、宛がら月に聲ありとするごとく、詩的であるから許さるべきであらう。

鄙俗の藝術

何事も熟すれば人間業を離れて神に入るとも云ひ得る。丸ビル附近で毎度見るが蕎麥を運ぶさまが、いつも吾等をして佇立せ



ヅつと前私などが高田大学の主権論が一時都下四
方の新聞に論議された際、高田早苗氏等と
交遊一方ならざりしことの諸友と手分けをして主権
論を唱へたことがあるが、その日本の主権所在論をてさ
理論的、実地の論、乃ち日本の主権所在論をてさ
と辯ずるようなれば、論稿い成つたが出版の方法を困つ
てゐると、出版とあげようと云ふ意を宣べられの丸
善ひあつた。その後君が図書協会の雑誌を刊す
ることゝなつた時、大なる援助を與へてくれたのも丸
善であつた。其頃年四回の発行で遂々月刊となつたが
数年間丸善は無條件で此雑誌を刊行してくれた。こ
れは所論丸善の図書館に対する厚意と云ひたいのである

るが、丸善月刊の雑誌の主任記者内田貢氏が
図書館協会の役員であつた関係から、内田氏の心深くもあ
つたことは言ふまでもない。丸善が以上のかき援助を與へる
やうなつたのは如何なる事情が相伴つて盛運に達したか
ともかく、図書館の廣告費の実績何を割けば雑誌の印
刷費に足りず、何人かもとく乏しく困難した事情があつ
が、随分丸善も困難時代があつたのだ。何んとなく洋書専門
で一店を経営することは或る時代まで容易で無つた。内野
梓氏が神田の開店した東洋館書店が洋書専門で失
敗したのは別な原因もあつたが、他に経営困難も一原因であ
つたのだ。又中西屋洋書店が専門の洋書店で相当の信用
もあつたが、遂に終に丸善に合併されるに至つたのも左様

任意雇を採ることもあるが、他人の例を云ふまでもなく、私なども
が早稲田の出版部一店を開き、教科書や洋書を販売
販売を試みたこともあるが、甘く行かず、丸善の勢力
強く、遂に失敗したことを深く思ひ、丸善すらこと
ごとく、或る商館時代、洋書専門でやり通
やり通した。本書が或る商館時代、洋書専門で
今日の隆盛を見た任意雇を懷かしと、真の敬服
の情を表する。

外国人の供給を引受けた外国人の注文
外国人の教科書の供給を引受けた外国人の注文
の洋書販売の任意商館を採ることは、丸善の或る時代と
同じく東洋銀のみと中商館のみ、又は早稲田のごとく
任意雇を感じたりも無理いとのが、よくも其商館の折

横原製

も勝ちどこまでも初志を変ぜず、洋書専門でやり通
した、其経歴を思ふと、真の敬服する値する、私は震
災前の或る時、久方振り丸善を訪ひ、洋書部を見ると、
一隅も数千の小冊が堆積する洋書部を見れば、何かと手
を取つて見ると、電気のガイドブックであつたが、如何さま
我が工業の隆盛の反映を示すこと感じたが、実
に或る時代の丸善を地般のガイドブックが僅こうと
部あるかういうのは弱の者もあつたのだ。丸善の
風は早くから工業関係の図書を自から出版し、今日も
其が特色となつてゐるが、実に工業書の出版が容易
く見つて、意外行きのよいことむしろ
が工業界はいの寄りも大切のものだ、目前の利を見る書店

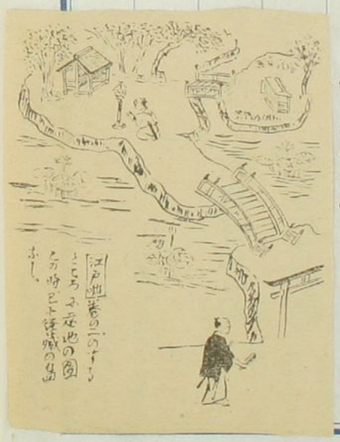
の企て難いようであるが流石に丸善い[illegible]北辰に於ても大家である。

丸善の目宣伝機関の「学燈」で私[illegible]大いに名声がある。新着の図書いろゝを掲げられたのを見ればいろゝ[illegible]今度いろゝ書店から廣告雑誌の[illegible]丸善の[illegible]抵抗一歩の優[illegible]到着及び[illegible]の公[illegible]命ずる[illegible]丸善の学燈を於て[illegible]の逆を異にし、書目以外に出版界の趨勢や景況が掲げられ、四出版界の趨勢や景況が掲げられ、[illegible]珍奇書の説明があり、図書と乾と堂とが論説があり、書史[illegible]の[illegible]書[illegible]ものゝ、必ずや一読の價のあつたものであるこんの主[illegible]の貴氏が其の編輯と撰[illegible]愛しにかゝるの書物、略書家の氏の精神とは[illegible]別着の書物を[illegible]の[illegible]詳論もしたのが、[illegible]紀の雑誌で書史とのお[illegible]書史[illegible]ゝ[illegible]ある位、尚度ゝ宣伝的ゝ出した[illegible]実ゝ切体ゝいゝようであつたが、[illegible]が創刊後早年を経過して更ゝ陣容を改めて四月以後江湖の足みへゝと[illegible]丸善と[illegible]拡へゝいゝようがある。

三月十四日の録、

○自分のいつもや不思湖[illegible]ゝ春時代から[illegible]ゝ変つた湖[illegible]ゝ[illegible]ことがあるが、実の苦しの北池殊ゝ池中の[illegible]の[illegible]

るあつたかかつて浦べにこともそうろうしが、かつていい島の地後きでそうろう。船でいくけんぶ島のある神祠を祭ることも出来そうろう時代がある。弁天の社そばの向きも若しとい変つたらしく、うなかは任花（図書館）と呼いた島の今ある弁天岬の端の岬であるか否や疑もハツキリしてそうろう。かつての地震で崩壊しられらしい。任花ちとと呼いたとまんぶいくらか地域が狭くなる。今の弁天のある高地の地形は（後段の図）「吐」とびあらうと想像さんる江も



そのあたりは出張であり地形は
ふるそうろうかが下図のことくであるが、えゝ
や、現在のこのとくであるが、えゝ

注してあることゝ任花の島がそういとあるから、現在もある弁天祠の右側にある鳥居が任花の跡なれば岬びそいと思はるゝ。同書第二巻の云く思ふが家とうちつゞきの夏いはの蓮花さきそへ八つ二入のそうあるそう、池のやま島有、弁天の宮有、是の谷伊勢寺奉りて立てらうそう、そのかゝい道そうろうそ、そべのまく養を指すことそうそうけり、其後道つきて鳥井も立そう、北の島の内の左又任花有、右の方の中ル役の行者、左は稲荷の宮、古は磨利支天有り、扨この任花いそうなと云ふ者の建立そう」云ふ、えんま伝うて弁任花の ちゝ 浦い弁天祠の右側へ図のとゝ割直庚の

[illegible]島あつそこと任意あるべし、あるくい今の橋あ
る方へ裏ゐて、西の方へ少し参り詰てゐるよし
又ハ口つと後ろ八ツ橋を分ち[illegible]ことも[illegible]とか今茶
天の右側の海ゑ不動あり、その頭部男根ゑ似ることゆつ
て生殖崇拝の表徴と云ふ。[illegible]あんど、役の小角
の像の此に破壊しかるを、後人載んで男根ゑ似
た刻をかくしたるらしく、必体ハ役の小角の像を
るかめし、山来生殖崇拝家程々の説をなせる
附会の説なりと云ふ。但此境内を延命地蔵と云
ふあり、其墓石に「西国三十三所六道接共無縁」と
刻しあるゑへ性的迷信の痕跡あると云ふ。
[illegible]舟形の石の上ゑあるが、別にそこに舟形の石の上ゑあるが、

舟形ハ女陰を表徴するゑと云ふやう。[illegible]
のゑ[illegible]ハ江戸時代の[illegible]頑[illegible]
[illegible]三昧的ゑコンナ[illegible]ゑを[illegible]
[illegible]附近ハ工口テツタの[illegible]祭神ハ女性、島の面影ゑ
りしあ側の茶屋ハ東[illegible]山の[illegible]ハかげまを置ハ
あつゆゑ、連[illegible]柳此の待合が後世[illegible]
ことゆゑ。工口ゑ因縁が目甚此濃厚なるなり。
以上書きゆゑ役ハ敬菓石男池境内ゑ
役の小角の石像をもつて有名[illegible]
ハしくハ角ゑ相違[illegible]
[illegible]致部ハ何か被ゆることゆ
亀頭の如く乃ち[illegible]皆面[illegible]男根の
地蔵ハ破壊さんとしのを

所く細工したらしくも無い或の偽の者を似せて
かえるとか聖天と呼ぶ方もいつたものらしい 近命
地蔵を換へ地蔵を換へ文化八年の刻銘あり、舟形
の墓の上に立てる型 [illegible] 墓と新念仏のやうな完
めんどう墓もろもろの文化の時代を経て在
るを認めた。

○自分は政治の時事を著すまうとは
先ほどのやうなリーデターを就て書かさるを得ない。
からつとめて仔細と綿しかし、金と幸運静と内すると
筆を換へて廣田内閣組閣の任務が就て
言ひ出いこともあるから、まづ政府
少紙をなぞと自分が言ひ人とすること を注文する

軍部の頑張りに憲政常道も解消

著しい舊官僚の擡頭

組閣の足跡

五日間難航に難航を続けた廣田内閣は辛うじて九日をもつて成立した、去る五日の午後四時半組閣の大命を拜して外相官邸に乗込んだ廣田外相は日頃手腕の外交手腕を見せて川崎、馬場、小原、吉田、下村、寺内、永野と重要椅子どころをきめて、その日のうちに親任式を行ひそうであつたが同夜から六日朝にかけて陸軍部内の廣田外相の時局の認識並びに閣員に對する不滿は既に硬化し好調の船路に一大暴風雨を捲き起してしまつた、軍の強硬抗議に遭つては如何とも施す術もなく遂に組閣方針は一瞬にして破綻になつてしまつた

△

陸軍の言分は

一、廣田外相の時勢認識缺如、殊に陸軍部内の新氣運に冷淡を輕視してゐること

一、閣僚の顔觸は非常時局を擔當する上において余り信を置けぬこと

一、道義的に留任閣僚を好まぬこと

一、政黨からは政民各一名づつとすること

等であつた

△

サーベルをガチヤつかせながら、かう啓澤山に持ちかけられたんだから堪らない、そこで外相は時局認識については醜態な廣田暴明を出させられろし、軍の好まない銓衡溝みのものには一々因果をいひ含めると共にその場で面目に後任を捜すやうな珍風景を展開した

△

組閣の部の外は陸軍の傳兵に取捲かれて廣田も五日間を苦悩に通したが、やつと九日の夕刻になつて人選を終へたのは彼の頑張りが利いたともいへる、そして大体陸軍のいひなりになつたものであるが、一つ頑張り通したのは政民從から二名づゝの方針を貫徹したことだ、これは政黨方面からの入智慧や掛け聲もあつたからでもあるが、廣田にしては醜態の殿存してゐる限り陸軍側のいふやうな一名づゝといふ見くびつた質似は出來なかつたわけである、この歩み寄りには相當暗をつぶしてゐるが、これはたつた一つ廣田の成功であつた

△

閣僚の顔觸は成る程年齢が低下してゐて稍やフレッシュな感を持たしてはゐるが、たゞそれは年齢の點だけで有能練達中堅有爲どころを網羅してゐることは如何に贔屓目に見てもいひ切れない風景だ、組閣には相當骨を折つたが、一時政治家ならぬ廣田のヘマな骨の折り方や粗製濫造、何時の新味も期待も持つわけにはゆかず浮び上つたのは舊官僚の潮や、馬場、永田、林と組閣出入帳でもつけるとなると吉田、中島▲先途を見届つて辭退したもの田澤、結城▲間に合せの椅子に怖れを抱いて辭退したもの三上

といふことになり、つまりころは八方寄木細工の根幹に縋りのないものであることが判明し詞時に政黨のある意味での退陣で重要な椅子は舊官僚に横取されてしまつたもので國公の本能たる政黨遮復闘など系爪の皮と吹ッ飛んでしまつた

△

組閣のゴタ〳〵はどこ迄もつきまつて行くのが例だ、陸海軍はいじめるに手頃な廣田首相に對して國防運動を始め、國体明徴對支問題問題、陸軍の動向等海軍は一九三七年の國防計畫等について過大な要求をなしてゐる陸海軍としては將來相當物をいふ言質をとつてゐる、この言質は將來やかましく物をいふにきまつてゐる

廣田はこのあやふやな寄木細工式内閣を提げて——軍部の言質に戰慄しながら、徐ろに歩み出すわけであるが、果して彼のいふがやうに鄂進日本にふさはしい政黨の實現が望まれるかどうか、これからが見ものだ

り書いて居るのだ、美を偽用したこの人物の有業は
かくて、廣田内閣の軍部の横暴りて出来たやうな
感じがする。後がおそろしい、陸軍の把握とふあ
が既に新聞紙にも出てゐるが、二十億の軍費を六年
間割る要求するとふことも其の長所に挙げ
てある。別の廣軍術を絶退、強国が銀を
節約する(軍備競争)をやることもよろしい、日本もそ
の相手をすることは出来ないとしても無謀の
事は無いやうな国が云ひ云ひ、政府云ひ云ひ、軍
部を壓する大人物が内閣を欲しいのだが、それが無
いのだ。実に心細い。

三月十五日記

○ある夜、人がうじゃうじゃ小劇場の

役者連)の音唱をいろ〳〵聴つた。中にある国体の劇を
演ずる前に先だち一座の粗末の式服を着けて輪座して宗
教的の儀式を行ひ、劇を例とし、演劇が終ると赤旗のこと
をまるのを例としてゐるのだ。儀式が一回を
緊張せしめて、藝を効果があると云ふ訳が、なるさま
ないと思ふ。法華宗徒が南無妙法蓮華経
を唱へ、門徒が南無阿弥陀仏を唱へるので、○宗徒
の心持を緊張させることいふから、宗教を藝術
りることい確に方便である。

○大本教も別段やうに、教祖お一人さまを不敬罪の罪名
が附してある。綾部の本宅を初め全国を没収されもある
まいとの所業の表)から、破却さうしたことである。

実に先年も不敬罪の罪條に問はれさんとしたるに時
治印佐の特赦に依り僥倖にも免さんとしたのであるが、
皇室に対し不敬の陰謀を抱くことのみ到底根本的に
排撃されることゝなつた。自分は大本教が大の嫌ひ
で、前年久須美雪堂廣井紅秋と山陰辺旅行の
途上綾部を訪ひ久須美雪は大本教の本殿を見
物する出来なかつたが、自分のみは参殿を強ひられ
ることゝなつた。其際自分は久須美雪と立ち入り、此点は若
し韓民族が移住し来り地名を漢
民族が植業を営み人名を残してゐる。彼等大本教が
信者四倍に成長の言動をなすのは、或は
民族

中学校庭（正面玄関の前）

が其間須い大本教が特赦を得た後であつたことを
自分の漫言も何となく當つてゐるやうな氣がする。
○此頃は毎晩和馬御殿の隠
業集を翻読してゐる。流
の業績は自分のなほ忘れがた
んくらも自分の印象に残つてゐるのは扶
桑とかいふものである。自分
の興味をそそる、彼の古い
たるを読むと何となく心地
よ長るやうな氣がする。
悔しかつたやうな氣
がするのである。彼の語る

とのまくいの口絵にあるように、飛騨の風土を知ることを
別る感じもある筆致が、他方の人が後人に異なる
らのやうに感ずるかも知れない。彼の深く雪に鎖
された心地を表白がありそれとなくみるが果して
他国の人が同じく感ずるか、雪に鎖された後
つきづきしく思ひ出でるは、御風が飛騨に住めるの、御風
が郷土を引出して都つをとるこゝろの所以もこゝ
に、繁んが説く人物を見て一篇曰く曙
見び、[illegible]る筆のすゝは北の三者のみを出すのみ、
何となく寂しつゝ感ずるきこともあるが北の三人は実
は私自分七姉妹人物比較研究、私が御
風らしき先輩に御風が帰郷しきい是れ前

樣原製

に、[illegible]故郷を対して其の集を読み、其の任務
を問べんとするあるかゝ、あしを彼の説話に同感がある。
北海三人は御風の筆を得たのは仕合せであるが、御風
も三人あんばいを相方の[illegible]を使ひたるこゝろあるべし。我
郷国のことを思ひ出でいろ〳〵あるようでも、筆はまく
ういばしりして、御風のやうに四内を及び世を及んびな
ばかりは但し何かが御風の筆に未れ出の風景と及ぶな
い。かれ其の材料は上、中、飛騨方面の[illegible]に未れ下飛騨
及人びゐるこいのは遺憾である。御風の筆が下飛騨方
の及ぶのいかゝ後びあらう。

三月十五日記

○西洋の国古代味家や蒐集家や国古狂や国古の使や、国
土獲得の鼓舞や国古の日音の蒐集とを就ての移転

を渡んで見ると、人情いづれも同じく日本とさして異つて居らるゝ、唯だ異なるのみ、彼んの桂園は大陸的で大氣魄であり、書物の使い方稱賛とする（異か）けれど官僚的である、狂亂家と成ると書物を得たい者の人を殺すの者いふも有る。実例の歌詠まるゝ事あるを奉けると、或る者の同志を集めて同志の所かゝる毋城を二個所設置して之を寄庫と尚て此れを分ち、同じく人が大陸に移る別を定て同志を集めて本国を捨て他に出先の国々に或つも寄庫を心つけ例へば、或る先生の集家に為る寄庫に或る者の竿を撰くて者物を過ぎ竿の長さを書物の山高が達（しるけんば満ち）しるけれども多かれ、或る人は外国へ移住する方り国書を移すに国の此れ、

複原製

は本物を書物を出る為国の関税を掛ける為書を移すことが出来ずして此れを余儀なく話もある。随分盲目的と多数を会つて快とする為寄家もあつて、或る者の国書を集めたが、敢て自ら満足して人と見ずして、唯積むを以て快とし、故に人の集る方が多く礼服を駁び死後為書を売分する為とすること、二束三文であつた例もある。今る亦者寄家が細君の諫めを已むを得ず控へると、神社裏別とする習も亦死人の例もある。書物を鏡賞的かゝる稀覯の書物を厠のおとし紙に仕つた例の或る具眼者が他人の家を厠と貴重書の断片を為見せ其家族へ云うすると、自分の家祖は可なる書物を所持して居れが野蛮だから、古い間おとし紙に使用した

今は漸く無くなつたと云へば云へるが、此の世界は眠る人はいとく惜しんで
世と云ふ話しもある。あるお悪魔のある愛書家が棺桶やタイ
トルページを好き所望する人を蒐集するのを楽みとしてゐる。
貴重書をサンくの魔術師は話や、無闇に華麗な紫釘
と称へて古色蒼然たる珍書を無智の製本師に托し、金
箔紫檀等紫釘に成つたが、男子の載ち義さん古
色に成び大きなキツネ色のちつた鼠色のいとり紙等
みんなくどこうもあるまいと云くる或る愛書家の義
事が主人の留守に留守番がめつたに無格であるのを因
つて蔵一杯失かもまんと大事とある貴重の本を根太の下
に隠し置所、主人が帰り侵さん、出しても金く変形を
失つてゐたと云ふ話もある。外国の猫の家は人間の皮

複原製

を剥ぎ四足をナメして者共の標的として珍本呼ばはり
をし此まがいくらもある。刑死の罪囚の皮が新く用
ひられるのが多い愛人が死んで蓄その情を抜く
ずその皮で表紙の図書の標紙を作り、姫終庭園と
笠きギスールと云ふ話は日本の庶屋淫売が愛人を
死んだ後其の遺骨を粉末にして茶に和して喫したと
云ふ話は一脈相通ずる所がある。世界の表ふのビヒヨー
ブツクと云ふても皮を剥がれたのである、本は大形の本は千
ヤーンス二世が初めから終んれば地図で幅四尺の八ツ切
るのが、高さ七尺重量いろ封と云ふことである。ある
を産する大きな本が欧洲大戦中の出来ぬ、元は外国
陀のキツタ口市の廃墟を買ひ戦争公使蒐集名

深で長さ十五吋、幅八吋、厚さ三吋で、尾の方の厚さ
ありさらさらとして、喜ぶ様に、この作りてあるとの
事。

偶と庶司淺みずから自から絵筆に、其雅話
を授け、深く其次上を紹ぎ、若名ならず実の
名を、紹ぎ、つ、つ必要もあるが、閑を得ず
初めすることなれ　　三月十五日記

○安田義次郎も金陽家が因果も此義合の布施を
出から逃避の命を受けて若松の子息の家に移り、
そこが安らぎとなんと云へども牛込の集所を見て居る、今の
若松の家を去ることあるが本宅の其後事守番の為雇ん

榛原製

出さらぬかうのきとなりて、人名本買屋、戻ることも出来
ぬとこうが主持も無んとなりて、安田家に逃人を預り
家で安田氏人へ大槻の別荘に殺さん、今の義次郎の子の
表へ大久保利武の娘と云へども、大久保利武の娘は
暗殺され、利武の妻は高橋前荘おの娘なれば、高橋の人々
が此命を聞き、大久保利武の子である牧野前内府を
紹介に成り、それが牧野と逃んで一命を助け得れ、明治
初年の四月会で誠に嘉の事である
○良寛様のがらく揮毫した「焚くほどは風がもて
来る落葉かな」の句は、今の人々いと良寛自筆と信ず
るとあれが、こんな一茶の句は、良寛は此句を喜んでよく
書いたことがなつて来れば、吟ずるに句であるこんと発

日巧奥ゆきとゝ高へき句が仏咲の千代の什のあり。えゝ
義弟とて風のまとや持歩く流石の女性の心地けれ
優し味があつて一家のうちと切つて巧みを笑くさ。
○大隈言道の和歌は真率の気の味あり手取早く変す
はきだめの塵の下なる芽すまも子の親のこゝつき
てあらけれ
山松のもとさくゆるうらやすばるかげの
冬菊
前者は格言なるかのべき便易後者は女心を詠じた
名句と称へ得る
○獨逸の復讐熱は燃へて著々顕を挙げ敗戦
の日揚句法人は絶叫七時々絶叫つくる、聯合国

あつて仏の保障まんとするも仏は英に頼らんとするも仏
猫の喧嘩を捲きこまるゝことは不利として英国の輿
論仏を援ける時期の色濃く前は伊太利のエチラピヤ
遠征の事あり、今は獨逸というイシを犯さんとす、伊のムソ
リーニ獨のヒットラー、皆〳〵一人の被決、四方の背景なり
と雖も一人の力の恐るべきを人々更感せざるを得ず
○此の狗賊五人殺害事件は嘉儀あり。うじ
オ人せるを陳るを少く、警官の職を執るは珍らしき
ことなるも、此れ乗寄敵せざる境遇を以つて首相
を拉致し、陸軍大臣と道のし、短銃の丸
を打ち込んだ壮烈の死を遂ぐ、二人事も在雖しとする所
早職の数を変えんを敢てして古武士と康らず。

の共感を得し、○大阪略列（既明）し、金都を以つて（遺族）い弔意を表するの相違（ママ）共数十七萬円と達（財）とうあれば今日人心を鼓動せざるやを見るべし　三月十七日記

○在京都の友人谷村一太郎の訃を聞き、哀傷の情堪へず、未来友人を喪ふことの最も悲しき別れと数味を同じする友人と別ることの肯綮を喪ふと異なるなり、谷村い京山の人なれど早く早大を出でて久しく大阪の薬本じんぷロヤに入つて遂に其の頭脳となり、七八年前中毒に罹つて頭を病み、新しい刺戟の有り、彩美の信ずるあきらん同志を歓味しん所み、来あるを生ずる為れ相伴ひて過ぎもうることを或田舎を知らず、平生の時る京都を離れい北人なるしかも為めにうう、東洛の名所い北人の東前まで探賞しとうい

榛原製

或る時い同志後ろ外出を共にして（を誘ひて）と同行し、或る時い独々の創意に成れる馳走愛るるるど北人を妨げんと○恰快を覚えしことも度々ありつる北人酒を解せず○散乱紀大の巻物を中座を崇しいるか今回い二度目を終る鬼麻を入り、北人の格を実業家中稀有の一鶴なるし六十六翁を以て新く惜しいうる

三月十七日記

○書物の大切な関係のある製本師で書物をうまく装釘すると否とで書物の外観が美とうる醜とうう、書物を手のすることを快感を与へうる悪感を起しうる。日本の洋装本でもうい、装釘に関する口うるかある。雑誌は一度読の（ママ）まいい生命をもつやうな、いい可減の書物の装釘い作り吟味

を要するが、永久性を要する。就中開閉するやうな
図書、家書とか聖書とかなどは、装釘はバインディングが
堅牢でなければならぬ。それが二三度用ひんばかりのうちに
中の二三枚が破れ出すやうでは、受傷が甚きを、日本の装
釘は製本料が安価であるのが真の価値である。職人の
手を入るるまでも、頭を例物なるべく、ひどい安
価で職工が仕事をするから、そんなものも出来を得
るが、日本では製本を飾り重きを持つるのから、どうもい
くら任つても進歩しない。外国の流れは一日の長がある。
猶更ならばから假製の本を元寄せ、それを若干の製
本料を添へて装釘を頼んでやると実に立派なものを
見るやうなる、ベルインデングが堅牢であつて格好の良

つてしまいくらもしないのは、糊の性質もあるでしようが
とじ方の工夫や技術も大変に違ひがあるようだ。実に日本製本を
大変注意が足りない。手を把つてもあるも心地がよくない。
なほし自分が図書係りなる。新しく注意する所である。
日本人の製本のもの支那の及ばない。日本では書物をい
ろいろ一枚つつ裏折をすることが行はれてゐるが、実に
ものいとまで、それが考へる素質を減殺しない。紙質が非
常に強くやうなもの、ウブ原形を傷害することなれば
らしくない。支那の裏折の代りに一枚毎に入紙する。入紙の
紙は薄手の白紙をもて用ひ、頁部も庭部も入紙がいく
らか飾るやうにも断裁するから、四隅原稿紙を少しも断
ち来らず製本が出来閉閉も甚だもろく心特からく

流れと書物を愛ふ。国の美本の美、明治と日見めそみる、高ほ文部
が日本ならしも考へてみるのハ、活帳の仕立や帙を心ことのあ
つて、皆ふ〻ふつくりと出来てゐる、日本のハゴチ〳〵して頑
なこゝはつてゐて、操作の甚だ心持がよくない。支那の製本
ハ第一廉価があるのと、日本から然る支那へ本を送れ
ば、本の修補を托することが頻りに行はれてゐる。廉価は
かるべきも、和本また支那と称ひ、ゐるのである。保し支那と
日本ハ国風が異なるので元会の持室をして製本を頼
まと、往々取り違ひの つゝうゐ出り損じを生ずる。いつぞや
或る人が林道春の落款のある書物の改装を支那
へ托し、比所、日本で一番大切の道春の署名
を抜き去られた舞つたことがある。此の書物の道春の手

澤本と云ふ。忠の値打が良つたのと、文を書つて平凡の
書物と成りくる。澤も、其の持主がひとく弱つたのも無理
ハない。日本ハ是刊行の僧の書入をを重んずるが支那
でハ校を考がる。書き〻、新る書入を繩業と同視
するので、取り去る危険があるから注意せねばならん、
製本の職人ハ書物の内容を無理解のゆゑ、書物
の原形を換ることが大切の問題であることを知らな
いのも無理ハないが、愛書家の持道の大切なることの
云ふまでもない。愛書家と雖も往々書物の原形を換へて
も美麗の装釘を欲することが所在いくらもある。自分
の花しみる注敬淑の錦臺印林無ゐい原形のまゝ
ハ價三百円と云ふまでもあるが、私のハ一々断截して立派な

帙の貼りつけた假の表紙とが附され、二冊の本が四巻となるまでの、紫本は天那の細工で印影の微塵もないが、原形を失つたのは、僕が半分と云つて私の手を帰したんだと思はれる。つまり貴重の書が残らず蔵べらで、蔵書がないと感じ蔵書つけるなんて欲く製本させたんだのが実は此本を對する時漢ひあるる。市宮の間本寨に宋版の陸放翁詩集があるこんも翰廊外の紙白が切り去られて帳面となつてゐる。版式は毫も職いないが、其の原形も失つた所を欠點があるのでいつもや文那の英紀英其の姉方家のを案内して見せた時に一驚を與へたのである。

外国ひも御本屋がちとら貴重書を改装の為めメチヤ

くちゃに例の法しもかくなるべく、愛書家が紫本師のやり扱ひを恭むことが言葉に絶し、或る時代の大詩人が詩を作つた貴重書の断ち屑を集めて、それを火を點して紫本師を焚き殺しも焼燬と醫し得るなら叫人たらのするなる。兎角紫本師の古本の汚穢を廃して美を美化することが其本職であるとへ云く、実に一種の病ひ[illegible]汚れた紙の刀も拭ひとるさえ刀を拭つた結果が古書の面目を全く変じ、紫本師の事ことを美觀ひあるとうが愛書家からそれを、解剖醫ひあるのだ。製本師も断截家ちどのよかるる様相ひあるのだ。

詳名が附されたるもある。古本屋の国書を新たの数巻の数のくかあるが紫本師なるが、紫本屋の主人

もとうれが其の工場に役する職工の数巻のあるべき
所なるべく、貴重の図書を改装のごとき一日にも一夜にも
元の危険の手に委するごとき、貴重家にとりては
まことに戦慄を覚えざるべからず、貴重書の改装いの
成りさるがよし、若し成さ能わざるときは、自から
信ずる装本師に元の監督しやすセ方ハ
ぬ。

日本にも製本に特別の注意を払ひたる例がないひもきへ、
其の大名の行者に属するものゝ、少なくとも
いかに愛書家に第一に範とすべきは、前田侯爵
の家が百年前の大藩にて天下の政務を総集したる其の
経験ひ本や所持本を如何に修繕したかと云ふ歴史の

模原製

表紙の表工を邸内に集めて、先から古書目の模所を綴
ぢと同じ方法にて、蟲喰ひの箇所を一々修繕したと
ハ装本屋などの及ばざる技術にて一冊の表紙を補ふに七全
部の力を用ひるから、一日に一冊の表紙を補ふに七全
やうな細かな骨の折れる仕業にて、其の補綴の痕を見
ると流石にどこに手をかけたかわからぬ程に巧妙な補ひ
とある。先の所の工程を任ずるものゝ中に本日とゝるのにが
前田家に製本の標式が五六種あつて、漢書和者和歌
等、其の体裁や標紙まで模形を仮えてゐて、見も
範として装本することなるべく、如何にも注意の
届いたことゝ思ふ。勿論装本にも頗る名工が多く邸内に集
められまして、の堅牢者も長あつたと相違ない。東寺の花

る所謂る百合文書（弐千通）あるかなどうかが前田家が傍らに謄写し礼状（一通）毎に一巻の装丁をし箱に入れて返した。此時の表装の仕事のあとを考へて見ると到底他人の及び難いものがある。

○私が随筆頼山陽の第一版を出したのは大正十四年の三月であつた。大正十五年夏まで六版を重ね、昭和二年夏第七版を出した。此の七版まで殆ど原稿用紙の儘の出版部から出したのが一版毎に多少の増補の為めに出版部から出したのであつた。

増補版で小冊であるのが増補の為めに出版部から出したのであつた。

増版で小冊であるのが増補の為めに出版部から出したのであつた。

増版で小冊であるのが増補の為めに出版部から出したのであつた。

増

を收めるの機会を得た。此書の巻末に記することがまんである。

私が蘆花一名浅と著した時山陽の書に入れるべくして入れず別に一冊にした譯は山陽の書四時の筆すべきことが割合に多いのと、有體に云へば白分が青年期から山陽を傾倒してゐた其の任俠的の方面の内情もあつた。別巻にしたのであつて、其の任俠的の原序を悪くしてある為に、見苦しい原序は就て見て貰いたいのである。

本書の出版当時私は橋紀を考へるべきやを考へ惑ふたが、折の節任侠的色彩が多分論さんで、命名さんたのが、則ち北橋紀である。尚私の友人で出版匆々通讀さん私らしも敢て需めもしないのに、前に和田萬吉氏があつて、私の敢て當つてゐる澄美の詩を得た。感ずんば遠慮なく他の二先生皆白玉楼中の人となつた。此の改版を示すことが出来ず、誠に自失の感ひとしきを得ない。

即ち和田内田二氏の評論を巻末に收めたのは其の感を謝するの微意に外ならないのである。（三月十八日）

○不祥事件以来免角法師とともに首相官邸の警衛に詰めてゐる。此れは無論の不祥事件に対する所謂警衛の目的である。撞き屋いあそこを忘れかねと角力あるもの、撞き屋の動きも鎮まり、先や剣難の去る人が住むから、無論人々を誘致す

雖い古来稀者きまれなる。

○良寛禅師の辞世の歌

生活れ無風を友とし送る名
言いが、えこ就ても 狂歌に云く

のもしらみ吾を咬く秋のおもうまで わうなとちは
武蔵野の原、

○大根辛子の和歌に

はきはめの塵の下ろる芋さえも 子い親はこそ
つきてありけん

就ての長と呼ぶ和歌として上乗を云ふ。

○去年十二月廿日の微恙に罹つた時の酒と喫烟を禁じたが、
十数の接触に耐う酒を用いることとしたが、喫烟い五七の
前義絶器に禁じ、漸やく慣れて安フトしたことから、英国

主人を代へる六代 五人まで末路薄

光る新官邸

猫騒動で聞こえる

男と生れたからには誰もが一度は主人となつて雄まり涙つて見たい総理大臣官邸……これは麻布永田町の高台に聳立し、脚下に外務、内務、陸、海軍、文部の各省を媚めその他の中央官衙を据ゑて豪荘……を誇つて屋り近くは麻布町、赤坂、芝、市橋、日本橋、神田方面から東京湾の汽船出入も一眸中に収まり、遠くは国鐵から富士を望見することさへ出来る国家の表象たる首相官邸の位置としては至極恰好のところだと云へる

×

この敷地はもと猫騒動で有名なる薩佐藤藩主鍋島侯の邸宅であつたが第一次若槻内閣のとき買上げて着工し竣工して大蔵省から引継いだのは昭和四年三月二十二日だが実際使用したのは同三年十一月二十九日の御大典祝賀からである総坪数は七千二百八十一坪、内建坪一千五百二十七坪、内日本間が百九十四坪を占め庭は五千七百五十四坪、内裏庭が四千四百五十四坪でその他のこまゞしたところを合せて千三百坪この工費は百六

「下ドーキー」

つまづけりゝ……

明治の新聞界、今昔の感つなつの正に隔世の出現感……一一一人の編輯者の出世の日の出（付）と言はれて嘗つた神田の新聞界の出世の日の出（付）と言はれて嘗つた神田の新聞界、今昔の感つなつの正に隔世の出現感……一一一人の編輯者

主人を代へる六代
五人まで末路蕭條

光る新官邸

猫騒動で聞えた鍋島邸趾

男と生れたからには誰もが一度は主人となつて納まり返つて見たい總理大臣官邸……これは麹町永田町の高台に聳立し、脚下に外務、陸、海軍、文部の各省を始め内務の中央官衙を据ゑてめその他の中央官衙を據つて居り近くは麹町、赤坂、芝、市橋、日本橋、神田方面から東京灣の汽船出入も一望中に收まり、遠くは筑波から富士を望見することさへ出來る國家の表玄關たる首相官邸の位置としては全極恰好のところだと云へる

×

この敷地はもと猫騒動で有名なる鍋島侯の邸宅であつたが第一次若槻内閣のとき買上げて着工し竣工して大藏省から引繼いだのは昭和四年三月二十二日だが實際使用したのは同三年十一月二十九日の御大典祝賀からである總坪數は七千二百八十一坪、内建坪一千五百二十七坪、内日本間が百九十四坪を占め庭は五千七百五十四坪、内護庭が四千四百五十四坪でその他のこまぐしたところを合せて千三百坪この工費は百六十萬圓也だ

×

官邸と云へば總理大臣の住ひだけのやうに受取れるが實際は内閣官邸で總理の住ひに充てられてゐるのは日本間の百九十四坪だけだ

洋間……の殆ど全部は閣議室、總理大臣室、同客室、書記官長室、法制局長官室、書記官室、秘書官室、大廣間、大食堂、事務室、料理場等に區別されてゐる、舞踏室は外國公賓招待の場合などに用意されてゐるやうだが普通は地方長官や司法官會議、各委員會を始めその他多數會合の席に用ひられ、ジャスとは凡そ縁の遠い役目を仰せ付かつてゐる、國賓の大祝宴所閣議室は玄關正面に在り大廣間を通り二段になつた

階段……を昇つて行く、この階段は大臣以外の昇降罷成らぬものだから大臣階段と呼ばれてゐる、尤も襲爵閣議のやうな場合説明役として各省の上役が通るやうなことはあるが……

×

守衛や小使の經驗に依ると始めて大臣になつた人は如何に悠然と構へてもこの階段を昇る足並がどうもそは〳〵して落着きがないと云ふ、だから昇降足並の落着き加減でこの人は始めてから、二回目か三回目から大概見當がつきさうだ、天下國家を睥睨する國務大臣も足並加減で守衛や小使に舐められてゐたとは今が今まで氣がつくまい

×

日本間は純然たる總理の住まひだが、陰氣臭くてよくないさうだ、今まで田中、濱口、若槻、犬養、齋藤、岡田の六首相が住んだが、家族を引連れて來たものは一人もない、故齋藤子は自宅から通つてゐた

官邸……の誇りは庭である、若槻男は世界に冠たる庭園だとの折紙をつけてこよなく親しみ殊に緑の芝生を愛し、濱口は芝生から天を擬すやうに伸びてゐる雄の巨木を愛した岡田は避暑や避寒をしてもこんな〳〵眺めはないといつて在任中一度も動かなかつた

×

總理大臣の健康を承る料理番は政友會内閣のときは三緑亭、民政黨の場合は中央亭と東洋軒だ、政黨革かなりし頃は政權の授受から料理番の授受までいとも活潑に行はれてゐたが齋藤内閣は擧國一致の實を示して、自分の取付である三緑亭を主としては居たが、三緑亭からも中央亭からも東洋軒からも時時取つてゐた、岡田は齋藤子の

衣鉢……をそのままつぎ今度の岡田もそのまゝ襲するらしい、濱口内閣の時は閣議の晝食などは倹約して四十錢程度のものにしたこともあつたが、永續きしなかつた、今では日本料理と西洋、支那料理で多少の差はあるが、大臣一人晝食は大抵一圓四、五十錢平均である

×

新官邸は岡田まで六人の主を送迎してゐるが、どういふものか主人運が惡く、僅に若槻男だけが尋常な生存を見てゐるだけだ、田中男の終りも芳しくはなく、濱口氏は東京駅で狙撃され犬養氏は五、一五事件に斃れ、齋藤子は今回の事件で無惨な死を遂げ、岡田は辛うじて命を拾ひ、現岡田氏はまだ入らないでゐる濱口氏の時官邸を繞らす煉瓦塀の上に鐵條網を張つて

警戒……を嚴重にしたが銃劍や機關銃にかゝつては何の用もなさなかつた、官邸に兇變があるのは鍋島の猫の祟りだとか屋根の裝飾になつてゐる怪奇的な梟の故だとか、何だ彼だと擔ぐものもあるがまゝか猫や梟が官邸の屋根に乘つかつて陰惨なる世相を叫ぶわけでもあるまい

これは刚たりの話しだが、今度の叛軍が占領した時、酒を出せ魚は何處に在るかと銃劍を突きつけて脅した兵士が居た女中がよく見るとそれは二三ヶ月前までこゝに毎日出入してゐた近所の濱屋の小僧だつたので何を云ふかと怒鳴り返したと云ふ挿話がある、一体に叛軍の兵士中には麹町や赤坂邊の出身が相當に居たと云はれてゐる

朱むのしがいウトを喫したのだ、エリがもどり、吹今は殺人と夢は正者
二日後しとみのかから蒼老弱りを嘲つてゐる、酒は兎角に無
んば飲めもしらへ知り喫煙い時百姓いずで、殊さ自分の熱業
の際喫まる傾習があるとい兎角過こす傾きがある。朝昭の
覚めた時喫後の後ちと色制し難いれが動く、花もぐる
やす肉巻ひ小今の京幸抱が出来るのでバットちとを喫ん
みる、丁度煙喫肉を習ふ初めた時の心地がする、おが
喫煙の味は昂上まるのあるから、遠かるず正等のまを
欲まるひあらうと恐れを抱いてゐる、　三月十九日
○夕宿まる○白集と後々あ夢山子（外長子）の句を抱いた
す

榛原製

盗んだる夢山子の竹笠に雨ふるなり
夢山子八月九日あるもあるかな
夢山子さく春山しくの姿うる
豊年の田の雨の夢山子沈みたり
仰向けに倒れし顔の夢山子かな
人間ふるるおぼたる夢山子
山田守る夢山子も兵兒の集人かな
御茶田に法師次のかしーかな

古徐馬る仏法ひつけ　雪ふる
吟子ひいて尚ほくと進む　鶏うる

柴の戸を八重の白雪うづもれ

、殿作りまるや紅葉の山屏風

、黄菊や紅葉や村雨過ぎゆけり

、栗を拾ひし行く庭とつるが山路かな

何の木のもとにもなくて栗拾ふ

栗落つる深き夜の響きかな

うつむきて拾ふ木の實の長をかな

霧の比えん杉つる巷宇や杉の中

山河の霧の底なる湖かな

ふるひも彩かなるかきつばた

、朝くとき蓮の沈しき月の巷

無用の書紙魚ばかりあきて死ぬるもの

、石冷えて蟬の音の寺

のもとに大行く門や蟬とぶ

、古家の菊を家の菊と相似たり

巷の花や黄壁の傍今の世

巷の花は日ぬれば蛇の動とぞ

石ぐらに古りし巷の木と咲きたけり

、毎住寺も人日住む寺も冬木中

後葉蛇ひまし丈れば鳴きよりも

、雪寺の後も巷ぬるめ後葉かな

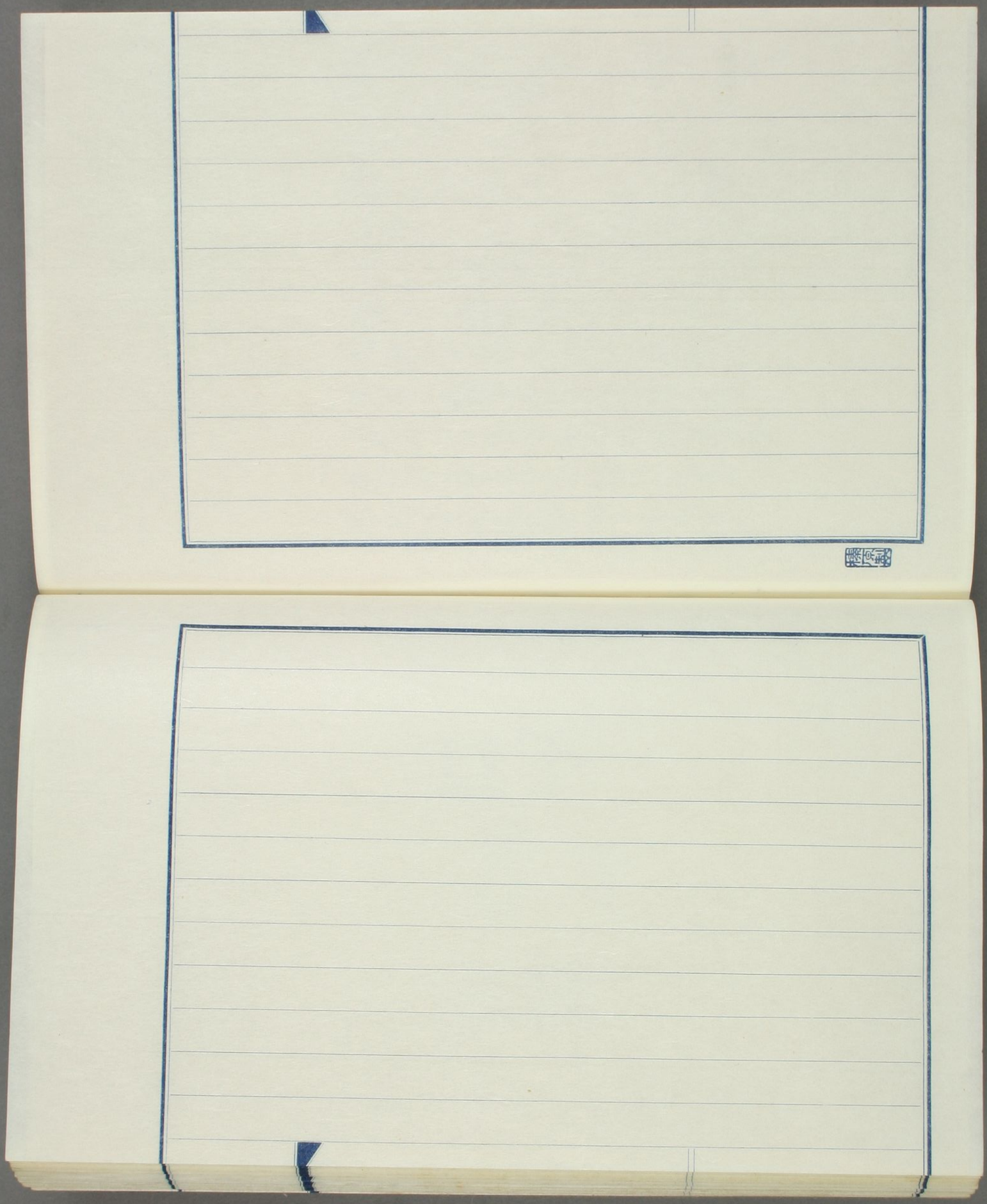
萩桜の山つ立し南禅寺

酒旅亭一亭の巷軒の雪

清水茅屋 馬も岳嶺の木蔭うる
蟬かくれ鼎玉敲めし清水かな
高山の裏き蔭しかくうる 元竹家を吊ふ
彷彿きて瓜鈴吟や僧の長閑
一畳麻さめて夕涼を見る長うる
白鳥の姿なる船傾うんど
虹すがく今ハ野菊の霜れのる
除清えて流れ白き空見ふる
道芝の光んで蟬まるる蝗こうる
道傍の赤のまんまん蝗こうる
一荒海や島々えぞの厂立し
一田のあの蔭つる仰きうきの和

標原製

削るかぬき山蟬のかぬき雲の秋
高き宮ん苔も蒸溽溽月夜
聖書見えて五つる庫山の苔蒸こる
詩歌の雨蕃ん蔭の苔蒸こる
厂渡るはいくはくぞ尾の声
郭かこう沈や時打つ音遠
放屁爺終冷堂をしくみけり
山寺やつくつく法の ゆるやかん
徳の苔ん正午こうる裸こる
汗をぬ、ぬ額の敵の深きこる
くろかぬの虜の汗の光こうる
門松を立ちい 賓五の威儀をこす



以下
8丁
白紙

の御風の随筆を後に良寛の一遍を得れ、ある時良寛、路傍に居んでみるのび面のもくりの村人が是迄まで何をして居るかと見ると、良寛は鉄鉢の中から一銭を地上に投じたのを見て、彼の乞食は其銭を拾ひ取るのを見て、人は銭を得ることを喜ぶが、果て嬉しいものかと、乞食は其れから、今試みる所が此鉢を持ちて一向の嬉しくもないと云ふて捨てゝ去る、えてして世間実かどうか疑はしくもあるが、良寛は其銭を得て嬉しく感じたる所を良寛の面目かなる

良寛が雪舟と仰倒したおもむきがあり、雪舟の傑作こゝに

是迄の外無他なり、是迄の外無他なり、芭蕉翁こゝ

使人千古仰目処なり、

良寛は西行の左の和歌を

の也上せり

わびぬれば

ひぬ出るも

良寛と同じ心なり、良寛が西行の墓を詣ひる歌と

手折こゝの

ばからは

良寛の辞世

かれぬれば

みなる

ぬれぬれども尾ゝ帰る心やすきを思

時は

良寛が西行の墓を詣ひる歌と

手折こゝの香いうすくもあるべし心

良寛の辞世

のこさむ

夏ほとゝぎす秋ハも

○支那の翻譯事業は既に最近刊の新民叢報「譯書」之支那人の思いに一つの命が收めもあり、美文を擬さず、彼土の翻譯事業は我邦の明治初年の如く、やはり人の林琴南が翻譯の特に百五十餘、多くは翻譯の王の名を博したのみならず、我國の人が知るを待たず

中國に於ける翻譯文學を云々する者にとつて忘れることの出來ぬことは、夫の「翻譯之王」と稱せられた林琴南(名紓)であらう。林琴南はその稱號に恥ぢず翻譯せしもの百五十六種の多きを數へ、この內譯を今見してみるに英國の九十四種、法國(フランス)の二十六種、美國(アメリカ)の十九種、俄國(ロシア)の六種、その他日本・希臘・那威・比利士・瑞士・西班牙等の各々一二種づつがある。併も林琴南の扱ひし作家・作品も——莎士比亞(シェクスピア)；凱撒遺事・雷差得紀・亨利第四紀・亨利第六遺事等；托爾斯泰(トルストイ)；現身說法・恨縷情絲・人鬼關頭・社會聲影錄等；その他狄更司(ディケンズ)・科南道爾(コナンドイル)・大仲馬(デュマ)・小仲馬(デュマ)・預勾(ユーゴー)・巴爾薩(バルザック)・伊索(イソップ)・德富健次郎的不如歸——の如く、その國々の文學界に定評あるものを攝り、この新文學草創時代にあつて克く中國翻譯文學界の嚮導ともなりし彼の文學眼は、例ひその拙譯、直譯體の誹りはあるにしても、以て偉と爲すに足るであらう。彼の一生涯を通じて絕えず撓ゆまず爲された翻譯の勞力が中國に於ける翻譯文學を力あるものにし文學的地位の高上に資して餘りある人の用ひた直譯體の非を悟り、中國にあつて最初の歐化語體を以て譯出し始めたのであるが、これが劃期的成功を收めて より續々として域外文學の翻譯が流布されるに至つたのである。

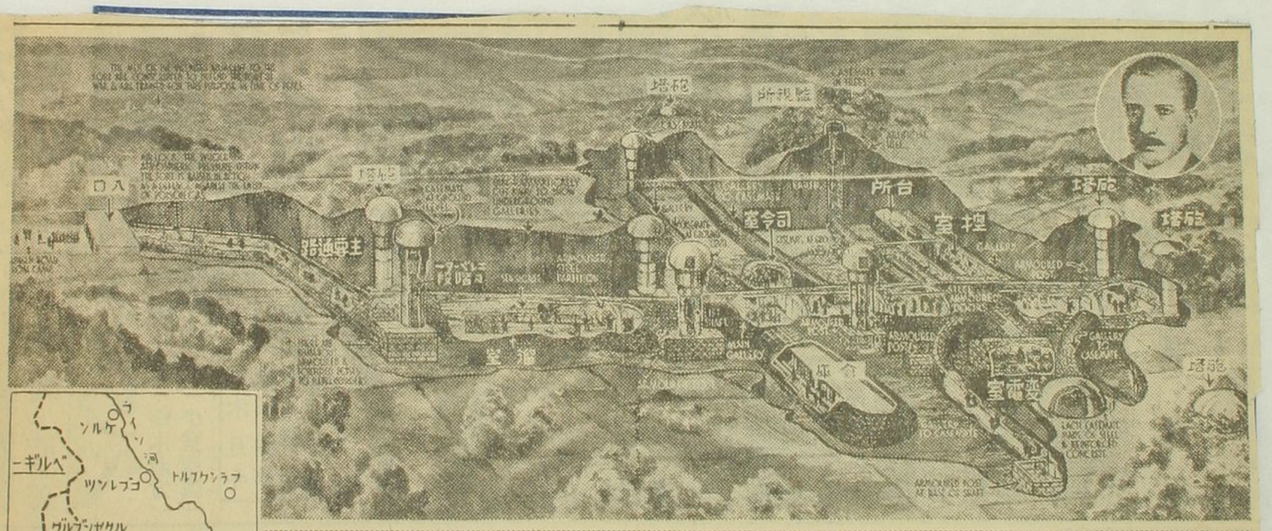
中國に於ける翻譯文學の中何れの國が最も多く譯されたかと言ふに、中國國民と最も共鳴し易き俄國の文學が多大にして、その作家の個々に就ても屠格涅夫(ツルゲーネフ)の作品が多く、不醒的中國國民をして夫の國民革命の成功を促したのも實に彼の作品によるとまで言はれてゐるのである。

ぬ、此人を法さ化つたりへ
用人と云人が、直譯体を
改めて漸やく歐化語体の
譯と進んだと云、文學の
明にもこれや文学が長ん
と、文譯さんたこともあり
ます、日本の譯本ハたりの如
くであること、

(5) 日本文學

日本文學は地理的關係より早くから中國に翻譯せられ、前述せる如く林琴南の不如歸などその當初に現はれてゐる。今その他の諸作品に就て書いて見よう。

井原西鶴；好色一代。女尾崎紅葉；多情多恨。幸田露伴；風流佛。國木田獨步；戀愛日記・國木田獨步集。高山樗牛；日夜底美觀。石川啄木；俄們的一團與他。夏目漱石；草枕。倉田百三；出家及其弟子。田山花袋；棉被。步者小路實篤；一個青年的夢・妹妹・人的生活・愛慾・母與子・武者小路實篤・新村・他底結婚及其後・戀愛結婚貞操・文藝雜感等。島崎藤村；新生。芥川龍之介；芥川龍之介集・芥川龍之介小說集。菊地寬；第二底接吻(再和我接個吻罷)・戀愛病患者・眞珠夫人・菊地寬集・金子洋文・地獄。谷崎潤一郎；癡人之愛。前田河廣一郎；新的歷史戲曲集。林房雄；一束古典的情書。橫光利一；新郎的感想等あり。なほその他に現代日本小說集・近代日本小說集・日本小說集・日本的詩歌・日本近代小品文選がある。又文學論及び散文の中にも多く翻譯されてゐる。即ち、鹽谷溫；中國文學概論講話。厨川白村；苦悶的象徵・出了象牙之塔・走向十字街頭・北美印象記・近代文學十講・文藝思潮論。有島武郎；生活與文學。本間久雄；歐洲近代文藝思潮論・文藝概論等である。



佛國境の鐵壁陣

獨逸軍に備ふ地下砲台ノジマ要塞線

英國が提案した獨佛、獨白兩國境非武裝地帶案中に指摘されてゐるフランスの東部國境要塞線は一九二五年來故マジノ陸相時代に立案着工せられ、ルクサンブールからヴォージュに至る延長三百キロ、工費三億圓(平價換算)をかけて築造されたもので、大戰の經驗に基づき空中地上の砲撃毒ガス等に對する萬全の防禦力を備へ特別の動員組織と相俟つて極めて短時間内に國境を密封して如何なる侵攻にも對抗し得る、この要塞は一九三三年に完成し翌年更に補強作業を行つた、これは故マジノ陸相の名にちなんでマジノ要塞線と呼ばれてゐる、こゝに掲げる見取圖のやうにその要部は地下深く埋没し大部隊の兵員を容れる集合場や彈藥庫、炊事場その他完備した施設に近代科學の粋をつくしてゐる、地上に頭を出してゐる諸所の砲塔は密林の間などに巧にかくされてゐる(上寫眞は故マジノ陸相、地圖はマジノ要塞線)

○賀川豐彦が去年一年中に數度び日本の特殊的危機克服の道と題したパンフレット「講演」に載せるが、去年は十字架贖罪愛を捨て、それを度用して、キリスト教の有難味を叫んでゐるが、家の身を苦めの所業、自分のやる事、うゝ自分命を救ふのは十字架の子供、自分のやる事、うゝ自分命を救ふのは十字架と共にしてゐる、家族家の偽らざる和ゝこゝらの教りとでもいふべき、獄、自懺悔を贖罪の一法とするから、それはコンナ露骨、そこいふ市民とでもいふべき、実は斯る懺悔を為すうゝ多くの意氣を要する

活を發見する、さうして、この十字架を吾々は肺病院に運び、癩病院に運び、これを日本の無產階級の運動に、これを日本の經濟生活に、これを政治生活に運び得るなれば、神の國が自然と日本に實現することを信じて居るのです。

贖罪愛の自覺に依つて救はれた私の體驗 ですから、私はこの十字架を證すことを恥しいと思はないんです。人が恥じた場合でも、私は喜んで十字架と言ふんです。私自身が考へるのです。私が今宵かういふ處で諸君に證し得るのも私は十字架が入つたからです。私は人前に立ち得ない家庭の暗い惱みを經て來たんです。告白します、私の父は政治家でした、殺された犬養先生と一緒に憲政に精進して居つたんです。けれども、私は父の本妻の子ではない、妾の子です。今頃當然これは若しもその生活を續けて居つたならば、私も不良少年に終つて居つたでせう。十五の春、私は聖書を知つたんです。さうしてこの十字架の教へと、贖罪愛に目覺めて、私は私のやうな藝妓の子が救はれ得る道があるといふことを發見したんです。私の母は藝妓です、嚴肅な聲、神の御聲を聞いて「悲觀すな豐彦、お前にも救ひの道がある、お前は不良な道に行かなくても、救はれる道がある」といふことを、私は神から聞いたんです。

絶望するな十字架愛に生きよ 諸君のうちにも私と同じ境遇に居る者が、十人か二十人は居るでせう。諸君のうちにも十人か二十人、私と同じやうに妾の子も居るでせう。或は諸君のうちに脫線した人も居るでせう、しかし悲觀せんでもいゝんです。あなた方のうちに悲觀して「俺は駄目だ俺は失敗してしまつたから、序でにやけくそやつたれ。」悲觀せんでも宜い、私を見なさい、今頃當然私は不良の仲間に入つて居るか、脫線に脫線を重ねた脫線者であつたでせう。しかも、健康を言ふならば、小さい時に赤痢病をずつと續けてやつた。十二の時、醫者は「お前肺病だから學校に行くな」、中學二年生、十六から血を咯き出して、十九になつたら立てなくなつて、私は肺病院に四箇月居つたが、金がないから出て來て、一年間蒲郡といふ三河の海岸でもつて保養して、もう死ぬと思つたものだから、どうせ死ぬならば天の神に會ふ時に、「お前惡い奴だ」と思はれては困るからと思つて、貧民窟に入つて死ぬ前に總決算をして置かうと思つた。さうして貧民窟に入つたんです。諸君も失望し給ふな、少し悲觀して居る人があるならば、本地宇宙

衆議院議員當選校友一覽

二月二十日施行の衆議院議員總選擧に於て左記七十名の校友諸君が當選の榮冠を得られた。內新たに議員の席を獲た諸君は十三名である。

東京府
第三區
安藤　正純君（4推薦）前
田川大吉郎君（二三邦政）元
第四區
淺沼稻次郎君（12經濟）新
第六區
佐藤　正君（四二哲學）前

神奈川縣
第二區
野田　武夫君（12獨法）新
第三區
河野　一郎君（12經濟）前

埼玉縣
第一區
松永　東君（昭9推薦）前
第二區
横川　重次君（6哲學）前
第三區
山森　利一君（四四大商）新

千葉縣
第一區
多田　滿長君（四四大政）前
第二區
鵜澤　宇八君（四〇推薦）前

茨城縣
第一區
豐田　豐吉君（6大商）前
第三區
風見　章君（四二大政）前

山梨縣
第一區
平野　力三君（11專政）新

群馬縣
第一區
清水留三郎君（三五邦法）前
第二區
木檜三四郎君（二六邦政）前

栃木縣
第二區
森下　國雄君（6專政）新

北海道
第二區
坂東幸太郎君（四四大政）前

青森縣
第二區
兼田　秀雄君（四〇專政）前

秋田縣
第一區
信太儀右衞門君（4推薦）元
第二區
小山田義孝君（8專政）前
川俣　清音君（12專法）新

山形縣
第一區
佐藤　啓君（二三邦行）前
第二區
清水德太郎君（5推薦）前

福島縣
第一區
粟山　博君（四五大政）元
第二區
助川啓四郎君（三九專政）前
第三區
比佐　昌平君（四一大政）前

長野縣
第三區
宮澤　胤勇君（四四大政）元
中原　謹司君（昭8推薦）新

新潟縣
第一區
松井　郡次君（二七邦法）元
北　昤吉君（四一哲學）新
第二區
松木　弘君（三四推薦）前
佐藤　與一君（四二推薦）前
第三區
內藤久一郎君（昭5經濟）新
三宅　正一君（12政治）新
第四區
增田　義一君（二六邦政）前

富山縣
第一區
寺島　權藏君（2大政）元
第二區
松村　謙三君（三九大政）前

石川縣
第一區
永井柳太郎君（三八大政）前
第二區
櫻井兵五郎君（四四專政）前
喜多壯一郎君（6英法）新

靜岡縣

早稻田學報　三月

愛知縣
第二區
勝又　春一君（13推薦）前
春名　成章君（三九大政）前
第三區
永田善三郎君（四一專政）前

岡山縣
第一區
小山　松壽君（二八邦法）前
第二區
西村丹治郎君（二三邦政）前

三重縣
第一區
片岡　恒一君（9大政）新

廣島縣
第二區
山道　襄一君（三九大政）前

岐阜縣
第一區
山田　道兄君（四〇大政）元

鳥取縣
第一區
田中　武雄君（10推薦）前
第五區
齋藤　隆夫君（二七邦行）前

大阪府
第二區
紫安新九郎君（三三邦政）元
第五區
田中　萬逸君（6推薦）元

京都府
第一區
川橋豐治郎君（三七邦法）前
中村三之丞君（7大政）前

滋賀縣
堤　康次郎君（2大政）前

和歌山縣
第二區
小山　谷藏君（三一英政）前
田淵　豐吉君（四一大政）元

兵庫縣
第三區
三好榮次郎君（三九專政）元
由谷　義治君（四五推薦）前

島根縣
第一區
木村小左衞門君（13推薦）前

福岡縣
第一區
中野　正剛君（四二大政）前

熊本縣
第二區
中野　猛雄君（四〇大政）前
伊豆　富人君（4專政）前

佐賀縣
第一區
田中　亮一君（4大政）前

長崎縣
第一區
西岡竹次郎君（6專法）前
第二區
佐保　畢雄君（三九專政）前
牧山　耕藏君（三九大政）前
森　肇君（三四邦政）前

鹿兒島縣
第二區
岩元榮次郎君（四一專政）新

立候補者並當選者學科別一覽

學科	立候補者	當選者
邦政	一〇名	六名
專政	二五	一一
英政	二	一
大政	二八	二〇
政經	五	四
(70)		
邦行	四	二
邦法	五	四
專法	五	二
大法	二	一
法學	二	一
(18)		
大文	四	三
大商	八	二
商學	一	〇
(9)		
推薦	一五	一三
(15)		
計	(一一六)	(七〇)

○図書の敵い敵火であると雨漏りであると汚
損であるとかり板であると或い金銭を減ぜられ或い其の雨
用を酷くし、あるいは黄金のものをメテヤ
ゝすることい金子図書に対する罪過である。其の
罪過の最も重きい教唆や革命或い忠義を
偽ることと或者の図書を束縛し切火と附すること
であるが、実い図書と雖しても無理の取扱を
粗略するし、虫蝕の餌とすることを厳戒す、或ら
雨露の害を受くるも保護せず、動もすれば図書
を崩し厠紙とし或い竈の焚料に供するなど
図書の程度ごとに小なれども其の罪過なるや一切あるべ
き図書を粗略する無理解なる恐るべきものへ、

榛原蔵

彼等この眼目の書いれこまれる何人でも反故と見へ無用の長物
と見くし父祖の書いれこまれる父祖の大切な貯くれこまれる其が
粗略つれ書冊の体をなしてあるもの或い屏風や襖の下張
りとなりすることが甚しかく方々に行われもあるが其の寄附
くしいまゝ中のドンナ要件のものがあるか知れまへのものある、
小型の巻物の方が反故中から出る巻紙さえ清書や立盛
の手紙が反故中から出て来て使用する人もあるが図書と為して
ある、古い屏風と襖張すると先祖の絵のものなりかも其も
昔の古文書が盛んに出てあるが一寸見ても
此例もあり、書物の表紙裏から貴重な文書が出て来
が寄とあるある例もあるが、田中勘兵衛が京都の商
家が反故ひ会利と称してあるのを見ると其反故が文

物を求めて戦国であつたのに驚いて美を助けれ例もある。
古い寺や旧家などをたづねて一片でも発見したらば稀覯貴
重のものを二エスクリプトがあるから実に油断がならぬ。こん
な無智の人のどんな多くの貴重のものが失いんれかも
知れないのだ、無意識といえば実に恐ろしき残虐行
為をなしたりあるを得ない。全く同方は無理解の
為に行為は是非もなしとして、自己同方の愛蔵を以
て信じ同方と称し相南の御縁を有しながら、思慮の
足らざるに為め、鄭重なる書行を為すこと能はず
ならざるべし、第一貴重の宝物、美の名家の自業である
故に稀覯北上ならんとすると寸断して手鑑などを心り、
折角一部僅つてあるものをサンザンにとるに、一部

横原製

として完全なる書物を多くの断片を集る方が価
値あることは悲しと支配さんれる過ぎがあるが実に惜しいことも
しばしばである。同一罪悪を犯したるを挙げんば或る人の
家自業の文を蒐めんとして書物の序跋を切り離す人
があり、絵のみ切り取る人があり、大宮本古版本の標本集
を心ゆくまで一部をうしなうものを解き放つ人もある。或へ
種々の標紙を切り放つ人があり、答題をはかりしてそれを
集める人もある、これ等は同方と趣味があつての業であるが
断片零紙の痕跡を助けて拾い集めること甚だ
もろいことなれば僅つてあるを解き放つなら裁断しなり
して書物を毀損することの甚だ深いと云い物心な
ども、或る者は性癖から矢鱈に花書印をべりべり剥捨し

なく無論に拙悪の言ひ書き入れたり、或いは古代比書冊を改装したりするものもあるが、此等は必ずしも悪意の為に濫用したのではなく書物の面目を失ふ虞ある點に於ては確かに冒瀆である。書物の面目とは内容の刻今古物語る)にあるのであり、美術的の考慮は書物を冒瀆する(罪)がいろいろある。二種若くは三種の本を合巻して一部をなすものを離れ放つて二冊三冊とするは、巻尾の刊年を切り去つて奥附を除却したり、心術を偽造して人を欺くものあり、巧みに刊年出版所などを偽造して人を欺くものあり、共に同書の冒瀆を免れぬ。此から同書の相違解するものとも罪(罪)とはしるべし。書估が売る方便として或は書物の趣味を帯びたる仮の入紙をする仮の

橋原製

然しもよいが、一枚くらの人細工で裏面打をした紙の袋をそのままにすることなどは、計なことである。殊に書庫で筆墨を書くなどの人をして呟咤を催さしめる。巻本屋とまれば同書に附属し無くてならぬ商売であるが、えんの書物の内容と異つた書物の内容をまぜ合ぜ無理解のまぜ、よいこともあるが、赤面ものの、あの罪悪の時代犯すものである。岩崎本や雲泥本や温本や亂れ比本などを一々新安すれば補ひ、ふメリを乾かすなどは制本屋の手を待つて修繕が出来るものである。制本屋の方も陶りやすい契の割断を過つなどもあるが、或いは悪意の書入を断ち切

昭和十年三月十五日の東京朝日新聞

▽…△常陸風土記の鹿島の條に沼尾池の記事がある。其大意は「この池に生ずる蓮根は非常に美味で、他の所に生ずるものよりも大いに勝れ、病人が此の蓮根を食すれば靈驗があらたかである」といふのである。之は今より一千二百余年前の話であるが、此時より五百五十年後、そして今より六百八十年前の康元元年十一月五日に藤原光俊朝臣が鹿島詣の序に、この沼尾社に參詣した時には最早蓮が存在しなかつたと夫木和歌集に記されてゐる。

▽…△南蠻渡來の普陳店在の高粱畑から發芽され、今尚發芽能力を保有する蓮の果實について私は、其壽命を四、五百年以上と推定したのであるが、現在では之が世界最長壽の果實といふ事になつてゐる。然るに沼尾池の蓮は我が國の最初の地理書に記されたものであり、そして後の夫木和歌集の記事は、この地の訪問記ともいふべきもので、共に年代がハツキリわかつてゐる。

一の發見 世界 沼尾池の古蓮いづこ

理博 大賀一郎 夢 私の

▽…△私は一昨年の秋、鹿島神社に詣でて後、其北方一里許りの所に古風な神代造りの沼尾社をたづね、この沼尾池の舊蹟を探つたのであるが、今は水田が連なつてゐて、果して何所が古の沼尾池であつたかつきとめ得なかつたのである。

▽…△そこで、沼尾池の舊蹟がハツキリわかつてそこから六、七百年以上の年代を明かに推定し得る蓮の果實が出て來て、それがもしも發芽するやうな事でもあつたならば蘭洲の古蓮以上に世界學界の驚異となる事であらう。私はこの數年來、沼尾池の事がいつも心に往來してゐるのであるが、何かの機會にこの土地からも亦古蓮の果實が發掘されるやうな事は無いものかと、世界一の發見をこの沼尾池に夢見てゐるのである。(筆者は東大農學部教授、專門は植物)

神保町は世界一

屈伸樓

神田の神保町は何んと云つても世界に冠たる古本屋町だ。昭和十年の『東京古書籍商組合員名簿』で調べて見ると同組合に這入つてゐる古本屋が神保町だけで百七軒ある。これに組合に這入つてゐない古本屋と新本屋と出版書肆とを加へたら神保町の本屋の數は古書籍商組合員の倍數位にもなるだらうか。盛なりと云ふべしだ。

全世界のどの國のどの町を搜してもこれ程多くの古本屋が一町内に軒をならべてゐる處は見當らぬ。古本屋町として有名なロンドンのチエアーリンク・クロツス街ですら孰れも構へは大きいが三十軒そこそこしかない。而もこれ等ロンドンの古本屋の多くは新本屋を兼ねて居るから純粹の古書肆だけだとその半分か三分の一位になるだらう。

東雨れつく

つゝ、紙白の表の書物の一巻弼ひあるのと解せずそれを
陰のようにして表形を換えることい一巻の買漁び蒐書家の
秘探する所ひとるが、蒐本屋い体裁の美と欲するとい、
往々やり損ひて蒐書家を困らせる。書冊の美觀を
なすことが出來ぬ場合もあるとそれ彼等い行きて
み、いくら美麗なるものが出來ても實い少ないである。
出來本屋ハどうしても書物の内容味の修業をとう
しても出ないるもの。北項前の製本の項と參照

東京の出版者

東京製

昭和十二年三月十五日の東京朝日所載

一の發見……沼尾池の古蓮いづこ

理博 大賀一郎

私の夢……○

▽…△常陸風土記の鹿島の條に沼尾池の記事がある。其大意は「この池に生ずる蓮根は非常に美味で、他の所に生ずるものよりも大いに勝れ、病人が此の蓮根を食すれば靈驗があらたかである」といふのである。之は今より一千二百余年前の話であるが、此時より五百五十年後、そして今より六百八十年前の康元元年十一月五日に藤原光俊朝臣が鹿島詣の序に、この沼尾社に參詣した時には最早蓮が存在しなかつたと夫木和歌集に記されてゐる

▽…△南滿洲鐵道開店在の高粱畑から發掘され、今尚發芽能力を保有する蓮の果實について私は、其壽命を四、五百年以上と推定したのであるが、現在では之が世界最長壽の果實といふ事になつてゐる。然るに沼尾池の蓮は我が國の最初の地理書に記されたものであり、そして後の夫木和歌集の記事は、この地の訪問記ともいふべきもので、共に年代がハッキリわかつてゐる。

▽…△私は一昨年の秋、鹿島神社に詣でて後、其北方一里許りの所に古風な神代造りの沼尾社をたづね、この沼尾池の舊蹟を探つたのであるが、今は水田が連なつてゐて、果して何所が古の沼尾池であつたかつきとめ得なかつたので

▽…△そこで、沼尾池の舊蹟がハッキリわかつてそこから六、七百年以上の年代を明かに推定し得る蓮の果實が出て來て、それがもしも發芽するやうな事でもあつたならば滿洲の古蓮以上に世界學界の驚異となる事であらう。私はこの數年來、沼尾池の事がいつも心に往來してゐるのであるが、何かの機會にこの土地からも亦古蓮の果實が發掘されるやうな事は無いものかと、世界一の發見をこの沼尾池に夢見てゐるのである。筆者は東大農學部教授、專門は植物)

セーヌ河畔の古本屋も確に巴里名物の一つであり一奇觀たるを失はぬ。それが河岸の堤防の上に二三哩もの距離に亘つて何百軒と續いてゐることは周知の事柄だが、これは雨の降らぬ日の日中に限り持主がやつて來て幅二メートル奥行一メートル位の自分の箱(一人で二つ以上の箱をもつてゐるものもある)の蓋を明けて中に並べてある古本を覗ひ、夕景には蓋を閉ぢ錠をおろして歸つてしまふ一種の露店本屋だから、之を神保町やチエアリング・クロッス街等の本屋と比較することは出來ぬ。

チエアリング・クロッス街の古本屋の數は、前云うた通り、神保町の三分の一にも充たぬが一誠堂や北澤書店や巖松堂などにも優る、世界各國に多數の買客を有する大古書肆がこゝにも相當ある。その中前から日本人に馴染の深いフォイル等はひと頃百五十萬册(ブリテッシュ・ミュジアム以上)の在庫品を誇つてゐた。併し古本屋の數の多い事では神保町は何んと言つても斷然世界一である。

江戸から明治への歡樂境銀座【上】

石角春之助

【一】歡樂境銀座への第一歩（A）

現在の銀座は、完全な歡樂境である。だがしかし、それは大正初期以後のことで、それ以前の銀座は決して完全無缺な歡樂境ではなかつた。少くとも特殊な階級の遊び場所ではあつたが、大衆の遊び場所でなかつたことは、前にもしば〳〵述べた處である。殊に銀座が、明治初期に於て輸入發明品普及宣傳の場所として、華々しくスタートを切つたことは、とりも直さず大商業銀座のデビューでもあつた。だから當時の銀座は、當然商業經濟場所としての存在で、歡樂境建設を目的とするものではなかつた。たゞ商業銀座が殊の外華々しく發展した爲めに、其の發展の餘波として歡樂境銀座が、除々に擡頭し、發展して行つたものである。

しかし、これは一面に於ける觀察で、銀座が歡樂境たらんとしてゐたことは、既に江戸時代に於て其の兆を示しつゝあつた。其の最も顯著なものが、船宿の存在で、銀座界隈に於けるものだけでも江戸時代十四隻に達してゐる。殊に、維新前後には、それが二隻增加し、十六隻を數へられてゐる。

銀座に於ける船宿の由來に付いては、的確な文獻がないので、はつきりした年代は解らないが、少くとも汐留川に高尾丸が存在し、仙臺伊達綱宗侯がこれに乘つて、吉原へ通つた事實が殘つてゐる以上、既に、其の頃から三十間堀乃至汐留川には幾隻かの屋形船があり船宿があつたことは爭はれない。

尤も此の高尾丸は、芝口新町に住む吉兵衞と稱するものが仙臺侯から預つてゐたもので、無論、一般人の遊山に使用したものではなかつた。

つまり高尾丸は、仙臺侯の所有で仙臺侯の獨專する船だつたのだ。だから仙臺侯が使用しない以上、此の船は用をなさないのもであつた。

兎に角、伊達綱宗侯と三浦屋の高尾とは、頗る惡緣つきざる仲で何れにするも二人は決して幸福なるものではなかつた。何故なら、綱宗侯は彼女との惡緣の爲めに、二十歳をちよつと過ぎた許りで隱居を命ぜられ、捨て扶知を貰つてちつきよしてゐなければならなかつたし、又一方高尾にしても金華高樓に住ひ、贅澤三昧に身を送つたとは云へ、意に添はない人と同棲してゐたことは、決して幸福とは云へなかつたであらう。

殊に、雄山候と彼女との合作になる屏風の句を見ても、其の間の消息を雄辯に物語るものがある。

〳〵猪と抱かれて寢たか萩の花

これが彼女の詠んだ句である。全く思ひ切つた捨獨白でもある。しかし、又一面高尾が斯くも有名になつたことは、無論、綱宗侯が彼女に溺愛し、無鐵砲なさま〴〵な行動をしたことにある。だから此の意味に於ては、彼女も亦、綱宗侯に感謝せねばならない。

何れにするも銀座をして歡樂境たらしめんとしたものゝ一つは、遊船宿の發達であり、而かも、それは他の何よりも一番早く、其の魁をしたことは事實として存する處である。

今江戸時代に於ける屋形船と、船宿とを列擧すると、凡そ次の如きものがある。

▽高　尾　丸（汐留川新橋土橋間）新新口町　吉兵衞
▽息　栖　丸（同上）　同町　彌右衞門
▽竹　川　丸（同上）　同町　市左衞門
▽金　山　丸（同上）　同町　七兵衞
▽湊　　丸（同上）　同町　吉右衞門
▽延　喜　丸（三十間堀）　尾張町　甚兵衞
▽林　　丸（三十間堀）　木挽町　源兵衞
▽伽　羅　丸（汐留橋近傍）　木挽町七丁目　佐右衞門
▽吉　川　丸（同上）　同町　六兵衞
▽兵　庫　丸（同上）　同町　長九郎
▽宮　一　丸（同上）　同町　吉左衞門
▽宮　本　丸（同上）　同町　庄左衞門
▽出　世　丸（同上）　同町　仁右衞門
▽本　一　丸（同上）　同町　長兵衞

江戸時代、屋形船は全市に渉り其の數が、特に百隻と限られてゐたし、又一軒一隻と云ふ制度であつたから、容易にこれが增加を許されなかつたものだ。全市に渉り屋形船が一番多かつたのは神田川で、こゝには十五隻からもあつた。

處が世の中がだんだんと、世ち辛くなり、せつかちが多く

江戸から明治への歡樂境銀座【上】

なつて行くと、裝置よりも足の早い猪牙船が讃美されるやうになり、殊に維新近くになると、屋形船よりも猪牙船が、斷然多くなり勢力があつたものだ。

【二】歡樂境銀座への第一歩（B）

遊船宿の發達は歡樂境銀座への第一歩には違いないが、しかし、其の始めは船こそ銀座にあつても、銀座自體が歡樂境としてではなく、寧ろ他に目的があり、其の目的地に遠出すべくたゞ運輸の機關としてのそれであつたのだ。例へば吉原へ遠出すべく又は本所深川の五遊里に遠征すべく、こゝから景氣をつけて乘り出す武器であつたのだ。

だから嚴格な意味に於ては、假令銀座界隈に、船宿が發達しやうと、銀座其のものにとつては、別に直接な影響はなかつた譯けだ。と云ふのは銀座の土地からサービス嬢を連れ出した譯けでもなければ又、船宿の二階でどんちやん騒ぎをやることが目的でなく、他に遠征して目差す場所で散財しやうと云ふのであつたからだ。

つまり早くいへば、今日のガレーヂのやうなもので單に遊船客の需要に應じ、運輸の目的を果すことにあつたのだ。尤も遊山船であるから、船中へ酒肴を運び、こゝでも散財し得られたのは云ふまでもないが、しかし、其のサービスガールは深川邊りへ着けて、新たに藝妓を呼び出し、それから本格的に騒いだものではなからうか。

尤も藝妓が既に存在してゐた場所にあつては、船宿から藝妓も招べたやうであるが、銀座の如く藝妓を持たない處にあつては、以上のやうな方法であつたことは、想像するに難くはない。全く藝妓を持たない船宿の存在は變形的なもので、歡樂境としての要素を全然欠いてゐる。

から云ふ風に、假令、變形的なものにしろ船宿が發達したことは、當然サービスガールの需要が起り、これが供給を促進せしめたことはいふまでもない。否、それが變態であればある程その需要は最も熾烈である。で、結局神田川には柳橋藝妓を產み、銀座界隈にあつては新橋藝妓を產むの機會を造つた譯けである。

土地に藝妓が出來てからの屋形船は、恰も今日に見る待合ひの延長の如きもので、船中へ酒肴を運びしん猫といふ粹な寸法で、だん〳〵と深みへ這入つてつ行たものだ。全く當時の川柳子がいつたやうに、『船宿の女房、深みへついと突き』で、馴染の藝妓と船で出るやうになると、恰もが船だん〳〵と深みに向つてゆくやうに、二人の仲は切つて切れぬ仲になつたものだ。

そして又、歸つて來ると此度は船宿の二階でおだを揚げることになつてゐたものだ。だからかうなると今日の待合と寸分間違ひのないものではあつたが、しかし、當時に於ける屋形船の遠出は、水轉のお客では出來ない藝當だつた。つまり或る意味での二次會であつたからだ。

尤も昔の船宿は其の構造が略ぼ一定され、間口が二間半で奥行きが九尺內外で、而かも二階が普通二間と限られてゐたと云こと。そして、猪牙船の船賃は、一日が三分二朱で、船頭の祝儀が二朱で、辨當が一朱と相場が定つてゐたといふことだ。尤もこれは維新前のことである。又猪牙船は、單に客の送り迎へをする用具として使用されたものだ。此の場合には多くは宿の主人などが、幇間として乘り込み、圍碁や、將棋の相手などをしてゐたものだつた。

それが明治になると船の構造が、待合と同じやうになり、實質も亦待合と寸分變らないものになつた。

現在銀座に存する遊船宿は、兵庫家と、中村家の二軒であるが、しかし、銀座五業中の一業を占め、而かも斯界に於ける古株として二軒共羽振りを利かせてゐる。つまり待合茶屋の老舗として目されてゐるのである。

何れにするも船宿が、銀座をして歡樂境たらしめる一つの動機を興へたことは、何人も否定することの出來ない事實である。

【三】歡樂境銀座への第二歩（A）

歡樂境銀座への第二歩は、何んといつても銀座界隈に於ける料理、飲食店の發達であつた。つまり銀座をして歡樂境たらしめる爲めの動機をつくつたものは、一方に於ては遊船宿であり、他の一方に於ては、料理飲食店の發達である。少くとも此の二つが、サービスガールの擡頭を促進し、歡樂境への道程を形造つたものである。

そこで先づ銀座界隈に於ける飲食店として、其の最も古い歷史を持つものは、いふまでもなく新橋際にあつた信樂茶屋であう。此の信樂茶屋は或る一說によると、銀座の埋立後間もなく出來たものであるといはれて居るが、全く多くの古書にも其の名が見える。が、兎に角信樂茶屋は、單なる腰掛け茶屋で、其の名を待合茶屋とはいつてゐたが、一種の水茶屋に過ぎなかつたものである。しかし、これは江戸に於ける三大茶屋でもあり、銀座に於ける一つの名物でもあつたのだ。

殊に信樂茶屋は、維新當時まで永續してゐたといふから、

江戸から明治への歡樂境銀座（二）

其の間二百數十年、同じ場所で、同じ屋號で、而かも、同じ商賣をやり通して來たといふことになる。全く其の名物としての存在にふこさわしいものがある。

信樂茶屋の由來に付いては、別に確たる記錄も殘されてゐないし、又これといふ說も見當らないが、しかし、或る一說には、山城國信樂—つまり其の名は茶の產地としての信樂から來たものであるから、多分其の先祖がこゝから江戸に下つて、待合茶屋を始めたものではなからうか。かういふ說もある。といふのは、元來、此の茶屋はお茶を賣ることが目的で古書にも見える如く、店頭に大きな茶釜が据えられ、茶汲み女がそれを汲んでは客にサービスしたものであり、又商人の寄り合ひ、開帳の出迎へなどにもこれを用ひたといふことであるから、無論、お茶が信樂の看板であつたのはいふまでもない。

銀座には此の外にも花岡といふであり、又新橋には玉の井といふのがあつた。無論、二軒共腰掛け茶屋で、其の名の示すやうに常時淺草仲見世邊りにあつた水茶屋に類するもので今日に於ける待合茶屋とは甚だしく異にするものである。しかし、これも銀座に於ける飲食店のらんちやうに外ならない。

江戸時代銀座に於ける料亭としては、嘉永二年頃にあつた木挽町の西應寺前にあつた萬屋喜平といふのを擧げねばならない。こゝは速席料理を看板とするもので、無論、醉月樓萬彥のやうに、高級なものではなくて寧ろ一般料理に近い大衆的な家であつたらしいが、しかし仕出しもやり其の頃ちよつと賣り出してもゐたらしい。が、兎に角仕出しは遠船宿邊へ運んだものらしく、而かも、それが爲めに速席の文字を冠したものではなからうか。尤も其の頃の速席と云ても當になつたものではない。何故なら、客の注文によつて玉川の上流まで早馬を立て水を汲ませるといふやり方であつたから、速席といつた處で、狼狽して材料の注文に出かける位ひなことはやり兼ねないからだ。

それから又土橋際の淸水樓、銀座の三汲、日蔭町の伊勢源、伊勢源を除く外の二軒は、仕出しを兼ねてゐたもので、矢張り船宿邊りへ料理を運んで居たものらしい。が、兎に角何れも可なり古い店で、殊に伊勢源は、明治三十四年頃まであつたものだ。即ち伊勢源が、明治三十五年頃突如として廢業すると、其の跡を襲つて出來たのが明月樓であつた。明月樓は明治大正にかけて、可なり繁昌したがこれ又廢業して現在はその蔭を斷つてゐる。何れにするもこれ等の古い料理店が藝妓の擡頭を促進し、その發達を助長したことは前に述べた船

宿の場合に於けると敢て異なる處がない。つまり自分達の發展をより速やかにする爲めにサービスガールの希望し、促進せしめた譯けだある。

【四】 歡樂境銀座への第二步（B）

銀座界隈に於て、其の歷史が古く高級な店と云へば、采女ヶ原の醉月樓萬彥であつた。醉月は嘉永の初期にあつては、江戸に於ける有數の料亭で、其の頃、江戸一番と云はれてゐた淺草山谷堀の八百善に次ぐ高級割烹店の一つであつた。少くとも久保町の賣茶亭や、枕橋の八百松以上の高級さであつた。尤も明治初期に於ける賣茶亭は素晴しいものであつたがしかし、少くとも嘉永年間頃にあつては、醉月萬彥は多くお留守居役などの出入りする料亭で、その高級を詠はれたものだつた。

つまりサービスガールとしての藝妓のない時代に、料理一方で立つてゐた店であつたから、其の高級さの程は押して知るべしである。況んや、其の頃の特殊階級であるお留守居役が我こそ天下の食通と許り、暇に任かして食ひ分けをする家だつたから、可なり精選して居たことには何んの疑もない。殊に、當時の記錄を見ても、其の間の消息を知るに足る。

兎に角、醉月樓萬彥は、其の頃貸座敷と、會席料理とを兼ねてゐたのであるから、多く宴會などをやつたものらしい。つまり暇人としてのお留守居役達の集會場でもあつたのであらう。

少し離れては居るが、芝久保町の賣茶亭も亦、新橋花柳界の爲めには、ひどく貢獻したもので、少くとも新橋藝妓の擡頭を促進し、一度びこれが出來たことによつて、其の發展を助長したのは、醉月に於けると殆ど選ぶ處がなかつたものだ。

賣茶屋は、其の頃からひどく奧深い家で門口から玄關まで可なり長い間敷石が敷かれてあつたものだ。しかし、其の敷石をうつかり藝妓などが踏んで這入らうものなら、ひどく叱られたと云ふことだ。それ程、賣茶亭は、嚴格な家であつたそうだ。しかし、又其の半面には、とてもよく行き屆いてゐるので、藝妓達はこゝの夫妻をひどく尊敬してゐたものだ。

何れにするもこれ等の料亭が、藝妓の需要をつくつたのは以上の如くであるが、藝妓の出來ない以前に於ても、所謂、お師匠なるものが、藝妓の代用として、三味線を彈き、唄を唄ひ、藝妓と少しも變らないサービスをやつてゐたものだ。此の時代を稱して田中嚴氏は、お師匠時代と云つてゐるが、誠に適切な言葉である。

（以下次號へ）

丸の内といへば元江戸城の廓内の總稱で、太田持資の築城當時は處々に淺瀬があり、蘆荻の繁茂してゐた事は言ふまでもない。

徳川時代は大名小路と稱し、諸國諸大名の屋敷が所在してゐた。當時大名小路の二大名物門とされてゐたのが、因洲候邸の表門と岡山候邸の表門。前者は楠の一枚板で現在の高輪御所の表門がそれであり、後者は欅の一枚板で、これは同じく高輪の岩崎男爵邸の表門に變つてゐる。

有樂町、永樂町、八重洲町と、この三町名に今はなつてゐるが、元の邦樂座今の松竹劇場のあたりが南町奉行所で、呉服橋の鐵道省の所が北町奉行所、鍛冶橋の舊警視廳跡は收賄の元祖みたいな吉良上野の邸だつた。東京驛は黒田松平二侯の邸跡だ。

町名の由來を探ると、有樂町は織田有樂齋の幕府から貰つた屋敷があつた事から、永樂町は天正年間伊勢與市が永樂錢一枚で錢湯を開業したこと事から。八重洲町は國定教科書でお馴染の和蘭人ヤンヤウスが柳營から邸宅を賜つた事から、夫々由來してゐる名である。

日比谷の名が漁夫の入江中に立てておいたシビから起つた事は御案内の通りで、今の交叉點側のには、維新前まで本多中務大輔の屋敷があつた。後岩倉侯の屋敷となり、更に中山侯の屋敷となつた。

大東京の中心丸の内の大部分は三菱の地所であるが、之は舊幕時代諸大名の屋敷であつたのを政府で沒收し、後、陸軍省の所轄となり、練兵場となつたのを、明治二十三年岩崎彌太郎が拂下げといふ名目で時の政府から無理に押付けられたもので、總坪數約七萬餘坪、拂下げ値段約百萬圓、坪當り十四圓餘であつた。

當時世人は茫々たる草原に百萬圓を投出した三菱の度胸にびつくりしたものであるが、爾來四十餘年、今や丸の内の地所は一坪二千圓以上或は三千圓と唱へられ、買收當時の百六十倍乃至二百倍に上り、今の相場にすると約一億五千萬圓、坪當り二千三百圓となつてゐる。

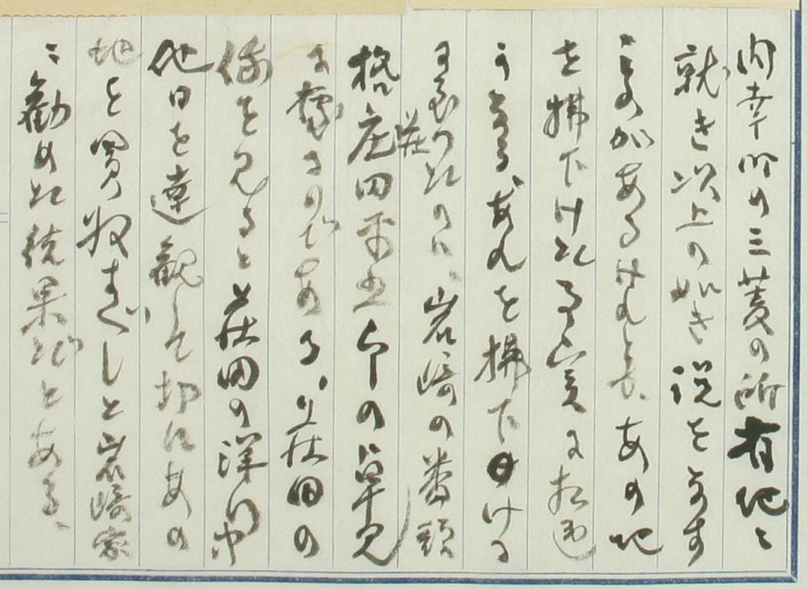
舊江戸城の門が丸の内に明治初年（四、五年頃まで）まで殘されてゐた事も、知つてゐる人が多からう。その四門とは、一數寄屋橋門、二鍛冶橋門、三呉服橋門、四日比谷門の四つで——

一は織田有樂齋が數奇をこらした邸宅を營み、橋の袂に數寄屋を建てた事から起り。

二は家康入府に際し、三州から御用鍛冶野原又七を連れ來り、冶工の國役を司らせ、屋敷をこゝに賜つた事から起り。

三は幕府の呉服類御用商人後藤縫之助の拜領屋敷のあつた事から起り。

四は日比谷郷の地名から起つてゐる。



書物の存亡

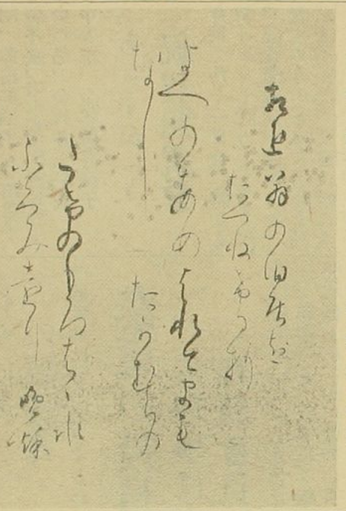
赤堀又次郎

學者にとつて書物は生命と倶に大切なものである。明暦大火の正月十九日に、林道春の藏書は八代洲河岸の本邸の銅板で包んだ倉庫で燒失した。上野の今の山王臺にあつた別邸に於て若干の書籍は殘つたが、道春は火を避けて本邸から別邸へ立退き乍ら、銅庫の燒失を聞いて悲歎やまず、其月二十三日に、年七十五で死んだ。

これは昔の事、先年の震災では各所で多くの書物が燒失した。東大圖書館各研究室、外國語學校、御茶の水の女子高等師範、黑川博士佐藤誠實博士南條文雄博士等の手澤本、靈雲寺の覺彦比丘の遺書、經節問屋人扇の藏書一庫、井伊水戸高松藤堂諸家の所藏、河竹氏の藏書、近年集められた安田氏の松屋文庫等、すべてが烏有に歸した。

故木村正辭博士秘藏の萬葉集數種、萬葉古義の稿本、荷田東滿の萬葉の注、名古屋關戸氏珍藏の書若干等もまた無くなつた。宮內省の諸陵寮の所藏全部、維新史料編輯局へ他より借用の貴重書若干等も燒けた。內務省大藏省文部省印刷局等のも見られなくなつた。

燒けた量は夥しいが、殘つた量も少なくない。然し質に於ては一致しない。人間世界に唯一つのみで二つと存在しないものが多く燒失してゐる。出版條例によ



小色紙　神郡晩秋氏

る二部の納本の中、一部は帝國圖書館に殘り、一部は內務省でなくなつた。マクスミュラー文庫は東大でなくなり、モリソン文庫は巢鴨の岩崎別邸內に殘つた。岩崎氏の靜嘉堂文庫は、先年駿ケ臺から高輪邸に移された爲に殘つた。其後に至つて玉川の砧村別邸內に更に移された由であるが、之は萬全の策である。昌平坂の聖堂は燒けたが、その藏書は博物館內閣記錄局宮內省圖書寮等に分けて殘つたので殘つ賴圀博士の遺書は西大久保の無窮會に移されてゐたが爲に無事なるを得、軟派もの清原家のものだけが傳のは早大及び帝國圖書館に引渡された。屏風藏一棟、物置藏一棟は、德川家の私有品として、封印して預つたが、どさくさ紛れに全く紛失してしまつた。稀代の逸品がこの時どれだけ散佚したか知れない。その中の文庫は矢張り官軍に引繼がれて今は內閣記錄局に殘つてゐる。中若干部は先年宮內省へ移された。

この紅葉山文庫傳來の中に、金澤文庫の舊藏及び慶長時代に皇室から賜はつた物などがある。更に遡つて言へば、金澤のものは、京都の清原家から傳はつたものである。菅家、江家等儒道の家の書は遺らぬが、この清原家のものだけが傳つた事になる。

單に文集とのみ題してある白樂天の集は、留學僧惠孚が親しく樂天に逢つて寫したものであるが、其の折のものとも見られる古寫本が金澤に傳はり、天正中豐臣秀次の手に收められ、其後轉々として近年久原文庫に入つた。

天正十八年小田原落城の折に、鎌倉幕府の記錄東鑑と後三年の繪卷とを北條家から家康は得た。この東鑑に據つて幕府建設の歷史を知り、その歷史を基礎にして江戸幕府を立て、太平政策を開き、各地から書籍を集め、かつ出版をもするやうになつた。その集めたものを紅葉山におき、例の明暦大火にも免れ、其後代々の將軍の時に漸次に增加したのである。これは皆無事であつた。

古の太政官の記錄は、其よつて安全を保たれたが、帝大のは亡びた。

舊紅葉山の靈屋の側に、一廓をなして寶藏か數棟あつた。其の中の鐵砲具足類は維新の瓦解の折に官軍へ外記の役を代々勤めた壬生家に傳はり、源平應仁の亂にも掠奪を免がれ、繼續して明治まで記錄され、近年宮內省に納められて無事である。御堂關白道長以後歷代の日記を傳へてゐる近衛關白家の收藏も無事火を免れた。二條關白家のは古く舊幕へ寫し傳へられた。諸家の記錄を最も多く集めてゐる柳原家の文庫も無事なるを得た。京都其他から夥しく集めた前田家のも立派に存してゐる。伏見宮家のも完全に傳はつてゐる。光嚴院の宸記は今宮內省に保管してある。中原の康富及び師茂の記は帝國圖書館に存してゐる。往年の華族女學校の火災には竹屋家の舊藏を、震災では東大で野宮廣幡諸家のをなくした。明治廿五年四月十日の神田火事では勘解田小路文庫が燒失した。書物の存亡——無量の感なきを得ない。

暦本

——伊勢暦を中心として——

三村清三郎

暦といへば伊勢暦に限るやうに思はれるが、實は伊勢暦の刊行は寛永このかたらしい。今は伊勢の神部署からばかり頒布されるから、結局暦といふものは伊勢に極つた形だが、已に伊勢暦といふからには、他所の暦と區別しての名稱でもある。全體伊勢神宮の御師が御祓を配るのに添へて、土産として檀家へ贈つたのが暦の普及になり、隨つて伊勢暦の名が高くなつたのであらう。事によると、三島暦あたりが却て古いのではないかと思はれる。伊勢でも多氣郡丹生の加茂杉太夫の方が、普通にいふ山田の伊勢暦より古い。山田の暦は、傳ふる所によれば、森若太夫が寛永八年からで、箕曲甚太夫が寛永十二年からださうであるが、其頃の暦は少いと見えて、私は未だ寛永の伊勢暦を見てゐない。箕曲のあとの人の話にも正保よりしか暦は殘つてゐないさうである。山田といふ所は外宮様の所在地で、古くから繁昌してゐた、内宮様の所在地である宇治を凌ぐ概がある。暦も山田の方が早く、宇治では正德五年になつて初めて暦の刊行を屆出で、享保元年に今在家町佐藤伊織から刊行した。私の知つてゐる日本の刊行暦で所の分つてゐるのは、伊勢暦、丹生暦、南部暦、京の大經師暦、會津暦、三島暦、これだけだが、沼田頼輔君も暦に氣を付けてゐる一人で、沼田君の話には、河内暦、薩摩暦があると言はれた。『以文會筆記抄』に琉球暦が見え、明治元年松平慶永建議にも『製暦之儀是迄於德川家致來候得共素々鎌倉時代ヨリ唯今ニ至迄モ薩藩ニテ製暦仕候……』とあるのを見ると、薩摩暦或は琉球暦があるのであらう。伊勢暦はもと〳〵

京の大經師暦に因つた物で、土産として配るといふ名目で、賣ることはならぬのである。それが爲め、貞享にも享保にも京の經師から尤めてゐる。伊勢暦は土御門家から原稿を申下して、それを刻した。只特色として八十八夜とか二百十日とか農家必要の事を書加へてゐると言つてゐる。誰の思ひ付きかこれを御祓に添へて檀家へ配り出してから、評判がよく大層調法にされ、段々廣く行わたり、需要が多いので、京の大經師に仰ぐよりはと、所で刊行し初めたものと思ふ。これを白人暦師と稱してゐる。確に善い株に違ひない。そこで寛永十九年には、森と箕曲と訴訟をしてゐる。森は獨占權を犯されたといふ主張であつたが、其は兩人とも加茂杉太夫、卽丹生暦から受け繼いだものとして箕曲が勝訴になつた。箕曲が日參をして靈驗を蒙つたといふ話を何かで見た。其時の箕曲甚太夫は、名乘を在清と云つた。此人奉納の石の水盤が、松尾の觀音堂下にある。其後暦師は段々殖え、多少の出入もあつたであらうが、明治四年の指令で定められた弘暦者は、箕曲庸人、箕曲顯、山口石二、石丸弘人、瀨川磐雄、小林翁輔、西嶋中甫、飛鳥正圃、佐藤正二の九人が擧げられてゐる。これが略もとの白人暦師の後と思はれる。御師は土産にする暦を此等の家へ註文する、大凡得意も極つてゐるし、いづれも裕福であつたことは想像に難くない。文久年間には紙價が昂騰したといふ理由で、暦の値上げをしたので大紛紜を起した。御師の方では不賣同盟をして、急に京暦を取寄せたりした。龍太夫などの大きい御師では、十萬冊も註文してゐたのだから、京暦の出張所が出來やうといふ勢、結局暦師が折れて値下げもし、暦代の滯納さへ帳消しにし、刊行期日もこれからは間違へませんといふ事で和談をしたさうである。只伊勢暦と云つても大層種類のあるもので、値段も二匁七八分から一分内外までである。其種類も廣折金扉、金扉、布目、鳥の子、仙華兩戸、仙華大折、大折、諸口大折、中折、上紺、並紺、半紙折、雲形、卷、とこれ程ある。多分伊勢以外の暦にも色色種類があらうが、かうはあるまい。三島暦の上本に、名の所を空白にして置いて、あとでそこへ發行者の名を摺り入れたのがある。配布區域がさして廣くなく、上本などは發行部數が少いので、外から仕入れて自分の名を入れたものと見られる。明治三年に全國の弘暦者が申合せた分界書といふものを見ると、三島暦の河合龍節は、伊豆相模駿河甲斐安房とある。河合さんは三島の名望家で、町長もして居られたさうである。御尋ねしたら資料もある事と思はれる。彌維新になつて、此等の暦を統一せねばならなくなつた。明治二年八月に

暦本

一と先づ弘暦處分を土御門家に一任された。土御門家では、元暦寫本と號する例の暦の原稿を、暦師に下附して冥加金を徴收した。江戸では從來暦の原本は幕府から暦問屋へ下附し、其代りに諸役所の帳綴御用を無報酬で勤めてゐた。そして其暦の配布地域は、武藏上總下總常陸安房上野下野奥羽に及んでゐる。そこで暦問屋である大阪屋鱗形屋近江屋が連名で、私共も外の暦師同様、土御門家の下に屬して、帳綴御用を免じ、改めて冥加金二百圓を納め、從來の得意を守らせて貰ひ度いと願つた。願の通り舊來の江戸暦屋十一軒の株を認められ、『暦類ニ似寄候品一切彫刻致間敷候假令武家方ヨリ誂候トモ板木屋共堅可相斷』といふ嚴しい東京町觸が出てゐる。（但柱暦のやうな一枚暦の略暦の刊行は許されてゐる）そして翌三年の二月には土御門家から大學の所管に移して、土御門幸德井は御用掛とし、八月には其天文暦道局を東京に移し星學局と改稱した、然し其頃は實際の仕事をやはり京都でしてゐたらしい。其弘暦者を見ると舊來の暦師が判るかと思ふ。それは東京で福室長四郎、中村小兵衛、寺井新八、杉田德兵衛、金杉清三郎、吉田市兵衛、大森文之助、寺井新助、中村藤次郎、中村萬吉、渡邊勇助、京都で降谷明晴、菊澤藤藏、河合彌七郎、中島利左衛門、奈良で山村左門、中尾生善、吉川辰治、藤木忠儀、藤木芳雄、藤村百馬、藤岡和清、藤木良弼、山本保基、藤本保晃、中川安元、伊勢の山田で箕曲庸人、箕曲顯、山口石二、石丸弘人、瀨川磐雄、小林翁輔、西島中甫、飛鳥正圃、宇治で佐藤正二、丹生で加茂杉太夫、大阪で松浦善右衛門、伊豆の三島で河合龍節、會津若松で菊池茂樹、諏訪大祝、佐久祝、笠原祝の四十三人で、福室は大阪屋、中村が鱗形屋、寺井が近江屋である。四年には大學星學局が文部省天文局となり、五年には弘暦者側で、頒暦商社といふものを組織し、惣取締に京の降谷明晴を擧げ、東京大阪に支社を設け、事務を分擔管掌する事にし、冥加金卽之が稅金として、從來通り二萬兩納め、改めて其中の千四百四十六兩を兩社の費用に充て下して貰ひ度いと願ひ出た。所が五年に太陰暦を廢したので、どうしても政府事業とせねばならなくなつたと見え、然も從來株のやうになつてゐた弘暦者の立場をも考へてやらねばならず、そこで六年から向三ケ年間を限り、冥加金を免除して弘暦させる事にした。七年には天文局が廢されたので、暦の編纂は文部省の編書課でやつた。九年になると、弘暦者から、もう年限ではあるが、太陽暦になつてから暦が今迄の半分も出ぬ、三年間無稅にして頂いても、五年の改暦當時の缺損が埋らず、尙二萬五千圓の穴が明いた儘である、これを何とかして頂き

度い、それでなくばもう少し專賣權を延期して貰へまいかと、內務省へ歎願に及んだので、たうとう弘暦事務を內務省へ移し、尙五年間從來通り弘暦商社の存續を認め、圖書寮中へ編暦掛を置いた。太陽暦になると、月の大小も閏も春分秋分などが略一定してゐるので、略暦で間に合ふ、略本暦が一向賣れぬ、どうか略暦覆刻も頒暦商社の權限にして頂き度いと願ひ出たが、これは一般人民の不便を來たすといふ廉で許されなかつた。但類似暦が色々出來るので、十年暦から印紙を貼る事にした。此印紙は十五年暦で止めた。明治初年の暦を蒐めて見ると、このいきさつがまざまざと見える。そちこちしてゐるうちに頒暦期限の十四年が來た。初めは普通の書物の樣に、一般に覆刻頒暦を許す議であつたらしい。それは歐洲では日本のやうに、暦の專賣者は無いからといふ議もあつたのであるが、さうしたらば射利の徒の競爭が起り、誤謬紛亂して困るであらうと、色々議論もあつたらしい。十三年に伊勢の神宮司廳から、暦はもと〳〵神宮の御師が土產として頒布してから、廣く之が利用される樣になつたのでもあり、旁報本反始の御趣意からも、當廳で刊行頒布したいと願出た事があつたが、其時は允されず、十五年暦だけは、又頒暦商社に取扱はせたが、たうとう評議の末、神宮司廳の手に委した。然し司廳でやるにしても、實際の仕事となると、不馴では出來ぬので、十五年の五月に弘暦商社降谷の代理である林立守に委託し、十六年暦から伊勢神宮で頒布し、更に十八年暦から、公入札で請負はす事にした所、これも弘暦者の一人である山田の小林翁輔に落札した。所が用紙が間に合はなかつたり、色々故障があつて期日が來ても獻暦さへ出來ぬ始末、司廳でもすつかり困つて、十九年暦から直接經營といふ事にして、玆に初めて日本の伊勢暦が出來る事になつた。其種類は本暦、之は大きな冊子、其頃は廿枚足らずであつたといふ。次が略本暦の金帖、紫帖、黑帖、綴本の略本暦、小略本暦、これだけである。或一年何かの都合であつたか、印刷局で帖で無い分丈拵へた事があつたさうだが、其後は引つゞいて神部署で刊行頒布されてゐると聞いてゐる。私も慶長の假名暦をはじめ少々暦も持つてゐたが、もう今年は還暦だ、餘命も無いのに、成丈道樂を少くしようと思つて、此間皆人に進呈してしまひ、今參攷に資する何ものも無い、聞いて置いた話や、おぼつかない書留やらを忘れぬうちに綴り合せて見た。定めし思ひ違ひもありませう。有道是正。

（昭和十一年丙子立春）

閲覧室

枝南

本社提唱 春の新七草決定

全審査員一致の推薦

（昭和十一年三月十一日）

本社提唱「春の新七草」は熱倒的後援裡に殺到した推薦投票に基いて、横山大觀畫伯、菊池寛氏、牧野富太郎博士、與謝野晶子女史、長谷川時雨女史及び本社關阿部（象藝）伊藤（社會）兩部長の七審査員により、第一次選定を了し第六位のサクラ草七位のフクジュ草に代るに野アザミ、シュンランが昇格し既報の如くスミレ、ゲンゲ、タンポポ、ツクシ、ナノ花、野アザミ、シュンランの七種が選定せられたので、本社はこの社査委員會の結果を當日不參の岡田三郎助畫伯、佐藤春夫氏に報告、審査を仰いだところ兩審査員とも野アザミ、シュンランの昇格に賛同し、岡田畫伯は野アザミの如きは圖案にも古くから用ひられ、七種全體の色彩の配合も誠に妙を得てゐると激稱され

スミレ
ゲンゲ
タンポポ
ツクシ
ナノ花
野アザミ
シュンラン

た、更に渡歐途上の高濱虛子氏は南支那海航行中の郵船箱根丸からはるゝ〳〵無電をもつて春の野を彩る花の代表として七種とも好個のもの、但し若し七草に順位をつけるなら菜の花を第一位に推稱したいと俳壇の巨匠にふさはしい希望條件を付して賞意を表して來た、こゝにおいて第一次選定を通過した以上の七種は今や全審査員一致の推薦により決定的のものとなり、大方の識者諸賢の推薦投票と、文藝、畫壇の巨匠の審査とを經た「春の新七草」は名實ともに舉國一致的後援裡に、いよ〳〵その選定を完了、こゝに萬葉以來の「秋の七種」及び本社が昨秋選定した「新・秋の七草」と絶好の對照をなす「春の新七草」の決定を見るに至つた、自然美日本の可憐なる新象徴であるこれ等の草花は、南方日本ではすでに花開き、關東以北も靄く雪どけの原野を彩らんとしてゐる、この時にあたりこの優雅な企てに深い關心と後援とを送られた大方諸賢に謹んで謝意を表すると共にその結果を報告する次第である

自然美日本の象徴